

ある、原語の意義からいふと、普遍的投票といふことであつて、モ一層詳しく言ふと、國民をして普遍的に政治の上に聲を發せしめるといふことである、之れを我國の現狀に見るに、在來の制限選舉にあつては、國民の中、僅かに三百萬人だけが、其の選舉に與ることが出来るだけであつた、そして其の残りの大部分の人民は、毫も政治的に發言する權能がなかつたのである、苟も一國全體の休戚に關する政治的作用が、斯る偏頗なものであることは、到底國民の忍び得ざるところであらう。

勞働者の地位向上といふこと、之れも現代に於ける社會的要求の一つであつて、而も最も重大なものとされるのである、そこで吾人は、此の勞働者なるものに對して、仔細に觀察して行くと、其所に最も痛切な社會生活の緊張味に觸接するのである、經濟の境地が、生産の境地であり、生産の境地が、勞働者の境地であることを思へば、勞働が如何に社會的重要な事柄であり、同時に勞働者が、社會の要員として、自他共存の上に、最も大切な役目を有つて居ることが分るであらう。

勞働者が生産者であることは言ふまでもない、勿論夫れには直接のものと間接のものとがあるが、生産の結果に於ては、毫も區別すべきものではない、ところで此の勞働者の地位は、實際に於て最も難かしい立場にあるのだ、則ち彼等は一面に於ては、生産者であると同時に、また一面に於ては、其が生産によつて生活するものである、此のことは素より當然の事で、一寸見たところでは、何等不思議なこともないやうであるが、よく考へて見ると、其所に重大な意義が含まれて居る、ト言ふのは外でもない、彼等の生活は實際であり、而して其が生産は無限度であるといふことである、平たく之れを言ふと、彼等は其の生活に於ては、實際の外には出でぬのであるが、其が手によつて爲さるゝ生産といふ仕事には、素より何等の限定がない、モ一言葉を換へて言へば、彼等は其の生活に於ては七分か八分であつても、其の仕事は常に十分でなくてはならぬのである、彼等はたとひ現生活に疲れ果て、一片の澤庵と一椀の粥にヨボヨボした餘喘を保ちながらも、其の仕事、則ち勞働は極大限であらねばならぬ、此の様な事實からして、所謂能率なるものが生れ來たのである。

能率は仕事の分量の評價である、ところで一般資本家なるものは、此の能率なる鐵鞭を揮つて、何等の容赦もなく勞働者に臨んで居る、素より能率といふことも、一つの標準であるから、

仕事を運ぶ上には必要に相違ない、併しながら資本家にして、若し一片の道徳性を備へて居るものであつたら、彼等は其の能率なる鐵鞭を揮ふと同時に、労働者の生活に對する能率をも一顧すべき筈である、然るに世の資本家の多くは、決して斯うした行動には出でない、彼等は仕事の能率のみに視線を集中して、労働者の生活などには一向無關心である、最も貧弱な生活を與へて置いて、そして最も豊富な仕事の分量を得ようとするもので、一寸の小蝦を投じて、數尺の大鯛を釣らうといふ貪婪な漁夫の心事に髣髴たるものである。

けれども労働者としては、到底之れに反抗し得なかつた、夫れは自分の直接な生活に對して、資本家の投ずる幾片かの貨幣に跪かねばならぬからであつた、此の弱味のために、資本家は何所までも高飛車で押し通すのである、が社會の進運は、然う何時までも資本家の横暴を默認するものでなく、終に労働者夫れ自身に、大なる自覺が沸き立つて來たのである。

長夜の夢から目覺めた労働者は、窓の光りに驚いて、枕を蹴つて起つた、そしてつくつく、と自分の姿を眺めるにつけて、其のしがたい生活状態が、まさしくと眼前に現れて來たのである、之れでは自分達は、眞に人間らしい生活はして居なかつたのである、謂はゞ單なる一個の生物

として生きて居たのみで、社會の人間としての生活は得られなかつたのである、斯う考へて來ると同時に、彼等は彼等としての社交的生存の必要が理解された、そして此の理解からして、實際的社會生活を求めようとし、夫れに續いて、自分自身の社會的地位を進めなくてはならぬと覺悟したのであつた。

此の事は素より當然のもので、社會全體の上から見ても、労働者自身の地位向上は必要であらねばならぬ、併しながら吾人をして言はしむるならば、現代に於ける労働者にして、果して此の地位向上に對する根本的用意を有つて居るであらうか、先づ之れからして觀て行かねばならぬ。

資本家の横暴は勿論のことであつて、之れには何等疑ふところがない、が有體に言ふと、労働者其者に於ても、また不及の點が無いでも無い、夫れは餘りに日蔭者となつて、極度に屈辱されて居た爲でもあらうが、其の品性や人格に於て、より多くの改善を要するものがあることは、争はれない事實で無くてはならぬ、則ち労働者としての自覺は當然であり、其が地位向上も最大最要のものではあるが、其を企圖すると同時に、彼等は其の當然の義務として、内的の

充實を圖らなければならぬのである。

金縁眼鏡や腕時計を光らしたからとて、夫れで地位が向上したものではない、地位の向上といふことは、労働者としての社會的地歩を確立し、資本家に對しては、十全なる對等の位地を占めるといふことにある、デ此の向上をして遂行せしむるには、労働者夫れ自身の品性と行動を進めなくてはならぬ、之れ則ち內的の充實であつて、此の充實が無いといふのでは、眞の地位向上は爲し得べきものではない。

开は兎に角として、此の労働者の地位向上の要求は至當であるが、其の要求の手段方法に就ては、充分なる考慮を費さねばならない、萬一其が手段方法にして、宜しきを失した場合には、山々しい社會的争闘が起ると共に、却つて資本労働の兩者を驅つて、險惡なる谿谷へ導くものである、今日既に現れて居るやうな、勞資争議などが、已に業に其の傾向にあることを思ふと、將來に於て、勞資の協調を講じようとするものは、此の點に大なる注意を拂ふべきものである。

社會の改善であるとか、個人の向上であるとかいふやうなことは、決して單なる形式を以て始終すべきものではない、充分其の内容に突き進んで、其の實質から改めて行かなければなら

ぬのである、改良とか改善とか言つたやうなことが、例として抄々しい効果を齎らさないのは、全く此の形式のみの改善に汲々するからである、其の内容が依然として居て、たゞ外形が改まつたゞけでは、決して眞の改善ではない、狝猴にして冠したからとて、狝猴は矢張り狝猴ではないか。

次には官僚主義改正の要求であるが、之れも随分久しい以前からの要求であり懸案である、一體官僚主義とは何んなことをいふのであるか、一口に言へば、役人氣質といふやうなことになるが、實際に於て其の定義を下すことはなかく困難である、併し我國などには、昔から所謂役人風といふものがあつて、之れが隨時隨所に、充分氣儘な振舞をして平氣で居たのである、殊に彼の官僚政治など、來ては、其の放恣横暴は、逆もお話しにならぬ有様であつた、上は宰相大臣から、下は警察の小使までが、肩を聳かし鼻を蠢めかして得々たる有様は、眞に一種の奇觀たるを失はない、官權を口實にして汽車の只乗りをやる、一寸したことにも人民を嗷鳴り散らす、自分の私用で外出するのに役所の自動車を駆けさせる、機密と唱へて公金で待合遊びをやるものさへあるといへば、官僚主義も飛んだものと言はなければならぬ。

官僚主義といへば、何となく杓子定規が連想されるのも妙ではないか、イヤ單なる連想ではなく、夫れが全く杓子定規の親玉であるから呆れざるを得ない、何事も規則一點張りで、融通などが利く譯のものではないのだ、一にも規定、二にも規定、斯くして彼等は何物をも官僚化せずには置かない、制度文物も官僚的制度文物にする、學問藝術も官僚的學問や同じ藝術に化してしまふのである、思想であらうが何であらうが、其様なことには一向お構ひがないところに、官僚主義としての思ひ切つた放れ業が演じられる、何事であれ、みな公儀の御都合次第といふ増嶋へ投げ込んでしまふのが、彼等としての蠻勇的忠勤振りであらねばならぬ。

世の中に、一種の物議りや學者がある、京童は之に御用學者といふニツクネームを與へて居るが、之がまた始末に負へぬ官僚振りを發揮するものである、講座の上の講義から、著書や座談の意見發表に迄も、極めて重々しい勿體をつけるのが癖で、我れこそは天下第一の學者であるぞとばかりに、白眼を以て一世を睥睨する所は、實際堂々たるものであるが、サテ其の心事と來ては、實に沙汰の限りである、博士の肩書を振廻して人をオドカス所は、時勢の推移を知らざるバカセであらねばならぬ、大學教授の榮地を得んが爲には、多年研鑽の學説を托けて、

早速官學派學者に早變りをしてしまふ、大資本家の客分として、チャホヤされようがためには、一朝にして資本主義の學者に化するのである、何事も御都合次第で、権力と金力のある方へ自説を持つて行く所は、果斷であり、機敏であつて、到底並大體のものには眞似も出來ぬのである。曲學阿世の徒とは、正に此の様な人達を指すのであらう、が其の癖、此の様な人達に限つて、押し強いこと、言つたら大したものだ、偶々正廉潔白のものがあつて、其の人達の論議に一言でも容喙するとしたら、夫れこそ大した權幕でイキリ立つのが常である、そして諄々しく、而も猛烈に、自家辯護をオツ始めるが、後には辯解の領域を脱して、相手を散々に苛めつける、人身攻撃や、秘密の摘發、紆説曲言を逞うして、悪蛇の如く相手の身上に肉迫するのである。併しながら多くの人々は、此の様な徒には成るべく近寄らぬやうにして居るが、彼等は之れを以て、自己に對する周囲の服従と解して居る、権力あるもの、金力あるものは、一般民衆の口を封鎖すべく、如何なる場合にも此の様な都合學者を庇護するのだから、彼等はいよ／＼以てお高く留らざるを得ないのである、此の様な徒輩が蟠居して居る世界では、正義も人道も、全く氣の抜けたビールにも値せぬのであつて、文明とか文化とか言つたやうなことも、畢竟一場

の夢幻戯に過ぎぬものである。

方今官紀振肅といふ言葉が、一種の流行語となつて居る、ところで此の官紀振肅といふ事も、官僚主義の改正から、其の歩武を進めなければならぬ、官權の濫用、官職の曠廢、それ等が既に今の官僚式であらねばならぬ、之れからして改めて行くのでなくては、決して根本的な官紀振肅は出來得る筈がないのである、併しながら茲に一つ大に注意しなければならぬ事は、官僚主義は別に夫れとしての必要領分があるといふ事である、何事も官僚風に遣つて退けるのは宜しくないが、併し官吏としての仕事は、何所までも官僚主義で押して行かなければならぬ、官吏が其の仕事に對して、官僚主義を以て當らないとすると、其の仕事には、モウ官務としての實績が認められない事になつてしまふ、故に官僚主義といふ事は、官僚としての執務の（眞摯忠實）上のモットーたるに止め、其をして或る方角違ひの方面（人民に對して尊大ぶる）にまで及ぼさしめないやうに、劃然とした輪廓を附すべきものである、則ち官僚主義の改正は諒とすべきも、其の惡點病處を爰除せんとして、其が全體の能性を滅却してはならぬと思惟する。

夫れから今度は陪審制度の要求である、之れなどは西洋では以前から此の制度によつて裁判

機能を運営して居るが、此の制度を我國に實現せしめようとする事は、多大な注意を要すべきものである、勿論吾人としては、原則として此の制度に左袒するものであつて、何等之れに異議を有するものではない、併しながら、此の制度を拉し來つて、今直に之れを我國に當儀めようとする事は、餘程考へなければならぬ問題であると思ふ、元來此の制度の上に立つて居る西洋各國は、大體に於て其の民度が、迥かに我國の上にあることは言ふまでもない事實である、勿論我國としても、近年に於ける民度の發達は、實際驚歎に値すべきものであるが、まだ直に彼れの所能を取つて、其のまゝ我れに當て辨めるといふ程には訓練されて居ない、故に之れを取つて我れに移すにしても、先づ我が民度をして、此の制度に一致するやうに訓練しなくてはならないのである、元來制度によつて得らるべき美果は、直ちに制度其のものによつてではなくて、其の制度を運用する人間其のものによるのである、制度が如何に善美なものであつたからと言つて、其を運用する人間に夫れだけの能力がなかつたならば、決して文字通りの美果を收めることは出來ないに極つて居る、裏店の三公が正宗を手にしたからと言つて、決して一匹の犬さへ斬り得るものではない、イヤ晉に斬り得ないばかりか、時としては飛んでもない

怪我を仕出來すことが無いとも限らない。

陪審制度は、丁度此の正宗の名刀の如きものである、腕に覚えのあるものが之れを手にしたら、金鐵をも眞二つにすることが出來よう、併し夫れが反對に行くとなつたら、恐るべき不祥事が勃發するのである、陪審制が、社會の上にも、法の上にも、夫れ相當の知解を有する國民の上に行はれるとしたら、正に名刀正宗の働きを爲すものであるが、まださうした知解に乏しく、また何等の訓練をも經ないもの、上に、漫然として其が運用を委ねるとしたら何うであらう、審判の精神を没却するはまだしもとして、時には恐るべき惡結果を齎すことが無いとも限らない、故に吾人は、最も眞面目に此の制度を研究し、其が出現を急ぐと同時に、また其の運用的適應性を得ることに突進すべきものであらうと思考するものであつて、徒らに其の名の美なるに眩惑し、直ちに以て之れを國民の裝身具たらしめんとする陋を指彈するものである。

一體日本人は、何事にもあれ、西洋の文物でありさへすれば、夫れが究竟的に善美なものであると考へる癖を有つて居る、成程西洋あたりは、早くから文明の機運に育成されたのであるから、夫れ相當に善美と目すべきものが尠なくない、併しながら夫れが善美であるから

と言つて、直ちに我が用となすべからざるものもあることを忘れてはならない、方今の世の中は、孤立の世の中ではなく、何事も國際的といふことが必要になつて來たのであるから、西洋の文物などに特別の注意を拂ふことも必要であらねばならぬ、けれども其の根柢を異にして居る我々としては、西洋の文物を選択する場合に、此物が實際我れに適合するか何うかといふことを考へ、たとひ夫れが適合すべき可能性を有つて居るとしても、直ちに之れを受取るべきものか、または何等かの加工の上にてか、或はある一定の時期の上にて取入るべきかといふことを、最も賢明に考へなければならぬ。

世の中には案外西洋心酔者が多いのであつて、手の届くだけ西洋のものを取り込まうとする、然ういふ人達の考へでは、苟も西洋に現存して居るものを、たとひ一つでも取り入れ損ねたとあつては、文明人の大なる耻辱である、彼れに於ける文物の一つにても取り損ふといふことは、取りも直さず夫れだけの文明落伍者であると考想するのである、之れが則ち西洋心酔者の心酔者たる所以で、彼等の頭腦には、既に事物の辨別性さへもなく、其の意識の判斷力なども全然麻痺し去つたものと言はなければならぬ、苟くも國民全體の利害休戚に關する文物や制度に對

し、此の様な病的思想を以て、何の用意すらもなく、卒然之れを受け入れようとする事は、大に慎まなければならぬところであらう。

貴族制度改正の要求、デモクラシーの要求としては、之れなどは如何にも提出さるべき性狀のものであらねばならぬ、一體民衆思想家の眼中に於て、常に一種の暗影を投げられて居るものは、貴族と稱する特權階級と、資本家と稱する經濟壟斷階級である、そして貴族といふ階級に對しては、彼等は往々にして無用の長物であるかの如く考へて居るらしい、否其が中に於て最も極端なるものは、貴族の存在を害物であると考へ、其を社會から排斥しようとするさへ考へて居るものもあるらしい、とは言へ穩健なる流派に立つものにしても、國家の立場として、また既定制度の一事相として、仕方なしに貴族の存在を認めて居るに過ぎないのである、が其の存在の認定は、肯定的の認定ではなくて、寛容的の認定である、必要としての認定でなく、現存による認定である、故に彼等は、あらゆるものに就ての改正的要求を提起せる如く、また此の貴族制度に就ても其が改正を要求するのである。

何事も改善々々で進んで行かうといふ今日にあつて、然うした改正の要求もまた餘儀なきも

のであらう、併しながら、徒らに改善の流行にのみ提はれて、何等の顧慮もなしに、漫然として其が改廢を叫ぶといふことは、無意義であり徒勞であらねばならぬ、之れを我國に觀ては、所謂華族なるものは、優に或る特權の所有者として、國民の階級間に、特殊の待遇を受けて居るのであるが、此の特別な權利と、特別な待遇の享有が、果して時代的に適應されたものであるか、また夫れが理法的に當然のものであるかといふことを、最も冷靜に、そして最も公平に考へて見なければならぬ。

我國に於ける現行の華族制度は、明治時代の中葉の初期に布かれたものである、勿論其の當時にあつては、封建制度廢止の後間もなくであつたから、斯うした制度が布かれたといふことも、まつたく致し方なきものであつた、我國の封建制度が廢止されて、大政維新といふ大なる事業が遂行された際として、華族なるものが出現したといふことは、其の實狀に於て、稍や諒とすべき點はあらう、併しながら、我が華族制度は、其の當時に於て伊藤博文が、外國の貴族制度を模倣して布いたものであるから、素より日本固有のものでないことは上述の如き次第である、で斯かる華族制度が布かれる以前、則ち廢藩の直後に於ては、畏くも古今東西に比なき英

明の聖天子、明治大帝の時務に達識せる大御心から、みな四民平等とされてあつて、其の間に何等の族稱なく、いはゆる特權階級など言ふものは存在しなかつた、ところが其の當時に於ける新しがり伊藤博文が、わざ／＼斯かる制度を設け、皇室と國民との間を割き、國民全體をして繼子扱ひにし、其の結果は國民の心に階級觀念を培はせ、今日に於ける階級争鬭の種を蒔けるを見て、吾人は此の目先の見えぬ偉人、國家百年の大計を誤まれる大政治家、西洋かぶれの元祖、思想中毒の親玉たる伊藤博文の愚を笑はざるを得ぬのである、華族と士族と平民、それは上等と中等と下等とを意味するやうなもので、則ち華族をして高等人種の觀あらしめ、我々平民たる一般民衆をば劣等視し、人を愚にするも甚しと言はねばならぬ、ところで爵位を拜受し居るもの、必ずしも眞譽なる人格の光輝によつて得たものではない、彼等は口を開けば直ちに皇室の藩屏なりと傲語するが、國民皆兵たる今日に於ては、國民みな等しく皇室の藩屏であり、一旦緩急あれば陛下の爲めに嬉々として牙が生命を投げ出して惜しまぬ忠誠者のみであることを忘れてはならぬ、而も自己の建勳によつて華族に列せられたるものにして既に然り、況んや自ら無爲にして其が父祖の功績によれる所の爵位を襲ふて得々然たるが如き、今日に於

ける特權階級者流のあるを自擧するに於いては、吾人は其の無耻厚顔に呆然たらざるを得ぬのである、然るに其の父祖の功績なるものも頗る怪しいもので、幕府時代、時の將軍に我が妻を獻じたり替間の如き眞似をしたりして榮達したものや、また山賊の親方であつたものが政權の把握者が時を得ざりし時分に僅かの恩顧を着せた縁故を辿り、それに隨身して今日に至つたものなどもある、中には謂はゆる公卿の位る倒れといふて、内職をして漸く其の日を送つてゐたものなどがあつて、幕府から何等かの名目の下に交付された取るにも足らぬ目腐れ金の前に叩頭百拜して其の良心を麻痺せしめたやうなものもある、斯かる無智や不良者の末裔どもが、君國に對して常に忠誠を念としてゐる善良なる一般國民に侮蔑の眼を投げ、自ら稱して上流社會と誇號するに至つては、其は身の程を辨ぜざる僭越沙汰である、ナニ華族は國民の儀表だつて、冗談いつちや困るぜ、詐欺や遊蕩や妾狂ひや小間使を弄ぶやうな儀表があるかい。

社會のあらゆるものは、時世と共に間斷なき進展を餘儀なくされて居る、則ち此の時勢の變化といふことには、華族夫れ自身も、また華族制夫れ自體も、何等かの影響的變化を受けずには居られぬ筈だ、果して然うであるとしたならば、其が制度の内容や、其の運用に就て、時勢の

變化に對應した、夫れ相當の改正を要すべきは勿論である、殊に今日の如く、隨分突き進んだ思想が横溢する新時代に方つては、其が改正の必要はますます加つて來ることは、如何にしても否定する譯には行かない。

何人も知れる如く、華族は世襲のものであるから、數に於て決して減少するものではない、夫れは偶々辭爵や失格などがあるにしても、敢て全數に影響を及ぼすやうなことは無いのである、けれども眼を轉じて其の増加する有様を見ると、之れはまた隨分多く殖えて行くことに驚かされるのである、最初華族制が布かれた時と、現下に於ける華族數を對比したならば、將來に於ける増加が思ひ遣られるのである、此の増加は、言ふまでもなく新華族の簇出に因るのであるが、此の事は社會に於ける如實の一世相として、大に注意すべき事柄であらねばならぬ、夫れでなくてさへ、動もすれば鼎の輕重を問はれる華族其のものが、減ることなしにドシドシ殖えて行くといふのは、國家のためにも、社會のためにも、決して善良な現象であるとは言へない、勿論華族としての地位と待遇とを受けるには、夫れ相當の理由があるに相違ない、舊公卿や舊大名のことは別としても、何爵と稱せらるゝものは、必ずや理由が存するものである、

そして其が理由は、原則として國家に勤勞功勳があるものといふのである、併しながら國家は素より永久的のものであつて、國民としての勤勞や功勳は、無窮に發現されるものであるとしたら、後には華族を以て國家を充墳することになるかも知れない。

斯る華族の著しき増加といふことは、一に華族制の缺陷から來るものであると言はねばならぬ、果して華族制に、此の缺陷があるとしたら、一日も早く之れが改正を要すべきもので、一日を長うすれば、一日だけの弊害を齎すものであることは言ふまでもないことである、尤も識者達の中には、夙に此の問題に注意するものもあつて、時あつては其が警策を鳴らすものもあるが、何しろ問題が問題であるだけに、力ある反響を聴くことが出來ないのは、邦家のために痛歎に堪へぬところである。

其が識者達の議論の中には、所謂一代華族論もあれば、爵位遞下説もある、何れも一應の道理があつて、華族増加に對するものとしては、可なり有効な對策ではあるが、例によつて其の實行は實に至難であらねばならぬ、則ち華族の地位に對して、改造の一指を染むるといふことは、事實に於て最も重大な位置に立たなくてはならない、斯る場合に當然起るべき現象は、華

族全體を通じての反感であつて、夫れと同時に華族は、自己の特權を擁護すべく、或は貴族院を擧げて、政治的に大なる反抗的逆襲を試みないとも限らぬのである、此の様な場合に方つては、政府に如何なる覺悟や自信があつても、其を敢行するのは容易な業ではないのである、ダカラ從來二三の内閣が、此の企圖を劃策したのもあつたが、其の結果の重大なるべきに怖氣づいて、何れも有耶無耶の中に、泣寝入りとなつてしまつたのであつた、けれども今日となつては、モウ何うしても此のまゝに放置しては置けなくなつた、時勢の急轉直下は、突進して階級打破などが叫ばれるやうになつては、如何にしても此のまゝにはして置けぬのである、階級打破など、いふのは、謂はゆる危険なる思想として、素より排斥すべきものには相違ない、が兎に角斯うした思想が、密々の裡に力を得て行きつゝあることは、事實の上に於て否定することは出来ない、則ち之れを今日に於て、何とか適當に處理することが、國家の大策として、最も喫緊のことであらねばならぬ、此の際に方つて、華族の問題の如きは、必ずや適正穩健の改革を加へて、少しにても思想界の善導を策するやうにせねばならぬ。

然らば如何にせば華族の制度を適正穩健に改革することが出来るであらうか、之れが次で起

り來るところの問題である、併し前にも述べた通りに、其が改革を斷行する上には、幾多の情實的困難が生起するのであるから、之れを其の現形のままに制限することは適切でない、吾人が思惟するところでは、既成は既成として之れを現在の儘とし、而も其を一代限りにして廢絶せしめ、以後成るべく新華族を簇出せしめぬやうにしたならば、最も自然公平な、そして最も穩健適正な手段の中に、よく改革の目的を達することが出来るのである。

之れを要するに、所謂一代華族論の實行と、華族の濫造を禁遏すること、を以て、彼の明治維新直後に於けるが如き、四民平等なる、公正なる無階級の狀態に復歸さすべきである、之れを我國の過去に見るに、何か一寸した事件でもあると、すぐ新華族の二人や三人は出来る、一國の興廢に關する様な重大事に際しては、夫れも是非なき事であつて、絶大なる功臣を遇する上に於てはまた已むを得ぬことであるが、一寸した國際的の談判や交渉に出掛けて行つても、何々男爵や何々子爵が造り出されるといふことは、決して賞讃すべきことではない、此等は君側に奉侍して、奏請の任に當るもの、千思萬考すべきものであると思ふ、夫れからモ一つ重要な問題は、華族の政治上の特權を廢罷することが夫れである、左なきだに我國の如き、往々

にして華族は其の特権政治を弄び、貴族政治や特権政治が出現さるゝに於ては、憲法政治に於ける矛盾政治として、かゝる政治上の特権をば、華族からして分離さすべきものであつて、之れこそは眞に時運の要求に適合する所以とせねばならぬ。

第十五章 過激的社會主義より觀たる思想中毒

デモクラシーの要求に就ては、前章に其の概要を述べたが、此の要求と前後して、可なり急激に擡頭して來たのは、無政府主義と稱する一派の主義主張である、此の主義に就ては、後の章に於て更に詳細に述べようと思ふのであるが、今順序として、茲に其の一斑を述べて、民衆の要求が、果して那邊にまで及びつゝあるかを知るべき、一の資材に供しようと思ふ。

此の主義に於ける重要な根據は、其の出發點を自由平等の境地に有するものである、そして其が主張としては、何所までも無拘束であらねばならぬといふのであつて、自由と平等に對する、極端なる渴仰者であると言へよう。

彼等は其の信條に於て、政府なるもの、存在を否定せんとするものである、則ち彼等は治者階級を以て、人間の集團に大なる支障を與ふるものであると思惟し、其が廢止によつて、人々は眞の自由と平等に生き得らるべしとするのである、此の場合彼等が夢想するところは、狭き集團の輪廓を除去し、廣き單一なる人類の集團を造り出し、夫れによつて、相互扶助の社會を現前せしめようと企圖するものである。

此の極端なる彼等の自由平等主義は、素より社會の總てに反抗したところに醸成されたものであるが、其の主たる主義の原基は、全く經濟上の平等主義である、而して其の平等は當然絶對の平等であらねばならぬと主張するもので、此所に彼等の大なる缺點が見出されるのである。共產主義者以外の社會主義者は、原則として相對的平等を主張して居るのである、則ち共產主義に於て絶對の平等を主張するに對し、彼等は出發點の平等を主張する、此點に於ては、共產主義者の主張などに比して、稍や意識した平等觀に立脚するものであると言へよう、共產主義の主張するところのやうな絶對平等では、全然社會の競争が廢止されてしまふことになる、人々は無條件に平等無差別の分配を受けるとなれば、何等生存上の競争を爲すべき必要がない、

遊んで居らうが、寝て居らうが、生命のある限りは平等の分配を受ける、成程一個の生物としての人間には、之れほど結構なことは無いではないか、人生の悲哀とか、世の中の痛苦とかいふやうなことは、多く其の生活から生れる悲惨であらねばならぬ、働いても喰へぬといふところに、人間苦はしみく感じられるのである。

が共産主義の主張するところでは、人間は何も働きを以て第一義とするには當らないことになる、則ち事實に於て、働かざるものは喰ふなかれといふ原義を滅却するものである、懶けもの、ためには、至極都合がよい話であるが、夫れで社會は圓滿に進展されるものであらうか。

既に競争を有たぬ社會は、最早退化の外はないのである、元來社會の進歩なるものは、競争を外にしては、決して之れを招來さるべきものではない、故に眞に社會をして如實に進歩せしめようとするには、競争によつて、各人の能力を充分に發達せしめなければならぬ、之れには社會全般として、各人の能力發達に對し、其が機會を與ふることを必要とすべきである、併しながら茲に一考すべきことは、斯くして爲さるゝ各々人々の競争は、最も理義あり、且つ秩序あるものであらしめなければならぬ、競争が一變して、由々しき争鬭を生むことは、世の

中には屢々目撃されるところであつて、之れを無關心に放任するといふことは、危険千萬であらねばならぬ、故に是れがためには、其の競争をして、更によき條件の下に營まます必要が起つて來るのである。

デ競争といふことは、互ひの能力の力比であつて、之れにも夫れ相當の道具立てが必要であることは言ふまでもない、何等の道具もなしに、徒手空拳にして競争場裡へ飛び出したからといつて、何等得るところがある筈もない、夫れ相當に競争に参加し、思ふ存分優勝の地に立たうとするには、道具が無くては叶はぬ、道具とは何であるか、武器である、武器とは何か、知識と資本である。

此の知識と資本は、社會的競争場裡に立つものに取つて、何うしても無くてはならぬものであるが、之れを社會の實際に見て、此の二つのものが、如何なる状態によつて競争者に與へられて居るであらうか、共産主義以外のものは、此の情況を捉へて來て、开が社會主義の一部となしつゝある、則ち知識としても、資本としても、其の分配が悉く偏頗的であり、不公平であるといふのだ、彼等は此の點に出發して、其が分配に對する多くの註文をなしつゝある、そし

て中には、共産主義は宜しくないが、其の主義以外の制度で、苟も資本を要するものには、何人にも之れを興へるようにならねばならぬと言ふものすらあるのだ。

仔細に之れを観察すると、所謂無政府主義共産主義なるものは、全く單なる主義として、感情の上に立脚されて居るものであつて、決して學說と稱することは出来ない、既に學說と稱すべき價值がないものとしたら、決して永久に其の主義が保たれる筈がない、一朝何等かの動機に際會すると、其の根柢に必ずグラツキが生ずるのは、ソビエト政府の行き方でも判知されるのである。

併しながら、吾人は、所謂無政府主義や共産主義などの擡頭を見て、決して之れを對岸の火災視する譯には行かぬのである、此の様な主義としても、其の生れるには夫れ相當の因由がなくはならない、則ち無政府主義が標榜するところの、國家の軍國的權力を排斥して、個人任意の協力を理想とすといふのは、やがて資本主義の獨裁と、國家主義の專制と、軍閥官僚の威力と、資本財團の勢力とによつて誘起された、一の反抗主義に外ならぬのであつて、思想の推移や變遷を研究するものとしては、眞個有用な他山の石であらねばならぬ。

第十六章 勞資問題より觀たる思想中毒

方今我國に於ても、大分階級的争鬭が目立つやうになつて來た、或る階級と或る階級の争ひなどいふことは、素より根本的に正しい現象でないには相違ないが、兎も角斯うした事實が擡頭されて來たといふことは、現代に於ける我國の思想界が、より多くの行詰りにあることが知らるゝのである。

一體之れを我國の現状に見ると、國民の多くは、何所やらにかイラ／＼した氣分を持たされて居る、國家制度や、社會生活に對する、或種の不滿や不平が、何時も國民の頭を咬つて居るのかも知れない、獨逸の或政治家が、必要の前には法律なしと放言したといふことは、吾人が曾て耳にしたところであるが、我國民の頭にも、何うやら此様な叫びでも發したいやうな氣分が包藏されて居るのではあるまいか。

吾人は事實の上に立言するのであるが、實際現代の我國民は、上下を通じて、著しく喧嘩腰

になつて居るやうに見える、若し先方で腕を出したら、此方では足を出さうと身構へる、相手が一寸した非義でも持ち出さうものなら、忽ち眞向から重砲的異議を加へずには居ない、斯うして社會の奥底には、正しく一道の殺氣が漲られて居るやうに思はれてならない。

政府と人民とは、原則として治者であり被治者であらねばならぬ、ところが其の實際に於ては、往々征服者であり、被征服者であることが尠なくない、征服が壓服を意味するものであるとすれば、國家が敵同士の場合には限らぬのだ、素より此の様なことには、其所に双方の誤解があることもあらうし、見解を異にして居ることもあらうが、決して賞讃すべき現象でないことは言ふまでもないことだ。

國民思想が畸形的に發達するといふことは、爲政者などの壓迫が其の因をなすことが多いのである、素より此等の場合に於ても、爲政者は何等の惡意を有つものではないに極つて居る、否な寧ろ如何にかして、國民の思想を善導しようと考へて居るに違ひない、が其の結果は何時も陰性であり、時としては大なる險化をさへ促成することがある、之れ畢竟當局者の無理解からして、期せずして斯かる惡結果を招來するものである、支那の古諺に、角を矯めんとして牛

を殺すといふのががあるが、時の政治家などには、往々此の愚を敢てするものが尠なくない。

政府は何時も國民の思想に同情して居ない、國民の思想といへば、何うも爲にならぬもの、やうに考へるのが、政府としての通弊であらねばならぬ、實際に於て穩健着實なものであつても、夫れが新しい思想であるといふと、一も二もなく之れに危険思想なる名目を與へて、容赦なく之れを壓迫し去らうとするのは、政府者其のもの、常套手段であるかの如く見える、勿論吾人が繰返して述べたやうに、多くの新思想の中には、實際有害な危険思想もあるのであるから、政府者として之れが取締をなし、場合によつては、適宜な處置を執ることは必要に相違ないが、何でも彼でもたゞ一樣に、危険思想であるとして片付けようとするのは、あまりに無智な遣方であつて、其の結果は時に重大な危機をさへ齎すものである。

此の様な關係からして、思想の上に於ては、政府者と國民は、全く柄鑿相容れずといふ状態を示して居て、兩者の間柄には、可なりに力強い反撥力が仄見えて居る、そこで國民としては、何うしても心から政府者に倚頼することが出来なくなつて、國民は國民としての任意の行動によつて、各自の生活に安定を得ようとするに至るのである、そして其が國民の中にも、弱者

に立たされるものは、終に自暴自棄に流れることになつて、其所に様々な忌まはしい社會運動となり、或は綱紀の頹廢なども惹起されるし、風教の墮落ともなるのである。

此等の現象に對しては、國民としても多少の罪責は負はなければならぬのであるが、政府者としては、當然其の責任の上に目覺めなければならぬものである、事實に於て單に不徳なばかりでなく、國策の上に大なる不祥を招來すとせば、政府者の罪責は決して軽いものではない、故に政府者にして、斯る壓服的態度を改めない限りは、社會の紛亂は收拾されるものでなく、また國民の墮落が底止さるゝものではない、斯る場合に立ちながら、政府者にして猶ほ其の改むべきを知らず、政府者は政府者として、何所までも國民を支配しつゝある如く思惟して居るならば、夫れは大なる誤謬であつて、不知不識の中に、不測の谷底に陥入するものである。

政府者と人民との背馳、之れほど不祥な矛盾はなからう、而も此の矛盾が齎す結果は、眞に戰慄に値すべきものであらねばならぬ、政府者は夫れ自身の權力として、立派に人民を支配して居るやうに考へて居ても、多くの人民は決して然う考へて居ないことがある、政府者は政府者で好きな道を行くであらう、そして我々は自分の欲する道を進るのであると考へて居たなら

ば、其所には何等の支配關係も實現されて居ないではないか。

此の様なみじめな立場にあつても、政府者として夫れに氣附かぬのが多い、自分等は政權を握つて居る、政府は一國の統一的政治機關である以上、人民に對しては、何事にも成し遂げ得るものであると考へて居る中に、人民の方ではますます政府者から遠ざかつてしまふのである、斯うして混沌たる歩みを續ける結果、政府者としての國家的作業は、何等の成績をも見ることがなく、國民としての思想其のものも、全く一種の畸形を呈し、恰も荒み切つた家庭に於ける少年子女のやうな、悲惨極まつたものに化す外はないのである。

サア斯うなつては、病は既に膏肓に入つたものであつて、如何なる國手も袖手傍觀の外はないであらう、幸にして之れを我國に見るに、病はまだ然かく絶望にまで進んでは居ないらしい、併し夫れはたゞ分量上の話して、既に此の病が相當に擡頭し、幾多の危険症狀をさへ呈する以上、對症療法は別個の問題として、如何にかして其が根本的治療法を講ずべきものでないか。

兎に角然うした思想上の動搖から、あらゆる社會問題なるものが、紛糾して現代に現はれるのは、素より數の然らしむるところであらう、前にも言つたやうに、必要の前には法律なしと

いふ言葉が、如何に如實に現代人の心に共鳴されつゝあるかを思ふ時、吾人は心膽氷の如きを
禁じ得ぬのである。

世相には、差別相と無差別相とがあるといふことは、吾人は前篇に於て既に之れを述べたが、
此の差別といふ言葉が、現代に於ての階級なるもの、上に、一種の便宜として用ひられて居る、
元來自由といひ、平等といふところには、何等の差別があり得ない、併しながら自由なる言葉
や、平等なる言葉が繰返される以上、論理的に差別なるものが儼存して居るのである、元來に
於て差別がなく、全く無差別のものであるとしたら、何も格別に自由や平等が要求される筈も
なく、其の様な必要もないのである。

其は別個の問題として、實際社會には、如實の差別がある、男子と女子とは、人たる點に於
ては無差別であるが、其の性に於ては差別が儼存する、智者と愚人は、同じく人たる點では無
差別であるが、其の能力に於ては差別を認めねばならぬ、ところで此の見地に立つて、社會な
り國家なりを觀たならば、其所によく差別相と無差別相とが認められるであらう、則ち人間は、
無差別な人として、社會なり國家なりを組織して居るのであるが、其の組織の内容を調べて見

ると、性や能力などの差別があつて、決して之れを單一な無差別として取扱ふことは出来ない
のである、一體差別なるものは、其の實質に於ての各自の相異を言明したものであるから、内
容的實質を言ふに方つては、無差別から離れた、差別に其が見地を置かなければならぬことは、
素より當然の事理である。

ソコデ此の差別といふ言葉が、所謂階級なるものゝ分類上に利用されて居るとしたら、其の
間の關係は何んなものであらう、斯う考へて來ると、我々は何うしても所謂階級なるものは、
眞の差別から唱へられたものでなく、單に差別の名を藉りたゞけのものであることが意得され
る、夫れは何故であるかと言へば、階級なるものは、必ずしも差別によつて生じたものでなく、
言はゞたゞ便宜のために、大ざつばに分類されたものであるからだ、世の中には、智者階級も
なければ、愚者階級もない、同様に男子階級といふものもなければ、女子階級といふものもな
い、して見ると、階級其のものは、其の本來に於て、何等差別とは關係を有たぬものである、
がまた一面には、之れが混淆されて使用されて居るところもある、則ち富者階級であるとか、
貧人階級であるとか、夫れで、此の場合には所謂差別なるものが立派に之れに關係して居るの

である、ダカラ差別無差別なることは、階級の本來的要因ではなくて、階級を定むる上に、漫然と差別なる言葉を應用したものと見るべきものであらう。

方今に於て、先づ階級的争闘と目されて居るものは、資本階級に對する労働階級、ブルジョア階級に對するプロレタリア階級、地主階級に對する小作階級、特權階級に對する平民階級が夫れであつて、此外にモ一つ特別なものに、所謂水平運動などが數へられるのである。

或人は社會の變態的逆轉を以て、物質其の物に對する過度の崇拜と、人間其の物に對する極端なる輕侮が、不權衡的に其の素因を爲すものであると言つたが、之れには尠なからぬ眞義が含まれて居ると思ふ、一體今の世は言ふまでもなく、物質萬能の時代であつて、最近に於ては、所謂商工主義なるものが、絶大の偉力を以て社會を風靡しつゝあつた、が此の商工主義なるものは、生産者夫れ自身の提唱ではなく、寧ろ生産者其のものを支配しようとする、資本家階級によつて高唱せられ、而して實現されたものであつたから、其が主義も忽ち行詰りの有様を呈するに至つたのである。

言ふまでもなく、商工主義の行詰りといふことは、營利主義の行詰りといふことを意味する、

則ち商工主義が、動きの取れぬ羽目に陥つたと同時に、其が内容的意義を有つところの營利主義は、當然茲に活動的破綻を餘儀なくされたのである。

ソコデ先づ營利主義なるものが、如何なる意義の上に立脚しつゝあるかを考へなければならぬ、元來此の主義としては、商業と工業を盛んにして、其が中の工業製作物に屬するものを社會に供給し、同時に消費材料を豊富にして、社會の人々をして、其が生活の上に、可及的便宜を與へるといふことが、其の主義の上に見らるべき根義であらねばならぬ、ところが仔細に之れを觀察すると、斯くの如きは、畢竟理想的な根義であつて、實際に於ては餘程其の趣きを異にして居るのである、則ち商業者工業者たる、所謂資本家として奉ずるところの商工主義は、工業や商業を盛んにして、營利の途を饒多にし、殊に外國貿易を隆昌ならしめて、多大の利益を占めるといふにあるのだ、而して彼等が附言するところによると、斯うして多くの富を得て個人が富むといふことは、言ふまでもなく間接に國家を富ませるものであるといふのである。

商工主義が、直ちに營利主義であるといふのは、斯うした關係から言はれるもので、所謂重商主義と同一轍のものであらねばならぬ、理想的の主義から特立して、實際的の主義に立たさ

れた此の商工主義なる傾向は、著しく社會全般の思想に影響を與へたのである、一にも營利二にも營利、營利の前には何等の理義もなければ方針もない、此の世界で一番貴いものは金錢であると考へるところに、一般は殆ど極端に金錢を崇拜する傾向に進ませられたのである。

金錢を得るがためには、物品を要することはいふまでもない、併しながら極度の營利主義にあつては、品物よりも金錢を重んずるのであつて、品物は當然第二位に置かれるやうになる、ダカラ金錢さへ得らるゝならば、何んな物品でも、ドシ／＼惜氣もなく外國へ賣り出してしまふ、夫れがために、内國の物資が如何に缺乏しようと、品物の供給不足で、國內の人間が何んなに苦しまうと、其様なことには決して頓着しないのである、成程斯うまで極端に進むとしたならば、金錢は多く得らるゝに相違ない、が然うした揚句の結果は何うであらう。

利益を得ること、金錢を蓄積すること、之れが商工主義のモットーであり、營利主義の唯一信條である以上、富はますます其の量を加へるに相違ない、そして貿易の伸張も達せられるだらうし、國富も文字通りに充實することであらう、併し事は單に之れだけにしては已むものではない、山窮まれば海となる喩の通りに、いつかは其所に變化が起らずには居ないのである、

永劫不變は決して眞の世相ではない。

商工主義が營利主義である以上、彼等は金錢を得ることに、日常の作業を繰返すのである、金錢を得るために或る仕事を、そして其の仕事によつて金錢を得る、そこで然うして得た金錢を何に消費するのであらう、矢張り其の金錢で仕事をするが、其の仕事は矢張り金錢を得るための仕事に外ならない、斯うして繰返した揚句の果ては、單に富の蓄積といふ一事に歸着するのみである。

富の蓄積、其の名は實に美しい、併し其の結果は怖ろしいものである、徒らに蓄積に蓄積を重ねた彼等は、やがて其が富のために自滅せねばならぬのである、金錢は萬能のものであると考へ、單に其が蓄積を能事として居るやうなものは、眞に之れ財界の害物であらねばならぬ。

富の蓄積による禍害は、社會的に最も深刻なるものである、則ち其の二三を擧げて言ふならば、第一には生産過剰を將來する、第二には消費不足を招致する、第三には財界の恐慌状態を惹起する、第四には勞働爭議の原由となる等が之れで、終には生産組織の全體にまで破綻を生ぜしむるものである、此の悲惨なる状態は、我々が親しく經驗せるところで、決して單なる空

理想ではない。

今次の大戦後、我國は所謂商工主義呼號の下に、餘り豊饒でもない國內の物資を割いて、随分無理算段の下に海外に輸出したのであつた、何しろ時勢が時勢であつたので、豫期以上に金を儲け得た、所謂營利主義が思ふ壺に拵つて、營業者は言はずもがな、政府としても得意満面であつた、ところでコツソリ裏口から忍んで來たのは、國內の物資缺乏といふ怪賊で、其が爲に我國の物價は、眞に驚くべき程に昂騰したのである、之れに連れて、投機的事業といふ鼠賊まで、到處隨所に蜂起したので、其の結果として、恐慌なる大賊が出現して、財界の全般を戦慄せしめ、終に全社會の一大混亂を惹起したことは、今も猶ほ眼に新たなる所であらう。

斯うした富の中毒は、根本的に世道人心までも破滅させずには置かない、信用の破壊、生産の梗塞、生活の困難、人心の浮動、風教の墮落、思想界の險化、之れ等のあらゆる惡的症狀は、一に此の中毒症狀として發現さるゝのである。

此の様な營利主義は、更に轉じて、人間の價値を低下せしむるものである、言葉を換へて言へば、營利主義に傾倒する結果として、人間の價よりも、寧ろ物品の價を高しと考へしむるも

のである、勿論物は人によりて生産せらるゝものであつて、人なしには決して物は得られぬ筈であるが、元來が營利を以て主義とするものなどとしては、到底其の深きところに眼を透すことは出来ない、謂はゆる單なる現實の問題として、其が觀察は何時も當面の域を脱することがない、則ち彼等は人間を使役することは知つて居ても、其を以て尊重すべきものであるとは考へない、人間は物品を生産するだけのもので、金錢の萬能的なものには及びも無いと思惟するところに、人と物との價を定めるのである。

人間が物品を生産するといふことを知つて居ると同時に、彼等はまた金が人間を支配するものであると考へる、否な夫れは單なる考へばかりでなく、實際に於て金が人間を支配して居るからである、斯う考へた彼等は、如實に支配者と被支配者とに於ける優劣を思考せずには居られないのである、支配者が貴きか、被支配者が貴きか、之れ彼等に取つての現實の問題であらねばならぬ。

が此の問題は、彼等に取つては簡単な問題である、そして金を以て直ちに治者であるとし、人間を以て直ちに被治者であるとすることに躊躇するものではない、茲に則ち尊金卑人の觀念

が生れるのである、そこで率直に言ふと、金は取りも直さず資本である、そして人間、あらゆる生産的の人間は、所謂労働者であるといふことになつて、資本なるものは、手もなく治者であり、労働者なるものは、疑ひもなく被治者であるといふのが、彼等の理論であり、信念である。

斯くの如き理論と信念は、果して如何なる結果を齎すものであらうか、言ふまでもなく、人間は全く金銭の従者たり奴隷たるものとならねばならぬ、人間が既に金銭の奴僕たる以上、金銭は人間に對して最上の権力を行使し得ることは否めないであらう、果して然らば、今の世に於ける、大部分の資本家が、労働者を酷使したり、或は其が正當の持前を掠奪したり、甚しきに至つては、労働者を以て一個の商品の如くに見做し、而も其が最も低き程度の價格を以て、彼此に賣買したりするやうなことは、素より怪むに足らぬ現象でなければならぬ。

労働者としても、素より立派なる一人格を有すべきは言ふまでもなきことである、が如上の如き立場に在つては、其が人格なるものは決して認められて居ない、労働者は單に労働者として、一個の道具か機械にしか受取られぬのである、而して資本家が労働者を手馴附ける所以の

ものは、營利としての手段に外ならないのだ、労働者は忠實に物品を生産する、而も其の生産された物品によりて、彼等は逆縁的に其が人格を蹂躪されてしまはねばならぬ、悲惨なる運命とは、眞に彼等労働者の上にあるのだ。

併し此のまゝで済むことであれば、天下は眞に無事太平であるが、問屋は中々然うは卸して呉れない、所謂資本家といひ、財閥家と稱せらるゝものが、千兩箱を後にして、怡々として桃源を夢みつゝある間に、社會は遠慮容赦もなく進展して居る、そして彼等が何時までも小供であるかの如くに考へて居た労働者なるものは、意外にもズン／＼成長したのであつた、斯くて成長した労働者は、自分達の生立ちを回顧し、更に現在の立場を見詰めた時に、愕然として無明の夢から覺め來つたのであつた、此の労働者の自覺は、素より社會の進展に隨伴したもので、其が道程は可なりに長いものであつたとは言へ、彼等にはまだより長い永遠がある、斯う考へて見ると、彼等は更に新しい生活に入らねばならぬのである。

人格の自由と、其の獨立とは、絶対に無限であらねばならぬといふことは、少なくとも自覺した現代人の思想である、斯うした現代人として、何等人格をも認められない、否な寧ろ其を

極度にまで蹂躪された生活に堪へべき筈がない、労働者が其の終局に於ける自覺の如きは、素より當然である。

が自覺は、より多くの煩悶を生むものである、自覺によりての要求が、十全に且つ迅速に、満足されるものであれば格別、然うでない場合には、其所に必然的の煩悶が起らずには居ない、今までは何も知るところが無いのであつたから、たゞ何事も前世の約束事と諦めても居られたのである、が一旦豁然として悟つて見ると、モウ其様な謂はれない壓迫や屈従には甘んじて居ることが出来ない、之れは何とかして、自己の本來的立場に復らなければならぬと思惟するところに、所謂痛切深刻なる時代的煩悶が、まざ／＼しく彼等の胸中に沸き立つのである。

自覺は文字通りに自的のものであつて、決して他的のものではないのである、随つて自覺から出發された要求其のものは、畢竟自的の要求であつて、決して他的の要求ではないのだ、さうなると、其所に自他の利害が判然と擡頭されて來るのであつて、人生的社會的の種々な問題は、此の時に雜然として起つて來る。

が理論は兎にも角にもとして、労働者は何等かの行動を執らなければならなくなつた、向ふ

を見れば、資本家はまた中々に目醒めさうにもない、たま／＼目醒めたものがあるにしても、夫れは寥寥として曉天の星の如きものである、其の大多數は、三竿の日影を外に、如何にも心地よけに眠つて居る、サア此の場合何うしたものであらう。

之れは労働者として、決して空想でもなければ幻想でもない、全く眞劍味の立場にある、實際的な考へであつた、が此の場合としても、彼等には餘りに多くの提案は與へられなかつたのである、そして右考左慮した結果、彼等はたゞ二つの血路しか見出し得ぬのであつた、則ち其の一つとしては、此のまゝの永遠に、所謂資本の奴隸たり臣僕として、さしあたり無難な生活法を維持するかであり、モ一つは、運を天に任せて、のるかそるか的手段に出で、何所までも資本に對抗して、其を押し倒すまでに進み行くべきかであつた、が此の二つには、みなそれぞれに困難が隨伴する、則ち飽くまで隠忍して、此のまゝに現状を維持するとせば、永久に資本の桎梏を脱却することは出来ない、そして何所までも、彼等の奴隸として、悲痛慘酷な繫縛に甘んずる外はないことになる、之れでは折角時代に目覺めても、何等の甲斐が無いばかりか、却つて資本家の反感を買ひ、更には求めて煩悶を招來したに過ぎないことになるのだ、また第

二の血路に進んで、何所までも資本に對抗し、夫れを押し倒さうとするにしても、國家には既成の制度があり、相手には金權といふ最強の武器がある、ダカラ此の血路に生きよつとするには、勢ひ國家の制度を改めさせなければならぬし、相手の金權を控制する方法を案出しなければならぬ、そしてまた社會全般の思想を統一して、之れを經濟的理法の中に活動せしめなければならぬのである、が理論は斯うであるにしても、其をして實現せしむるといふことは、中々に骨の折れる仕事であらねばならぬ、國家は一般の幸福を平等に策するといふけれども、其の實は常に資本家にのみ左袒して居るものであつて、其を抑壓すべき誠意に對しては、頗る疑ふべきものがあるのだ、國家の立場は矢張り資本家の如く、當面の利權の上のみ立つて居るのである、國家として當面の富を得るといふことは、取りも直さず營利主義の資本家の富に俟たなければならぬ、若し此の事實に變更を加へようとするならば、當然資本主義に對する既成制度をば、最も根本的に、そして最も時代的に、そしてまた更に一大勇斷的に、之れを改造しなければならぬ、ところが時の内閣として、此の斷行が出来得るか否かは、頗る疑問に屬するものである、國家の生命は、常に財政に其の鍵鑰を委ねて居る、而して其が財政の鍵鑰を握

りつゝ、あるものは、當然資本家其のものであることは、現代の實狀として否むことは出来ない事實である、故に其が國家の爲政者たる内閣としては、如何なる場合にも資本家を袖にするこゝとは出来ない、資本家を第二義のものとして、其の第一義を労働者に置くことが、たとひ時の爲政者の理想であり、また原則であるにしても、之れを現實にするところに、大なる支障が起ることを知覺して居る以上、今のところ爲政者は到底労働者の露骨な味方とはなり得ないに相違ない。

制度が大なる改革を齎らさない以上、資本家は何所までも其が下に糾合して、肉薄する労働者に對抗すべきは言ふまでもない、彼等は斯くして制度の盾に隠れ、そして金權の矛を握り翳して進むとしたら、知らず労働者は何を以て之れに當らうとするであらうか、彼等は正義を盾とし、人道を矛とする外には、事實何等の武器をも有せぬものである、人道の矛は銳利であるかも知れぬ、正義の盾は堅實であるに相違なからう、併し理論を外にしては、制度はよく正義を撃破し、金權はよく人道を粉碎する、必要の前には法律なしと叫んだのが實際的であるとす

るならば、重商主義や營利主義の前には、正義もなく人道もなしと叫ぶのも實際的であらねば

ならぬ、百の理論も、一の事實に對しては、何等の實力を有たぬことに想到したならば、這間の消息が、歴然として吾人の眼前に髣髴し來るに相違なからう。

が翻へつて思ふに、労働者には、更に偉大な力を有つた、千金不換の武器がある、夫れは何であるか、言ふまでもなく生産といふ一事が夫れである、生産は全く労働者の生命であると同時に、また其の唯一なる武器であらねばならぬ、生産なしに労働者を考へることが出來ぬと同様に、労働者なしに生産は考へられる筈もない、生産即労働——労働即生産といふ原理から推して、労働者は如何なる場合にも、生産其のものを以て、絶對的の味方となし、また絶對的の武器ともすることが出来るのである。

労働者に取つては、此の様な最優最良の武器であるものを、吾人は何故に正義と人道の兩武器の外に置いたのであらう、吾人は然かく生産が有力なる武器なることを知りつゝも、猶且之れを彼等の武器に算入しないのは、其所に彼等に取つて、最も遺憾なる生活關係を思考しなければならぬからである。

生産は労働者の生命である通りに、また資本家の生命であらねばならぬ、故に生産といふこ

との通義は、一面に労働者の上に占在さるゝと同時に、また一面に資本家の上に占在されるのである、正面と反面は、其の見らるゝ位置によつての相違面であつて、實際に於ては同一面たる意義を有すべきものである、之れと同じ理義に於て、生産は労働者の生命たり武器ではあるが、また一方に於ては、資本家の生命たり武器たるものであると言へるのである。

單純なる考想からすれば、労働者は生産なる武器を提げて、立派に資本家に肉薄することが出來ねばならぬ筈だ、労働者にして、若し資本家に對して、其が生産を拒んだならば何うであらう、資本家は必ずや頂門の一針として、周章狼狽せずには居られまい、營利主義をモットーとして、ズン／＼お金を儲けて行くといふことも、詰りは生産其のものゝお蔭ではないか、生産によりて出來上つた品物を彼此に供給して、ウンとお金を得る、ところで若し其の品物が斷絶する、換言すれば生産機關が過絶したとなつては、資本家は全く金の蔓から離れてしまはねばならぬ、之れは營利主義の資本家に取つては、實に由々しき大事であり、且つ絶對的致命傷と言ふべきものである。

之れ程の強力な武器が、労働者の手に存せられながら、彼等は何が故に之れに依て最後の輸

贏を決しないのであらうか、則ち其所には、より以上の深刻なる理由が存しなくてはならない。此の策戦法は、吾人を俟たないまでも、労働者の總ては先刻承知である、イヤ膏に承知であるばかりでない、彼等は夙に此の策戦を講じ、隨時隨所に其れによる活劇が演出されて居るのである、即ち所謂サボタージュといひ、ストライキといふやうなものが之れであつて、之れが可なり痛烈に繰返されて居ることは、何人も日常耳目にする、周知の事柄である。

併しながら此の策戦が、資本家に對して、果して何れだけの攻撃能力を示したであらうか、吾人の知り得る限りを以てすると、其の効果には頗る陰性的のものが多くやうである、否寧ろ資本家としての、或る特殊な好意の外には、全然其が攻撃能力に認むべきものがないのである、此の一事は、生産が労働者の唯一な武器であり、また資本家の唯一な生命であることに向つて、奇怪千萬一つの矛盾を示すやうであるが、其の實決して奇怪でもなければ矛盾でもないのである、則ち労働者として執るところの生産なる武器は、また以て相手の資本家として執るべき武器なのである、併しながら資本家としては、何も最初より开が生産を武器として起つものではない、がいよ／＼接戦といふことになる、資本家は忽ち労働者の手にせる生産なる武器を

奪つて、却つて之れを逆用するものである。

労働者が生産を以て生命とするのは、其れによつて生活を營むからである、資本家が品物によつて金を得ると同様に、労働者は生産によつて金を得るのだ、故に労働者が、資本家に對して、物品の製作を拒否すると同時に、己れも亦資本家から、勞銀工錢の給付を拒否されるのである、サア斯うなつて來ると、今度は單なる生活と生活の戦ひとなるべきは論を俟たない、ところが生活其のものは、素より空文ではない、一本の澤庵も、一升の米も、みな其の日／＼の實際的資料であつて、天から降つて來るものでもなければ、地から湧いて出るものでもない、之れ等を得るには、相當の代銀を要すべきは論なきところであるが、斯る場合に於ける生活状態は、何うしても労働者に九分の弱味がなければならぬ、労働者は其の生活に於て、矛を執つて起つまでに窘迫されて居るのであるから、只でさへ些の餘裕をも持たぬに反し、相手としての資本家には、素より生活的餘裕なるものがあるのだ、よく世人が言ふやうに、腹が減つては戦さは出來ない、意氣に於て、道理に於て、如何に齒を咬んで起つにしても、生活なしに戦ふことは不可能である、則ち一氣呵成的擬勢には優勝を得るにしても、最後の持久戦に入りては、

何時も労働者の惨敗を見るのが常である。

之れが則ち敵の武器によつて敵を制するもので、労働者は之れを知りつゝも、生活といふ一つの現實のために、むざ／＼と己が利器を敵に逆用されるに至るのである、だから資本家にして、眞に永久の眠りから覺め、少なくとも正義と人道に一瞥を與ふるやうにならない限り、罷業的作戦は、決して理論通りの効果を收むるものではない。

斯う觀察して來ると、現代の労働者が把持するといふ、服従と猛進の二つの血路は、何れも其の根柢に於て何等の價値をも見出さぬことになる、併しながら夫れでは猶々彼等が立脚の基地が無いことになるので、何うしても別に何等かの血路を見出さなければならぬのである、そこで吾人は思惟する、其所には只一つの根本的改造策があるのみだ。

果して然らば、其の根本的改造策とは何であるか、則ち夫れは資本家と労働者の道義的一致といふことである、一體労働者と資本家とが、斯くまでに其が反駟を餘儀なくされるといふのは、畢竟兩者の何れもが、毫も道義的に自分自己を自重せぬからである、言葉を換へて言ふならば、資本家は單に重利の一方に傾き、夫れ自身が社會の一人格であることを閑却して居るの

である、自分は營利主義に立つものであるけれども、其の本體に於ては、等しく社會の一員であるかと考へたならば、少なくとも其所に人道的意思の閃きが生じなくてはならない、既に人道的意思があるとしたら、また其が環境に對する、相互共存の原義が知解される筈である、然るに彼等は、空氣の中にあつて空氣を忘るゝ如く、營利の前に總ての環境を忘れ、やがてまた自己の人たる所以のものを忘れたもので、斯かる心境に立つものとしては、到底道義的の行動に出づることは出来ぬのである。

一方労働者としても、また其が人格に就ての觀念が、甚しく缺陷の状態にあることは拒まれないのである、たとひ其の中に、少數の例外はあるとしても、其が大多數は、全く自己の人格などには顧慮して居ない、自分の働くことは、單に其が生活のためであると考へるか、或は娛樂のために働くと思惟する外には何も考へて居ないのが多い、勿論働くといふことは、現實の生活や娛樂のためには相違ないが、而も其が奥底には、より深い意義があるといふことは、一般労働者の胸裏には包藏されて居ぬらしい、そして中には、共存の原義から出發して、共存的に働くといふやうな觀念すらなく、己れの働きは單に己れの働きであつて、何等他の環境に意

義や交渉を有つものでないと考へて居るものさへあるのだ、資本家にして既に此の様な心境に立ち、労働者にしてまた斯る心事を有する以上、双方の融合一致などは、迎も思ひも寄らぬことであらう。

故に苟も資本家として、労働者の上に臨まうとするものは、先づ第一に己れの利慾を去らなければならぬ、そして其次には、己れを利すると共に、また他を利するといふ、道徳的觀念を漸養することが必要である、己れの利慾を去るといふことは、一面に於て、それがモットーとする、營利主義に反するやうではあるが、其の實は決して然うではなく、寧ろ眞なる營利主義を現前せしめ、其所に健實適正なる富の基底が築かるゝものである、夫れから自ら利すると共に、他を利するといふことは、其所に共存の大精神を發揮した、公平無私な利益の配分が見らるゝもので、共存的生活の上に於ける、大なる要約の遂行であり、處世的交渉に於ける、緊要なる安全瓣であらねばならぬ。

労働者としては、自己が社會の一人格であることを考ふると同時に、また其の社會的位置を考へなくてはならない、自分が生産者として、此の社會の一員を占むる以上、何所までも其が

天職を全うして行かねばならぬと考ふるところに、彼等の純眞な社會的人格が保持さるゝのである、元來生産者たるものは、決して資本家の奴隸ではない、併しながら自己が其の生産を營む上に於て、資本家に其が製品を提供することは、取りも直さず其の資本家の手を通して、自己の生産物を社會に提供するものであることを忘れてはならない、此の意味からすると、自己の生産は、決して一個資本家のための生産ではなく、全社會のための生産であることが意識されよう。

併しながら社會の事物は、何うしても分業的、否寧ろ分擔的に處理されて居るといふことも忘れてはならない、己れは生産者として立ち、資本家は處分者として立ちつゝある以上、分擔的區畫は之れを明瞭にすべきは言を俟たぬところであらう、之れを理法的に考へるならば、社會は善良なる物品の需用者であり、資本家は善良なる物品の供給者であり、そして自分は善良なる物品の生産者であるべきものである、然うすると其所には動かすべからざる三角關係があつて、其の何れの部分の行動も、相互に關聯することになるのであるから、所謂不可分の性質を以て、互に其の所能を竭さなければならぬのである。

ダカラ労働者としては、先づ第一に善良なる生産者たることを期しなければならぬ、自己が善良であつてこそ、資本家に善良を要求する権利が生ずるので、自己にして善良性を缺如しては、最早資本家に對する、善良要求權は喪失したものとするのが至當であらう、然るに之れを實社會の上に見るに、所謂労働者なるもの、中には、隨分其が善良性を失つて居るものが多い、ところが彼のサボタージュやストライキなどの、資本家に對する對抗運動者の中には、間々此の種の労働者が盛んに活躍して居るのは、確かに一つの不合理であらねばならぬ。

自らの不徳を棚に上げて、他の不徳を責むるといふことは、盜人が他の同類を罵ると一般、矛盾も亦甚しとせざるを得ない、吾人が知るところに於ては、労働者の品位は、決して如法に善美なものではない、ト言つて多くの労働者の中には、眞に欽仰すべき性格を持つて居るものも尠くはないが、大多數の上から見れば、實際極少數であるとせねばならぬ、此の點に於て、吾人は常に我國の労働界のために惜むと同時に、夫等労働者の品位向上が、現時の社會に於て、如何に重要であるかを痛感するものである。

働くことのみを以て、労働者の全精神とすることは、儲けることのみを以て、資本家の全精

神とするに等しきものである、働くといふことは、人間としての一つの作業であつて、性格と同一程度に見らるべきものではない、性格といふことは、働くこと、は別義なもので、人間としての價値其のものであるから、働きは働きとして、更にまた性格の上に、労働者の價値を求めなければならぬ、性格價値の無い人間は、單なる一個の生物で、生きた機械と見る外はない、神聖なるべき多くの労働者が、動もすれば資本家などに、一個の機械として取扱はれるといふことも、大に考ふべきものではないか。

飲む打つ買ふといったやうな惡風が、労働者の中に多くを見られるといふのは、確かに彼等の品性的墮落を裏書するものであらねばならぬ、吾人は事實に於て、多くの同情を労働者に持つものである、併しながら滔々たる彼等の弊風には、より以上の掣轡を禁じ得ない、労働は神聖であるに相違ないが、其を荷つて立つ労働者にして、現時多く見るが如き惡徳があるとして、は、彼等は實に労働の神聖を冒瀆するものであらねばならぬ。

労働爭議などで、何時も持ち出される條件の中には、必ず労働時間の短縮がある、之れは千遍一律で、斯る爭議には無くて叶はぬ筋書のやうであるが、吾人は之れを以て、決して彼等に

正當の根據があるとは考へられない、勿論十時間十二時間と言つたやうな、阿漕に労働者の労働能率を盗み取らうとするやうな資本家に對するものは別として、兎も角相當の勤務時間をも切り上げさせようといふのは何がためであらうか、彼等の言ふところによると、其が生活の全體に於て、種々緊要な自由時間を要する、娯樂時間も要するし、自修時間も要する、そしてまた運動の時間も必要であるといふ、成程聞いたところでは、如何にも無理ならぬところであるが、此の所要として提示された時間が、果して實際に彼等労働者に正用されるものであらうか、吾人は先づ之れに疑ひを挟まずには居られぬものである、勿論中には實際に此の時間割通りに正用するものもあるではあらうが、其の大多數は決して必ずしも之れを正用するものでない、吾人は事實について言ふのであるが、彼等労働者は、少しにても餘分の時間を持つと、必ず之れを悪用する、そして悪用するほどでなくとも、之れを徒消するのが常である、自修時間として要求した時間は、決して自修には使用されない、其の時間を以て、彼等は賭博に親しむ、夫れでなければ悪所通ひをしたり、無用の訪問に駄談の花を咲かせる位が關の山である、そして其が時間の空費の中には、種々様々な弊風が醸されるのであつて、眞實に言へば、然うした自

由時間の獲得は、決して彼等のために有益のものではない、而も然うしたものが、労働争議に於ける一つの必要條件となつて居るといふのは、其所に眞面目といふものが缺けて居るではないか、吾人は何も資本家や財閥家の肩を持つものでなく、寧ろ此等の一部の悪徳富豪に對しては、甚しき反感すら持つて居るものであるが、正用されぬ時間の短縮を強要する點に於ては、寧ろ害有つて益なきものと斷ずるに躊躇しない、さりながら、規定の勤務時間内は油を賣らず忠實に能く働いて、勤務時間外にはウンと思ふさま良意の休養を攝ることは必要である、デ惟ふに、働かせるものにも誠意が必要であるが、働くものにも之れがなくてはならない、生産の能率は、直ちに國家の富としての能率であり、勤勉の習風は、直ちに社會良風の源泉であることを思ふならば、世の労働者たるものは、大に自己に省みるところがなくてはならぬ。

労働者の地位の向上といふことは、前にも一寸述べたところであるが、吾人をして再び言はしむれば、其が地位の向上を要求する前に、先づ品性の向上を自企すべきものであらう、自己の品性には何等の考慮も加へずして、たゞ其が地位の向上をのみ要求するといふのは、極めて片手落ちの行爲であらねばならぬ、元來其の人の地位は、其の人格を基礎として定むべ

きものであつて、其の人にして人格の稱すべきものがあるとしたら、地位は求めずして得らるべきものである。

之れを要するに、現代の社會にあつては、資本家なるもの、側にも、労働者なるもの、側にも、みな夫れ／＼に大なる缺陷があつて、嚴格に之れが批判を下すならば、何れも其の資格に於ては、及第點を有して居らぬものである、資本家の側からしては、労働者に對して低級呼ばはりをして居るが、労働者の側からは、また資本家に對して、同じやうに低級呼ばはりをして居る、之れでは烏が烏を笑ふやうなもので、軍扇は何れの方へも上げ兼ねるではないか、今の時世は、實際に行詰まつて居る世の中であつて、馳ごつこに争つて居る場合ではない、浮薄を去り、輕佻を棄て、空論を避け、虚偽を除き、權謀を忌み、眞實な眞劍味を以て、あらゆる對策を講すべきであらう、資本家に不備があることが分つたならば、資本家は躊躇なく之れが補足を畫しなければならぬ、労働者に缺陷があることが知れたら、労働者は猶豫なく之れが改善を策しなければならぬのである。

斯うして双方に如實の向上が企圖されたならば、其所に相互の共通點を發見することが出来るであらう、既に共通點を發見したとなれば、其所に一致の曙光が現れたもので、吾人が所謂道義的一致策は、茲に完全なる成效を收められるに相違ない、そして永久に勞資争鬭などの跡を絶つことも出来ようし、労働問題も圓滿なる解決を見ることが出来るのである。

第十七章 小作争議より觀たる思想中毒

吾人は前章に於て、工業労働者に就ての批評を試みたが、一たび眼を轉じて、廣汎なる田野に其の視線を落した時に、此所にもまた一つの痛切深刻なる階級的社會運動を見逃がす譯には行かぬのである。

靜かなる森林と、穩かなる田野、帯の如く流る、緑の小川に、嬉々として遊ぶ村童の幾群、其所には自然の閑寂が展けられて、浮世の風が届きさうにも見えない、地は古りて萬古の佛を殘し、樹は老いて千古の昔を語る、此の地此の境、素より何等の苦情も、何等の争議もありさうに見えぬが、事實は漸く皮相の殻を破つて、此所にも世間並みの社會問題が見舞つて來たの

である、則ち農業労働者とも目すべき、所謂小作人の、地主に對する時代的争議が之である。

此の小作人としての社會的運動は、事實に於て至大至重の意義を有するものであらねばならぬ、此の運動としての影響は、單に農業經濟の全般にのみ限らるゝものではなく、延いては社會經濟の全般にまで及ぼさるべきもので、決して輕々に看過すべき性質のものではない。

此の問題に對しては、爲政者も可なり、頭を悩ませて居るのであるが、其が解決は決して容易な業では出來ないのである、一體斯うした争議が擡頭されたといふのは、其の原因は何れのところに存するものであるか、素より之れとても、社會の進運に隨伴して發展して來た、農業労働者則ち小作人が、現代の實際に目覺めた結果に外ならないのである、我國の小作制度は、其の因由するところは最も古く、現在に於ても兎に角立派なる外形を有つた小作制度がある、併しながら前にも屢々述べた通りに、制度は兎角保守的であるところから、現代に目覺めて、一步を社會に踏み出した小作人に對しては、餘りに退嬰的であり、そしてまた拘束的であるのだ、ダカラ此の小作制度なるものが、現在のまゝで其の形體が保持されて居る以上、此の小作問題なるものは、永久に解決すべき餘地を有たぬものである、言葉を変へて言へば、現在のま

まにして、地主と小作人とを協調せしめ、融和せしめんとしても、其が難問題は容易に解決さるゝ筈はないのである、ト言つて之れを今日のまゝに放置して置いたら何うなるであらう、地主は依然として、何時までも其が有利の地位を占むるのは勿論であつて、之れと同時に、小作人は、永久に浮ぶ瀬さへもなく、次第によつては倍々不利益の地位に立たせられねばならぬのである、そして階級觀念は、愈々深刻の度を加へて、後には半として抜くべからざる禍根を成就するに相違ないのである、ところで小作人が斯く思想の上に覺醒したと同時に、彼等はまた政治の上にも自覺したのである、彼等は所謂小作争議の根本的解決は、何うしても政治其のものに依らなければならぬことを知ると共に、著しく此の方面に期待を繋ぐやうになつたのは、素より時勢の然らしむるところであらねばならぬ。

彼の普通選舉なる事案が、地方到處に歡迎されたのは、全く此の政治的覺醒から招來されたもので、此の一事を以てしても、彼等小作人の希求の心理が分るではないか、小作人其のものをして、夫れ自身に、有利なる解決を握らうとするには、勢ひ彼等としての現状から脱しなくてはならない、そしてあらゆる舊來的慣習や陋弊を破却して、小作人としての權利を主張しな

くはならぬ羽目に立つて居るものである。

小作争議の原因に就ては、世の識者間にも、種々論議されて居るのであるが、之れを最も平靜的に、そして理窟抜きにして考察すると、其は全く實際的のものであつて、何等理論的空想に走つて居るものではないことが分る。則ち彼等の争ひは、小作料の高低、小作期間の長短、地主と小作人の待遇上の不平、利益分配の不公平等である、此等の諸點が、此の争議の主因であると同時に、彼等小作人は、實際的要求の下に、眞剣味の運動に出づるものである、併しなから斯う言つても、其が種類と程度に於ては、素より其の地方々々によつて多少の異同がある、且つ或る地方によつては、他の地方に類例のない特殊な關係もあるのであるから、斯る地方に於ける争議が、また他に比して特殊であるべきは言を俟たぬところである。

小作料低減といふことは、全く彼等小作人が、已むを得ぬ事情の下に提出さるゝ、消極性要求に外ならないのである、彼等小作人は、自己の地位に目覺むると共に、先づ第一に其が胸を打つたのは、自己の地位が、甚だしく都會に於ける労働者に劣つて居ることであつた、そしてヒシ／＼と迫り來る經濟上の壓迫によるこの生活上の脅威と不満は、何うしても彼等に、

小作料の低減を叫ばせずには置かぬのである、事實彼等としては、此の低減による収入増加を恃む外には、素より他に何等の収入が期待されない、よし多少の副業的収入はあるにしても、其の様なものは、殆ど算盤に乗らぬのである、則ち彼等としては、餘儀なく小作料の上に突進し、其が低減による增收を得て、兎も角も生活の安定を得ようとするのである、そして若しも之れが得られぬのであれば、彼等は一步進んで自分自身の去就を考へさせられるのだ、斯くして辛勞を忍びつゝも、猶且つ生活の安定を得ることが出來ぬ以上、何れにか一方の血路を見出さなければならぬと、斯くして彼等は都會を夢想する、地位もよく、収入も多い都會の労働者、彼等は何うしても、夫れに向つて走らねばならぬ。

今次の歐洲大戰が、世界の到處に、所謂民主主義的傾向をば、急速に發展させたことは、否むことの出來ぬ事實であつた、そして同時に、痛切なる解放の叫びは、各方面に起つたのであつたが、夫れに連れて、一般労働者に對する、凡百の懸案は、いよいよ露骨性のものとなつて、其が解決の要求は、刻一刻と其の度を増して來たのである、之れを由來の小作人に見るに、彼等は何等自己の地位と人格に回顧することなく、只々地主に對する忠實を以て自己の本義とな

し、或場合殆ど其が一身一家をさへ犠牲として惟まぬのであつたが、一朝开が無明の夢より覺むるに至つて、其の果敢なき境地から脱却しようとして試むるに至つたのは、蓋し無理ならぬことと言はねばならぬ、此の傾向からして、小作人としての収入増加の要求、地主及自作農の公費負擔の軽減、外國農産物の輸入制限運動、國內農産物保護政策などの要求が提起さるゝのであるが、一方是等小作人が、工業労働界に轉入して、其が収入の増加を圖らんとするものも續出するに至つたのは、大に注目すべき現象であらねばならぬ。

世人の多くは、分配上の不公平なる所以を以て、唯一なる小作争議の原因なりとするもの、如くであるが、吾人をして之れを言はしむれば、小作争議其のものに於ては、決して之れのみを以て、其が唯一の主因であると斷することは出来ない、勿論實際に於て、之れも素より其の最大原因たるには相違ないが、此の分配事實の外に、更にまた一個の重大な原因が存することを忘れてはならないのである。

農村の構成は、言ふまでもなく、地主と小作人によつてなされて居るのであるが、サテ此の地主と小作人との關係は何うであらう、從來の見解では、兎角利害關係のみを以て、其が鍵鑰

となすのであるが、實際に就て之れを観察するときは、決して此の利害のみの上に彷徨するものではない、果して然らば此の他のものは何であらう、夫れは言ふまでもなく、感情問題が夫れなのである。

人間は何所までも感情の動物である、たとひ理性が如何に其の本然の叡智の上に働くにしても、其が裝幀をなすべきものは、必ずや感情其のものでなくてはならない、地主と小作人との不和は、多くの場合素より利害關係によるのであるが、感情の衝突といふことも、彼等双方の圓滿を缺く一大原因であらねばならぬ、由來地主の通弊と見做さるゝところのものは、其の傲頑自尊なる態度である、そして一の権力者としての恃みと誇りとを以て、其が小作人に臨むところに、動もすれば暴君の心事が仄見えすには居ないのである、斯くして多くの地主は、一般に小作人を目して、劣等階級とするのである、過去に於ける小作人にあつては、斯くの如き屈辱的待遇を受けても、其は素より自己の天分として、何等意に介することもなく、否寧ろ逃るべからざる運命的地位として、夫れに甘んじて居るのであつた、が苟も現代に目覺めた小作人としては、最早此の様な不合理の差別的待遇には堪へ得られぬのである、則ち地主側が、地主

階級として己れに臨むに對し、彼れ等はまた小作人階級として、何所までも地主階級に反抗すべく決心するに至つたのである。

小作人階級の反感、之れが既に地主に取つての挑戦であらねばならぬ、温情主義の下に、忠實的態度を取つて居る間は兎に角、一たび双方に懽焉たらざるところが生ずるとなると、今までの準主従的關係は、一變して忽ち對等者となり、再變して競争者となり、三變して終に仇敵となるのである、ところで都會の勞働者にあつては、資本家との間に、業務執行の機關があるので、其が感情の背馳や衝突なども、多くの場合介達的であるが、地主對小作人となると、其の關係が密接されてあるだけに、双方の感情は、直達の當面的であらねばならぬ、則ち此の直達的であり、當面的であるだけに、感情による意思の疎隔は最も甚しく、其が悪化は最も露骨である、農村に住むものは、其の地理的關係や、聚落的關係しゅうたつてきからして、住民相互の間には、一種の溫情的關係が結び附けられるのである、故に地主と小作人に於ても、都會に於ける、資本家や勞働者の夫れとは異なつた、所謂情誼的關係がある、則ち斯うした深い關係があるだけに、一たび其の間に背馳的乖離が生じたとなると、今度は夫れに比して、より強き反動的憎惡感が

湧き立つものである、殊に農村に住む人は、動もすれば其が環境に動かされ易い特性を有つて居るのであるから、得て或る種の感情に支配されるので、地主と小作人との、聚合或は分裂的關係は、利害的感情が、其の最なるものであることは、毫も疑ふべき餘地がないのである。

土地を有することが、一種の名譽であり、其を有せぬことが不名譽であるといふ感想は、何地に於ても同じことであるが、此の名譽不名譽は、直ちに優等者と劣等者の表語となるのである、之れに依つて、地主は優者であり小作人は劣敗者であるといふ理窟が唱へられ、地主は何時も己れの有利な地位に立ち、之れに反して小作人は、何時も不利な地位に立たされるのである、加之地價は年一年と昂騰するのであつて、小作料は一に此の地價によつて徴集されるのが當であるから、小作人が今日に於ける其の實生活を保持するに足るだけの程度にまで、其の小作料を低減するといふことは、素より不可能であらねばならぬ、けれども小作人としては、如實に生活上の要求に刺衝さるゝと同時に、焦眉切實の經濟的緊迫に強要さるゝ結果、其が本來の自覺と相俟つて、茲に自己の要求する希求を貫徹しようとするのである。

ソコデ吾人は、此の機會に於て、先づ小作人なるもの、性質を明らかにして置かねばならぬ、

一體小作人は如何なるものであるか、また其の農村に於ける需用價值は何んなものか、之れを
闡明しての後でなくては、實際的に農村に於ける問題、特に小作問題に就て考想することは不
可能であらねばならぬ。

我國に於ける農業も、以前に於ては、地主に於て多數の賃銀労働者を使用して居たのであつ
たが、大農經營が、我國の農業に於て不利益となつた結果、茲に所謂小作人といふ、農業労働
者たる小企業者に、一定の地代を以て、所有地を貸付け、地代則ち小作料を収入とすることが
利益とさるゝに至つたのであつた、而して此の小作人なるものは、我國農村構成の上には、農
業要員として、必須缺くべからざるものとなつたのである。

小作人の必要といふことは、言ふまでもない事實であつても、夫れは結局地主の側よりして
の利害的に生じた必要であることは言ふまでもない、小作人は必要である、が其の必要のため
に、小作人は決して其が報酬的地位が與へられるといふ様な譯には行かぬのである、何故かと
いへば、前にも言つた通りに、地主なるものは、小作人を以て決して人格的に取扱つては居ぬ
のである、則ち小作人は必要ではあるが、夫れは器械としての必要であつて、人間としての必

要ではない、既に器械である以上、何とかして夫れを器械的に働かせさへすればよいのである、
斯うした考へは總ての地主の共通心理であるから、必要は必要でも、小作人に取つては、何等
の有利な境地に立ち得ることがないのである。

元來我國の雇傭關係は、所謂温情主義によるものが多い、都市以外にあつては、今日と雖も、
矢張り此の温情主義によつて主従的關係が結ばれて居るのである、温情主義素より悪しきこと
ではない、否な寧ろ吾人は、此の主義の美點を認むるに躊躇せぬのであるが、翻へつて之れを考
察すると、其は昔時に於ける、封建時代の思想を踏襲せるもので、眞の温情其のものから流露
されたものではなく、また時勢的に於ても、決して今日に適したものとは言はれぬのである、
此の温情主義による主従關係は、農業社會に於て、更に一層其の根柢が深くされて居る、ダ
カラ地主はさながら君主の如く、小作人は恰も奴隸の如き地位にあるので、其の名は假令温情
的であるにもせよ、其の實は全く征服的であり、屈從的であるのだ。

茲に於て吾人は、明かに我國に於ける、地主と小作人との地位的關係を認むることが出来る、
則ち地主と小作人とは、人格的の對立ではなく、また自由契約による、双務的のものでもない、

たゞ權力によつて支配されて居るところの、一の主従關係である、之れ取りも直さず、封建的思想に胚胎して居るものであつて、理想的に相互に温情を發露したものと見ることは出来ないのである、故に小作人の側について言へば、彼等は地主に對しての社會的關係は奴隸的であつて、經濟的には勞働者である、ところが一方地主の側に觀ると、彼等は社會的に優秀の地位を占むると同時に、また經濟的にも優秀の地位を占めて居るものとせねばならぬ、之れに比較するときは、小作人の境遇は甚だ低いものであつて、全く一の器械として、奴隸的奉仕に努めて居るものとせねばならぬ。

由來我國に於ても、農業技術などには、可なり多くの研究がなされて居たが、此の地主對小作人といふ關係に就ては、個人的としても、社會的としても、まだ何等の研究がなされて居るのであつて、社會政策の上から見ても、眞に遺憾とすべきものである。

併しながら農村に於ける時代思想は、決して此のまゝに偷安を貪ることを許さぬのである、則ち彼等を驅つて覺醒の巖頭に立たせた、そして其が身を轉すべき考慮をなさしむべく、前後から彼等を刺戟して居る、曾ては何等の刺戟に對しても、毫も反應を現じなかつた小作人も、

一たび自覺の境地に足を投じてからは、今度は殆ど反動的に、多大の敏感性となり、其が環境のあらゆるものが、種々な方面から彼等をして希求的煩悶の斷崖に誘ひつゝ、あるのだ。

茲に至つては、彼等小作人は、最早吳下の舊阿蒙ではないのである、停つて其が地位を維持することよりも、進んで新たな生命と生活とを得ようと考へさせられ、其がためには、如何なる困難をも辭せぬといふ意氣込みを發揮するに至つたのは、慥かに時勢の趨向と言はねばならぬ。

此の趨勢は、彼等小作人をして、遂に自立自活の欲求の上に、身上に振り掛かる壓迫を解除せんがために奮起せしめたのである、則ち彼等は、其が自衛策として、所謂小作人組合なるものが設置された、そこで此の小作組合は、初設の當時にあつては、僅々二三の地に出でぬのであつたが、其後駁々たる勢を以て、各地に續設せられ、大正十年度に於ける、農商務省農務局の調査では、全國に於ける組合數二百三十有餘に及び、組合員數二萬五六千名に達したのである。

ソコで今小作組合なるものに就き、其が標榜する目的は如何にと觀るに、夫れには素より種

種雑多のものがあるが、大抵左の範囲内に於て定められて居る。

- a、小作條件の維持と其の改善
- b、小作條件の維持改善と其の改良發達
- c、小作地に對する競争の防止
- d、農事の改良と發達
- e、地主と小作人との間の協調、及び農事の改良發達

此れを何れに見ても、大約如上の目的を標榜して居るのであるが、而も之が其の實際に於ては、地主共のものに對する、一種の對抗策であつて、小作人として、自己に利益ある解決を促成すべく設けられた目的に外ならぬのである、之れとても、其が動機は、言ふまでもなく勞働組合運動の氣運に促されて發達して來たものであつて、他の鑛業、工業、交通等に於ての勞働組合運動と相呼應して居るものである。

茲に至つて、所謂小作問題なるものは、實際的社會問題として取扱はなければならぬこと、なつたのである、地位に於て、經濟に於て、眞に同情すべき立場にある彼等小作人を救濟する

ことは、正義人道の上から見ても、立派に社會的仕事に屬するものである、小作人には地位がない、隨つて其の叫ぶところに何等の權威をも有たない、また其が經濟は素より一家自身を支ふるに足りぬのであつて、同時に彼等は先づ生活的に割りの悪い弱點を有するものである、況んや地主としての多くが、權力的に彼等に臨み、動もすれば經濟的逆襲を試むるに至つては、眞最眼ならぬ吾人と雖も、小作人のために、萬丈の氣焰が吐きたくなるのである。

併しながら吾人は、此の時に方つて、また社會制度の不備を思はずには居られぬのである、小作人の不遇は然ることながら、地主としても、素より昨今突然現出したものではない、地主としての今日の狀態は、遠く因襲的に醸成されたものであつて、今日の如き時勢の進運に逢着し、思潮的反抗を當面に受くるといふことも、一面に於ては頗る氣の毒なものでなくてはならぬ、吾人は公平な眼を以て、地主と小作人とを眺めた時に、双方に於ける立場に同情し、何れを菑浦引きぞわづらふといふ感慨に打たれずには居られないのである。

が實際から言へば、求むるものには十分の眞劍味がある、故に其が太刀風は、極めて猛烈であらねばならぬ、そして求めらるゝものは、勢ひ守勢に出でなければならぬので、何うしても

防禦策に腐心することを要するのである、乞ふものと乞はるゝもの、攻むるものと防ぐもの、此の關係は其所に消極と積極が見られる、あらゆる社會問題なるものは、規則として必ず不利な地位に立つものから提起さるゝことに想到したならば、所謂優勝者の地位にあるものは、其が劣者と目するものに對して、少なくとも理性的の注意を拂ふべきものであらう。

與ふべき時に於て與へたならば、争奪などいふ忌まはしき事件は起らぬのである、然るに與ふべき時に與へず、何所までも非理性的な搔き込み主義に立脚するところから、總ての要求は、憎惡怨恨の感情の上に提起されるのである、故に地主にして、モ少し聰明であるとしたら、小作人の要求、否寧ろ強要を俟たずして、何等かの理法的妥協に出づべき筈である、然るに事茲に出でず、一たび彼等の強要に會して、遽然として柵を結ぶが如きは、不明もまた甚しきものである、此の點に於ては、吾人は地主其のものに對して、滿腔の遺憾を表せずには居られないのである。

由來農村を以て、思想界の圏外にあるものと考へて居たのは、甚だしい誤謬と言はなければならぬ、成程農村は其の位置に於て、中央思想界と懸絶して居るのであるが、夫れを以て直ちに思想に迂遠であるとは言へないのである、箱根八里を馬で越した時代であつたなら、成程地方は何時も桃源的靜寂であるかも知れぬが、交通至便の現代にあつては、中央思想が田園に波及する速度は、眞に驚くべきものがある、且に都會に於て或る種の思想が高唱され、ば、夕には早く既に其が農村の森林に反響を傳へるのである。

始めて眠りより覺めたるものは、夙に覺めつゝあるものよりも極めて敏感である、農村の人が、且夕朝暮に傳へらるゝ何等かの思想に對して、事毎に驚異の眼を睜り、新奇の耳を翫てるといふことは、素より當然であらねばならぬ、殊に都會雜鬧の巷と違つて、環境の平靜なる地にある農村の人々は、好んで何等かの考想に耽るのが常である、そして一たび考想の題材を得るや、彼等は何所までも其を闡明しようといふ執着と忍耐とを有つものである、斯くして甲考へ乙思ひ、丙丁戊己と傳達せられた曉には、其が全く農村に於ける新思想となつて現はれて來るのだ、都會の人々には輕佻がある、そして容易に考へて容易に忘るゝ傾向を有つて居る、けれども農村田園の人々となると、何事にも眞摯な態度を取る、そして一旦考へさせられたことは、容易に其が胸裏を去らぬばかりか、日を経るに隨つて、夫れがますます濃厚になり、終

には案外深い根柢を有つやうになる、ダカラ思想其のものに於ても、其の出発地はたとひ都市中央であるにしても、其が傳播と發育は、地方に於て之れを遂げらるゝと同時に、往々其が果實をも結ぶことがある。

此の點から見て、地方農村の人々が、都市に於て勃興された思想に對して、よりよき共鳴の可能性を有するものなることは、斷じて疑ふべき餘地がない、元來勞働に關する諸種の思想の如きは、其の事柄が、全く勞働者自身の實生活を基調とするものであるから、何等文化の高低に拘はることなしに、最も實際的に、そしてまた眞劍的に、容易に此等の階級者に傳播されるものである。

一體社會問題は、如何なる場合にあつても、必ず社會其のものを對照とするのである、そして社會の根柢となるところの社會組織は、社會の階級を中心として成立する、ものであることは言ふまでもない、則ち斯くして社會は、所謂社會階級によつて維持せられ、また活動し得るものである、ダカラ社會問題といふことは、やがて社會階級に關する問題であらねばならぬ、併しながら斯う言つたからとて、社會問題なるものが、社會の一階級に利益を期すべき問題で

あるといふのではない、また階級闘争の理論を前提として居るといふでもない、元來此の社會問題なるものは、社會の根柢に、直接重大な影響を及ぼすべき我々の生活問題である、そして其の生活が、物質上の生活であると、精神上の生活であるとは、毫も關するところがないのである、此の故に、社會の或る階級が、現代の傳統的社會組織か、又は其が社會的秩序の下に於ては、物質の上からなり、また精神の上からなりに、其の生活が保障されないといふ場合には、其所に必ず深刻な社會問題が起らずには居ないのである、そしてまた社會の中の或一つの階級が、其の地位よりの解放を要求するときに、最も重大な社會問題が擡頭する、のである。

それから此の社會の階級に屬する集團を對照としなければ、社會問題などは起らぬのである、ダカラ社會問題を取扱ふ上に於て、少くとも個々の人々を對手とするのであつては、決して其の問題に對する解決が得らるべきでない、之れを今日の我國に見るに、所謂其の支配階級にあるものや、資本階級に位する人々は、何等此點に着眼することなく、漫然として只當面の少數者のみ相手として、そが一時的の解決を得ることに汲々として居るのは、眞に歎すべきこと

であらねばならぬ、之れ畢竟由來我國に於て、社會問題なるものが、案外輕々に看過された故でもあらうが、此の如きは、個々の利害の上から見ても、また國家社會の大策の上から見ても、決して賞讃すべきものではない、社會問題は何所までも社會問題とし、且つ夫れが極めて重要大切なものとして、先づ當面の解決を急がんよりは、寧ろ根本的に之れをカタヅけることに努力せねばならない。

政治階級による政治問題を先にして、労働階級による労働問題を後にするといふことが、從來に於ける各國共通の弊事であつた、が現代の文明は、經濟組織を以て、其が社會の根柢とするものである、随つて現代の社會階級は、所謂經濟階級を中心として居るのである、往時にあつては、政治組織が、社會の根柢となつて居たのであるから、其が社會の中心は、言ふまでもなく政治階級其のものであつた、之れによつて見ると、現代に於ける社會組織の中心は、經濟的のものであり、所得的のものであり、契約的のものであると言へるのである、そして之れと同時に、此等の範圍にある階級者が、當然社會の中心を形成して居るのであるから、所謂労働階級其他の無産階級者の生活問題が、現代の社會問題に於ける樞軸の地歩を占めて居るのである。

則ち労働者階級の生活と、其の職業に關するところの、所謂労働問題は、實際に於て、重要な問題でもあり、また至難の問題でもあるのだ、今日喧ましく世間に取沙汰されて居るところの社會問題の中でも、労働問題は最も注目に値すべきものとなつて居る、労働階級者、換言すれば賃銀労働者階級の現状を觀たならば何うであらう、彼等にあつては、現代の經濟組織の下では、如何にしても、物質上にも、精神上にも、其の生活が保障されて居ぬのである、彼等は此の生活上の缺陷からして、其所に如實の要求を提起するに至つた、ところで其の要求するところのものは、一に彼等の實生活を基點としたものであるから、其が希求程度は、案外に深刻なるものである。

如上一般労働問題に就てのものであるが、小作労働者の如きも、素より此の關係からして、其が運動を起すに至つたのであることは言ふまでもない、シテ見ると、所謂小作問題なるものの實質は、實際的必須の要求に加味するに、自覺的社會的新思想を以てしたもので、其が根柢は意外に強靱なものであることが知られるのである。

兎に角小作人は、其の生活上の脅威から脱しようとして、陰に陽に其が運動に没頭するに至

つたのである、併しながら今日に於ては、運動は所謂運動であつて、まだ夫れによつての何等の成果をも見ることが出来ぬのである、既に一定の要求として發現され、また一つの運動として展進された以上、夫れに對する何等かの効果が見られなくてはならない、風か雨か、吾人は思想界の一角に立つて、彼等の健闘を瞻望すると共に、よく文明國の民としての理性の下に、進んで地主階級の反省と歸正とを贏ち得るやう施設行動することを要望するものである。

小作問題なるもの、解決には、當事者は言ふまでもなく、爲政當路者や學者識者に至るまで、可なり腦漿を絞りつゝあるやうに見える、が萬年赤子の喩の通りに、何時まで経つても、少しも成長といふ事蹟を有たぬのは何うしたものであらう、宿題であれば解かねばなるまい、また懸案であれば始末をする必要がある筈だ、問題の出しつばなし、運動の起しつばなし、そして解案の考へつばなしなどは、事實一國民としての面體にも關することではないか、社會は決して道化場ではない、そして生活は申戯事ではない筈である、苟も社會の上の一隻眼を投ずるものは、這般の問題に向つて、其が研究の上に貢献しなくてはならない。

勿論今日としても、开が解決に對する案策として、相等に提示せられたものはないでもない、

則ち自作農の制定であるとか、またヘンリー・ジョージによつて唱へられたる土地國有論などいふものは、比較的に注意すべき對案とされて居るのである、之れを我國の實狀に見るに、自作農の制定といふことは、最も其の情勢に適したものであるかも知れない、併しながら茲に注意すべきことは、自作農の經濟的均度が、果して現代に於ける農業勞働者に對して、兎も角も過不及なしの限度を採算し得るや否やといふことである、生活を充たすには何うしても現實であらねばならぬ、理論や數字のみを以てしては、決して空腹者を満足させる譯には行かないのである。

土地國有論の如きも、其の性質が根本的であるだけに、最も吾人の注目を惹くに足るものである、此の論の主眼とするところは、一切の耕作地を國有として、一私人の占有による專權を除かうといふのである、則ち農業に従事しようとするものは、國家からして其の耕作地を賃借し、以て理想的企業の上に安んずるのである、之れなどは小作問題を根本的に解決するためには、極めて有効であるに違ひない、が之れとても、其が制度の實現を期するためには、種々な困難に逢着しなければならぬ、國家は如何にして一切の土地を徵收するであらうか、地主が其

の所有権を國家に移繼するに於て、果して因襲的感情に牽引されるやうなことはないであらうか、農業労働者として、其の得るところの収益と、政府側に於て決定せる賃賃料とが、果して理想的に均衡されるであらうか、此等の中の一つにして、若しも其の宜しきを得なかつた場合には、土地國有といふことも、何等意義をなさぬものになつてしまふのだ、否然うした場合に、嘗て何等の意義をなさないばかりか、却つて重大なる弊害が生ずる事を忘れてはならない。併しながら、形式は何所までも形式であつて、徒らに形式のみに齟齬して居るやうでは、決して内容の美果を掴むことは出来ないのである、吾人は所謂小作争議なるものに對しては、徒らに其が解決を急ぐべきものでなく、因果的に、如法的に、冷靜なる態度を以て、深く其が解決の鍵鑰を探求せんと欲するものである。

世人の多くは、餘りに多くの望みを、小作制度の制定の上に置くやうである、が之れは決して真によく小作人の心理を解したるものとは言へぬのである、成程何事も制度萬能である一般の社會からしては、斯る制度の設定も必要であり、また夫れ相當の理論もあるであらうが、并ば只だ秩序的形式と、強制的規定の用をなすに過ぎぬもので、眞底からの解決でもなければ、根柢的の施設でもないのである、元來小作人運動其のものは、素より一種の解放運動の意義を具備したものに違ひないが、而も其の解放運動といふのは、明かに階級的な解放運動を有つものである、ダカラ小作人の眞底の心理としては、何所までも、地主と小作人との區別を消滅さしてしまふといふのにある、随つて所謂小作制度などいふものが、全然農村から除去されねばならぬと考へて居るのである。

小作人が此の思考に立脚して、其が運動をなす以上、その運動は、何うしても、階級間の利害衝突を基底とする事情から、階級闘争の色彩は、倍々濃度を深めることは疑ひもないところである、ところで或る一部の論者は、地主と小作人とに就て其が階級區別を疑ふものがあるが、之れは頗る見解力のないもの、言とせねばならぬ、此種の論者の言ふところによると、自作農業小作農を以て、其が農村生活を營むものがある以上、地主と小作人との限界が、極めて不明瞭となるといふのである、併しながら、此の様な中間階級は、例として何れの階級間にも存在するものであつて、斯る二三の中間分子を以て、直ちに全體の素質を混淆すべきでないことは言を俟たぬところであらう、地主は原則として土地を提供し、小作人は之れに對して労働を提

供するところに、一般資本家と労働者に於けるが如き、關係的對立が見られるので、此の對立が立派に二者階級を彩るものであることは、極めて明白な事理でなくてはならぬ。

故に所謂小作人運動なるものは、其の名は小作に關する或種の要求であるが、其の實を言へば、明らかに農村に於ける、階級闘争であるとせねばならぬ、則ち小作人は一方に生活的經濟的要求を叫ぶと共に、また一方に農村に於ける階級打破を叫ぶものである、茲に於て小作問題なるものは、其の性質に於て、押しも押されぬ社會問題に化成されたのである、デ其の運動の性質が、既に階級打破にある以上、前にも一寸述べた通りに、惡感や反感が、隨時隨所に發揮されなければ止まぬのである、此の事實は、現に斯る運動が、激甚に行はれつゝ、ある地方に於て、如實に示されて居る、則ち其の地方に於ては、小作人の地主に對する反感は、最も極端性を帯びて居て、夫れが惹いて、村治や日常の生活の上にも及ぶ、元來が經濟的の意味を有つて居たものが、終には一般の社交上にも及ぶやうになるのである。

則ち其が地方によつては、村治の機關にまで其が手を伸ばし、村長から助役は言ふまでもなく、村會議員に至るまで、一人残らず之れを小作人階級に於て占有し、地主階級からは、一人

も之れを出さしめぬところもある、又或地方にあつては、消防組の指揮は、小作人階級に於て其が實權を握り、地主階級に屬するもの、子弟などには、例として最も困難な最も危險な役目を振り當て、居るところもあるといふことだ、殊に最も注目すべきことは、或地方に於ては、小學校兒童が地主側のものと、小作側のものとに分れ、其が遊戯の際の如き、多數なる小作側の兒童は、少數なる地主側の兒童を壓迫し、動もすれば之れを苛め散らすといふやうなものもあるといふことである、之れがために、地主側の兒童などは、往々にして極度の不安と恐怖に襲はれ、通學を嫌惡するものも尠なくないといふに至つては、教育の上にとつても、由々しき一大問題と言はねばならぬ。

如上は單に一二の例であるが、兎に角我國に於ても、今や農村に於ける階級争闘が、意外に濃度を呈して來たことは争ふことが出来ない、或る識者の如きは、我國に於ける農村の階級闘争は、漸次激烈となつて、恰も露西亞に於て、彼の共產革命以來、農村貧民共をば、中央政府が援助して、地主や自作農共に對して、一種の階級戦争を挑發せしめ、平靜なる農村をして、紛亂せる修羅の巷に化せしめて、終に農業生産の大疲弊を惹起せしめたと、やゝ類似せる狀勢

が醗酵されつゝ、あると言つて居るのであるが、事實之れに相違ないのである。

運動は何所までも運動であり、そして其が、階級的な解放運動である以上、上に言つたやうな、種々の衝突的状態を發現することは、素より免かるべからざるところである、が、之れがために、兎にも角にも整調されて居た農村の生活が、殆ど致命的にまで破壊せられ、或は農業による生産の上に、大なる疲弊を生じて、其が生産量に大なる減量を見るか、夫れでなくとも、其が生産物の素質を劣悪ならしむるが如きに至つては、一般的農業の衰微を招來すべき現象として、決して之れを輕々に看過することは出來ぬものである、中には此のやうな現象の呈露せらるゝをば、全く一時的の過渡状態であるとなし、斯くして所謂無産階級支配の下に、農村生活の状態が整頓さるゝに至つたならば、斯る悲痛な事態は、求めずして解除さるゝであらうと言ふものもあるが、夫れなどは全く時期を無視した言とせねばならぬ、よし其の様な時代が出現するとしても、夫れは果して幾許の歳月を経るのであらうか、時は容赦なく過ぎ行くにしても、或る時代の出現までには、必ずや一定の期間を要するのである、此の期間に於ける農村は、果して其が命脈を保ち得るであらうか、言葉を換へて言へば、然かく救はるゝに至るまでに、

彼等農村の經濟と産業と秩序とが、曲りなりにも維持されて行くことが出來ようか、之れ頗る疑ふべきものではないか、建設は至難であつても、破壊は容易である、經濟的紛争と、産業的弛廢と、感情的背馳とは、現在の農村を衰亡さす上には、大なる威力を有するのであつて、相互に相闘ぎ相争ひつゝある間に、何時農村が衰滅せぬとも限らないではないか、ア、農村の衰滅、そして夫れに繼ぐところの或る何等かのもの、吾人は思ふて茲に至り、竦然として毛髮の豎立するを禁じ得ぬのである。

事物を批判しようとするには、先づ色眼鏡を外して掛からなければならぬ、萬が一にも、此の用意を怠るとしたならば、公平な批判や、明正な考察は出來るものではない、則ち吾人は、其の裸眼を以て、モ一度地主側に就て注視せねばならぬ。

労働争議などいふことは、原則として利益の配分に立脚さるゝことは言ふまでもない、之れを工業や其他に見ても、争議を提起するもの、側の言分は、常に資本企業家が利益の分前を壟斷するといふにある、成程夫れ等の資本企業家の多くは、實際然うした横暴の手を揮つて居るのである、そして労働者の得るものに比しては、殆ど比較にならぬ程の多額な収益割前を得て、

夫れを以て豪華な生活を敢てして居るのも事實である、皆が皆までといふ譯でもあるまいが、兎に角斯うした資本企業家に對しては、分前の不釣合を呼號するのも無理ではないと言へよう。

そこで眼を轉じて、農業に於ける地主其のものを見るに、之れは工業などの一般的資本企業家などは、餘程其の趣を異にしたところがある、工業其の他の資本家にあつては、其の収益は可なりに多額なものであつて、決して地主などは比すべくもないのである、一言にして之れを言へば、工業などの資本家と、農業地主の収益比較は、正に其が單位を異にするものである、ダカラ資本企業家の収益が大なるだけに、労働者との分前に、巨大な懸隔を見ること、なるので、其所には比較上の大なる相違がある、故に然かく懸け離れた多額の収益を得るところの資本企業家は、易々として豪華の生活を敢てするものである、ところが農業其のものにあつては、業務其れ自體の収益が、頗る貧弱であるために、地主の貪りといふものも、よし夫れがあつたにしろ、夫れは小さな収益による、二分か三分のものにしか過ぎぬのである。

ダカラ地主が、小作人に對して、多大なる収益上の分前を貪るといふことも、實際に於て餘りに不穿鑿と行はねばならぬ、最も多くの地主の中には、並外れの辛辣腕を揮つて、より多く

の分前を貪り取るものもないではないが、夫れは一般のもので無いから、茲に言ふべき必要は認めない、元來我國の如き、中以下の小地主が多く、大地主が少ないものにあつては、地主として得るところの収益は、實際に於て氣の毒なほど僅少なものである、然るに世人の多くが、農村に於ては、小作人が瘦せ衰へて居るに反し、地主は肥え太つて居ると考へて居るのは、工業などの資本労働關係をば、其のまゝ、農業の地主小作人に當箝めた迷想であつて、全く我國の農業經濟の實狀を知解せぬものであらねばならぬ。

事實に就て之れをいふと、我國に於ける農村の地主は、決して幸福安樂の境地にあるものとは言へない、殊に地主としての最多數を占むるところの、中小地主になると、更に一層の不如意に呻吟して居るものである、勿論兎にも角にも地主である以上、其が小作料としての収益は、小作人の収益より大なるには相違ない、併し之れは小作人に比較したのみであつて、其の額は決して多いものではない、ところで夫れ等の地主は、其の少額なる収益の中から、納税もしなければならぬし、子弟の教育費も支出しなければならぬ、そしてまた自村に於ける社交的費用の負擔もせねばならぬといつたやうに、随分と多額な支出を餘儀なくされるのであるから、

其が経済的の苦痛は、小作人の夫れに比して、勝るとも劣るべきものではないことは、真に同情すべきものであらう。

殊に近時の如く、小作争議など、いふ、一種痛烈なる運動が、容赦なく彼等地主の額前に肉薄するに至つては、彼等は全く泣き面に蜂といふ悲惨味を味はされる羽目に立ちつゝあるのである、過ぎし昔にあつては、従順羊の如かりし小作人も、今では鋒を逆にして挑みかゝつて來るのである、而も時勢が小作人に有利な氣勢を與へて、其が勢力の強大にして侮り難きを見ては、地主としても頗る悲觀せずには居られない、小作料は思ひ切つて値切られるが、生活上の支出は依然として減するところがないのである、進んでも退いても、中小地主としての算盤が、二進も三進も行かぬとなつては、到底農村に居らるべきでない、斯う考へて來ると、地主といふものが、如何にも馬鹿らしいものに思はれて仕方がない、今までは地主として、多少の誇りは有つて居たのであるが、今日となつては、夫れさへ一朝の夢と破れて、自分ながらつくづくと不満の感に堪へぬのである、此の上農村に止まるといふことは、經濟の上からしても、精神の上からしても、到底許されぬところであると悟つた彼等は、往々にして農村落ちを敢てし、

相率ゐて都會に出るのである、然るに此の農村落ちさへ出來ずに、餘儀なく自村に止まつて居るものは、數に於て最も多くを算するのであるが、此等のものは、歲月と共に迫り來る生活難と戦ひ、一面には強硬なる小作人の運動に對する防禦に憂身を棄して、而もだん／＼と絶望の淵に向つて進み行くもので、其が心事の悲惨は、到底筆舌の盡し得るところではない。

とは言へ、地主として斯うした慘境に立つといふことも、畢竟するに彼等に徳性の缺陷があるからである、言葉を換へて之れを言へば、彼等にして今日の窮地に立つといふことは、寧ろ自業自得であるとも言へよう、何故であるかといふに、地主階級の多くは、たゞ土地を所有して居るといふに止まり、自分達としては、何等の働くこともないのである、則ち彼等は働かないで生存して行かうとするものであるからである、斯うした心懸けは、自然地主をして、一種の遊民に化せしむるもので、摯實剛健を以て本領とする農村居住者としての半面資格を失墜したものに外ならない、彼等が其の經濟の上に、また其の地位の上に、挽回することの出來ぬグラツキを生ずるといふことは、蓋し惟しむに足らぬところであらう。

そは兎に角として、所謂中小地主——モ少し廣く言へば全地主——が、全然没落してしまつ

たとして、其が所有であつた土地が、今の自作農や小作人の手に歸してしまつたら何うであらう、國中には、農民としてたゞ自作人ばかりとなつた曉に、農民は果して何んな形態に變化するだらうか、勿論斯うなつた曉には、其が農地よりする収益の全部は、自作人に於て其のまゝ、自己の囊中に收められるに相違ないが、たゞ夫れだけで總てに満足が與へらるとは考へられない。

先づ我國に於ける、農業人口の現在は如何の状態であるかを考へて見る必要がある、ところで此の状態が何等かの變化を來たさない限り、自作人に於てもより以上の生活向上は望むことが出來ないのである、其の他にあつては、農業の經營や技術が現在の程度であり、納租や教育費等の負擔支出額が、依然として輕減せられざる限り、自作人は依然として其が窮地を脱することが出來ないのであらう、然うしたならば、今日の水呑百姓は、矢張り其の時に於ても水呑百姓であつて、物質的にも、精神的にも、何等稱すべき得益はないのである。

併しながら小作問題は小作問題として、何等かの解決を見るべきものたるは疑ひを容れぬところである、ところで其が問題は何れによつて解決さるゝものであらう、則ち吾人の見るところを以てすれば、前にも一寸述べて置いた通りに、農村を擧げて、悉く自作農とするか、また

彼の工業労働者の究意理想とする工場管理に於けるが如き、土地國有を實現させるより外には、差當り名案らしいものは見當らぬのである、則ち此の二策の中、何れに歸着するとしても、所謂小作問題なるものは、之れによつて残りなく解決さるべき筈である、そして小作運動なるものも、此の時を期して終焉を告ぐるは明白である、斯くして比較的に至難であつた小作問題が、辛くも解決されたことを以て、農村の雲霧は残る方なく一掃されたものと見るべきであらうか、否々吾人の見るところを以てすれば、單に之れだけでは、決して農村百年の大策が樹立されたものではないのである。

第十八章 農村問題より觀たる思想中毒

小作問題が解決されたと言ふことは、農村に於ての紛争が絶滅した事を意味するに相違ないが、此の問題が解決された後に、まだ重要な問題が取り残されて居ることを忘れてはならない、敢て問ふ其の重要な問題とは何であるか、則ち其の一は農的産業の問題であつて、其の

二は農村生活の問題が夫れである。

一たび思ひを茲に馳せたならば、農村の問題が、單に小作人問題のみに止まらぬといふことが知解さるゝであらう、則ち小作問題が解決されたからとて、夫れで農村問題が全體的に解決されたものではない、また前に掲げた二箇の問題が如法に解説されて、其が實効を見ない限りは、たとひ小作問題にして解決されたとしても、素より些の解決的價値を有するものでないことになるのである、デ吾人は眼を農村の全體に注ぎ、農的産業と、農村生活の二大要項に就て、如實的批判を試みて見よう。

農業の目的が、農業産物の收穫にあることは、改めて言ふほどの必要もない所であらう、併しながら農業産物の收穫といふ事に就ては、其所に大なる實際的考慮を要すべきものがある、従來に於ける如く、自然的に之れを植えて、自然的に之れを收むるといふ單なる仕方では、決して進歩した今日の世界に適合したものは言へぬのである、殊に我國の如く、耕作の土地に些の餘裕を有せぬ國にあつては、此の農産的施設に向つて、より大なる施設と研究とを費さなければならぬのである。

我國に於ける人口上の關係は、言ふまでもなく農産上に至大至重の關係を有するものである、土地の量に定限があつて、而も人口の量が累加的である以上、到底今日の農業施設に安んじて居ることは出来ないのである、況んや農業者夫れ自身としても、其が生活の上に、更に一步を進むべき現實の希求を有しつゝあるからには、否が應でも、現在の有限の土地に對して、より以上の農産能率を高くせねばならぬのである、之れを他の工業や何かに就て見ると、夫れ等は比較的、所謂能率的研究もなされて居るし、其が研究から得た諸般の施設も講じられて居るのである、ところが農業其のものに至つては、兎角無爲にして化すといつた趣があつて、由來何となく、社會の進運や、科學の發達に副はない傾きがあつた、そして前にも言つた通りに、殆ど自然的に植えて、また自然的に收むるといふ外に、何等積極的方法や手段などは講ぜられぬのであつた、勿論農業學なる科學もあつて、一應の研究も施設も講ぜられて居るには相違ないが、之れとても、決して大規模なものでなく、進んで國家社會の期待に貢献しようとする底のものではない、其の講ずるところは、土を耕して種を植ゑ、之れを長ぜしめて果實を收むるといふだけに止まり、根本的に農産地の整理を遂行するとか、理想的に農産を改善して行

くとか、如法的に農業經濟の大本を樹立するとか言つたやうな、徹底的研究と施設とに至つては、遺憾ながらまだ不備の地を脱し得ぬのである。

農業による収益が、工業其他に比して、非常に低いものであることは、吾人は既に之れを述べたが、自作人にして、たとひ若干の地所の振り當てを得たとしても、單に現在の通りの地所を獲得しただけでは、農民としての現代的地位を確保して行くことは出来ぬのである、則ち彼等は、一方に於て凱歌を奏すると共に、また他方に於て、自己の天職たる農業に就て、其が進展發達の途を講じなければならぬ、そして此の要約を果たすためには、所謂農村科學の普及も企圖しなければならぬ、また農村生活の充足をも計策しなければならぬ。

現代は疑ひもなく經濟を以て社會の主要部分としなければならぬ、苟も經濟を度外に置いては、決して其の生活に命脈を與ふるものではないのである、故に今日とても然うであるが、將來に於ける農村の住民たるものは、よく心を茲に潜め、限りある土地を督勵して、農産收納の十全を期すべきものである、若し此の用意を懈り、徒らに自作農たる境地に寸快を貪り、漫然として今日の現状を墨守するのであつては、折角現時に於ける農民運動が成功したとして

も、結局は何等得るところなき失敗に墮しなければならぬのである。

以上に於て、吾人は一わたり、地主と小作人との爭議に就て觀察したのであつたが、之れを今日の現勢に就て批判するときは、所謂農業者其のものとしての缺陷は、地主の側にも存するし、小作人の側にも存せられて居るのである、此際地主側としての、最も賢明なるべき態度は、先づ第一に土地の占有を適當にすること、第二に自ら働いて農民としての實に居る事である、土地の占有を適當にするといふのは、己れ一個人に於て、多くの地量を所有することを避くるもので、斯くして己れに餘りたる、換言すれば己れの力を以てしては耕作することの出来ない土地を、自發的に他に移讓することである、之れが若し土地國有である場合には政府に、自作農制定である場合には現在の小作人に、夫れ相當の代償を以て其の所有權を讓渡すべきものである、而して此の土地の移讓が、地主其のもの、自發に出づるところに、至重至大なる平和的貢獻が見られるのである。

夫れから現在の地主なるものも、他の資本家と同様の關係に於て、小作人に對する態度を一變しなくてはならない、元來小作人なるものは、農業労働者として、必須缺くべからざるもの

であることを知悉したならば、従來の如く之れを奴隸視したり、臣從視したりすることの、如何に暴慢であり、如何に無意義であるか。考へられなくてはならぬ、小作人其のものは、農村に於ける、立派なる働き人であり、地主が地主としての經濟と地位を保ち得ることが、全く此の小作人あるが爲めであることを自覺したならば、地主はたとひ小作人を待つに、客禮を以てしないまでも、少なくとも之れに向つて人格的敬意を支拂はなければならない、そして地主自身に於ても、また一個の農業勞務者であると覺悟し、逸樂を去て、耒耜を執り、身を以て小作人と共に働くの擧に出づべきである、而して收益は公平に且つ分明に、毫も私することがないのであつたら、小作人其のものに於て、何等の惡感情をも有たぬであらうし、また何等の異議要求をも提起すべき餘地さへないことになつて、其所に融然たる兩者の意思疏通が見得らるゝのである。

土地が國に屬すべきことは、何人と雖も疑はぬところであらう、今日謂ふところの所有權なるものは、其の實は法上の占有權と見るべきものである、故に土地國有論の如き、一見甚だ突飛のやうであるが、よく考へて見ると、決して突飛でも何でもない、彼のソビエト政府が取つ

た政策のやうに、理も非もなく、片つ端から無償でドシ／＼取り上げるやうなことでなく、相當の代償を以て、之れを國有の元に復しようとするのであつたら、地主は進んで之れに應ずべきものである、徒らに古來よりの因襲に捉はれ、祖先傳來の土地を手放すことは出来ぬなど、頑張つて、詰らぬ意地を立てようとする如きは、時代に適應すべき大道理を知らぬものであらねばならぬ、此の如きの徒にあつては、嘗に彼等自身の痛苦を増すのみでなく、また以て國家社會の進運を阻害するものとして、斷々乎として排斥し去るべきものである。

また一方小作人の側に見るに、彼等は今や争闘かぶれの現狀に引入られたかの觀がないで、ない、小作争議といひ、階級争闘といひ、素より夫れが彼等の苦しい實生活から割り出されたものには相違ないが、而も其が積極的に、また破壊的に行動さるゝといふことは、其所に何等かの他動的衝動が無くてはならない、吾人は今日に於ける、あらゆる社會的争議を通觀するに、其の争議の聲が、往々にして、否な寧ろ多くの場合に於て、一種の争議ブローカーによつて擴大されつゝあるのを認むるのである、試みに之れを頻々として提起さるゝ争議を見るに、其が最初に於ては、單なる經濟上又は精神上の要求に過ぎぬのであるのに、一たび資本主企業

家によつて夫れが拒絶されると、茲に忽ち第三者が間接的參加者として現はれるのが常である、曰く何々會、曰く何々團、曰く何々社、曰く何々組合、曰く何々同盟といったやうな手が、所謂正義的應援を標榜して乗り出して來るのである。

而して其が應援の采配を打ち振るもの、中には、相當の人格者も無いではないが、其の多くは如何がはしいものばかりである、則ち何か一つの爭議が勃發したとなると、好餌御座んなれとばかりに、虎視眈々として乗り出して來る、そして最初は如何にも好意的態度を取つて、影武者として種々な劃策に參するのである、爭議團の方では、苦しい時の神頼みに、此等の聲援を歓迎し、夫れによつて今までに倍した氣勢を揚げる、ところで爭議がいよいよ難關に入ると、今度は影武者たる位置から脱出して、自己の主義主張を高調して表向き堂々と資本家や企業家に突進するのである、斯かる遣口は、如何にも男らしくあり、時としては正義の神の權化かとも見られるのであるが、其實は彼等の賣名策であることが尠なくない、よし夫れが賣名策でないまでも、何等かの宣傳策であることが多いのである、比較的純朴な農民や工業労働者などは、自己に味方するといふ好題目のために、一も二も此の徒に心酔して、何事にもあ

れ、其が指揮の下に苦戰惡闘することを辭せぬのである。

資本家企業家の側に於ても、之れが單純なる部内團體の請求運動であるとすれば、其が胸臆には、相當の同情も有ち、また次第によつては、應分の讓歩をもなすべき温情は持つて居るとしても、其所に一種の經濟的な煽動者があり、主義主張に對しての利用者があつて、夫れがために爭議團の態度が妙に強硬となつたと考へる場合には、感情の上に向うしても平靜を保つことが出來ない、よし其の義ならば、此方にも其の覺悟があると言つた調子で、胸に工場閉鎖の最後手段を描き、緊禪一番して起つところから、さほど擴大さるべき性狀でない爭議も、終には意外な重大なものとなつて、時としては累を各方面に及ぼし、由々しき大争鬪を惹起することさへある、正當な要求に對しての爭議や運動も、素より社會的に必要であるには相違ないが、此の如き徒輩の利用するところとなつて、馬鹿馬鹿しき紛争裡に貴重なる時と經濟とを抛ち去るといふやうなことは、大に回避しなければならぬところであらう。

そこで吾人は、今や進んで、農村生活に隻眼を投すべき順序となつた、言ふまでもなく、農業に従事するものとしては、農村生活は其が生活の全である、既に生活の全である以上、農人

としての農村生活の内容は、最も充實されたものであり、最も理想を現前せしめたものでなくてはならぬ。

人間の幸福であると否とは、其が環境に負ふところが最も多いのである、其が環境にして、己れの天職と合し、己れの生命と合し、己れの意思と合し得てこそ、吾人は初めて社会的に幸福であると言ひ得る、若し環境にして、少なくとも己れに合致されぬ或物を有するとしたら、吾人は最早幸福ではない、そして社会的に或る種の孤立を餘儀なくされねばならぬのである、人間は決して單なる衣食住のみに生きるものではない。

農民の理想は、よりよく、そしてよりよき農村に生活することであらねばならぬ、農村は彼等にとつてのエデンであり、ユートピアであり、極樂であるとまで考ふるのではなくては、眞なる農村に生きることは出来ないのである、此の點に於ては、吾人は所謂農村なるものを以て、二つの意義を有するものとして観するものである、二つの意義とは何であるか、則ち一は産業境地としての農村であり、一は生活境地としての農村である。

産業と生活、夫れは素より分離して考ふる事は出来ない、が全生活の内容からして言へば、

明かに此の二つが區別されねばならぬ、則ち生活せんがために産業に従事するといふ一面には、また産業のために生活の一面を費すといふのであらねばならぬ、兎に角農民は、産業に従事するが爲めに産業の農村に居り、而してまた其の産業の農村を以て、自己生活の本據とするもので、其が内容の二面を、同一の外形に包含させるものに外ならないのである。

今日の現況は、農村に於ての甚しき萎微を表示したものでなくてはならぬ、世人の多くは、村落を以て平靜無爲の仙境であるかの如く考へ、田園謳歌者などは、田舎を以て自然の園であり、神の園であるかに褒め稱へて居るのである、成程平靜の風はある、自然の趣はある、併しながら之れはたゞ其の外形に過ぎぬことを思はなければならぬ、眞に平和であるならば、都會とても謳歌に値すべき姿はあるのだ、苟も平和を失つたとなつては、村落であれ、田園であれ、觀じ來れば悪魔の棲所に外ならないのである。

夫れかあらぬか、近時農村の荒廢氣分は、彌が上に其の度を高めて來た、曾ては村落里閭の鶏聲狗吠を以て、自然の音楽とも、平和の基調とも聽きなされたのであつたが、今では是等のものも、何となく衰頹と滅亡とを呪ふ悲哀の音とも聞えるのである、元來我國の根基は、農村

の健全によつて確立されるもので、農村にして荒廢するとせば、我國の根基は、茲に大なる浮動を招來するものとせねばならぬ、此の時此の際、吾人が其の聲を大にして、農村の振興を説く所以のものは、決して偶然ではないのである。

言ふことは易くして、行ふことは難いのは、世情の常套事である、農村の振興、其が叫びは實に善美の響きを有つて居るのであるが、サテ其の振興策は如何、そしてまた其が施設の方策は如何、之れ眞に實際的問題として、眞剣に講究すべきものでなくてはならないのである。

農村の荒廢、則ち農村生活の荒廢は、其の影響するところ、眞に絶大であらねばならぬ、農村の荒廢による農産物の缺乏や品質低下は、直ちに全社會の經濟に大なる打撃と恐慌を齎すものである、殊に我國の如く、米穀を以て主要食とする國柄にあつては、農村の荒廢などいふことは、由々しき大事たるべきは勿論である、現在の土地全部を以てしてすら、動もすれば數的に農産の不給を恐れられて居るのに、其が僅少有限の土地さへ、耕すに其の途を得ざるに於ては、農業の前途もまた悲觀すべきものではないか。

則ち吾人の見るところを以てすると、農村の振興を策する前に、先づ地方分散の頽勢を挽回しなければならぬ、此の頽勢が挽回された暁でなくては、折角の振興策も、施すべき地點を有せぬのである、一體我國の農村が、近時然かく萎微的狀態を呈するに至つたのは、果して何等の原由に依るものであらうか、吾人は先づ此の點に向つて、別決するところがなくてはならない。

農村の荒廢は、農村の疲弊に生ずることは言ふまでもないことである、農村にして一たび疲弊の境地に陥つたとすれば、農民は最早農村に止まるべき何等の希望をも繋ぐことになる、既に其が希望の絶え果てた農村住民は、何うしても何れの方面にか、新らたなる希望を求めなければならぬ、が此の時に當つて、彼等の眼に映するものは、先づ第一に都會其のものである。

然なきだに、農民の多くによつて、趣味多き地として信ぜられて居る都會は、斯る場合に彼等薄倖なる農民を引き附けずには置かないのである、則ち農村田園に失脚した農民は、我れ先きにと都會に向つて逃れ去るのである、之れが取りも直さず、農村荒廢の主要なる原由となるのだ、夫れから第二の原由としては、農民の消極生活と、自棄的生活とを算せねばならぬ、元

來人間の生活は、其の元氣に比例するものであつて、元氣のある間は、其の生活もまた元氣であり積極的であるが、之れに反して、元氣の消失した場合には、其の生活は不活潑であり消極的である、則ち農民が、心に安んずるところがあつて、所謂其の生を楽しむといふやうであれば、其の精神状態は動的であり元氣であるのだ、ところで之れに反した逆境に立つとなつては、彼等の精神は靜的狀態を呈し、不元氣不活潑の生活を營むことになる、動的であり、元氣的地方であるところに、農民としての働きが、充分に發揮され得るので、之れに反しては、最早農民としての働きも不充分なものとなり、勞働能率は驚くべきほどに低下してしまふのは、心理的に然もあるべきことであらねばならぬ。

昔からの言葉に、衣食足つて禮節を知るといふのがある、禮儀節度は、何も衣食によつて左右されずともよき筈であるが、實際に於ては決して然うでない、衣食に追はれて、且夕汲々たるものは、禮儀節度などを顧慮して居る暇がないのである、生命あつての物種、喰ふや喰はずの状態で、禮節が何になつたものかと言つた調子で、先づ何よりも第一に物質に向つてのみ突進するのは、人間押し並べての心情であらねばならぬ、稼ぐに追ひ付く貧乏なしといふのは、

過去の時代の真相であつた、今の世にあつては、稼ぐに追ひ付く貧乏ありで、稼げば稼ぐほど、却つて窮地に引き入れられて行くのである、租税軽減は聲のみで、事實夫れが實現した例がない、教育費の増多やら、村民としての公費の負擔やら、時代的に膨脹された生活費やらが、前後左右から多額の支出を迫つて来る、夫れで居て収益には些かの増加がない、否増加がないばかりでなく、國際關係だの、大事件勃發だの、重大なる政變だの、内閣の更迭だのと言つては、財界紛亂の餘波としての損耗が浴せ掛けられるのである、限りのある少額の常収入で、限りのない多額の非常支出をさへ餘儀なくされるとあつては、農民としての立場がないのである、儘よ何うせ足らぬことであるなら、何も然う拮据營々するには及ばないのだ、斯う考へさせられた農民は、不如意から悲觀に馳せ、悲觀から絶望に走り、絶望から自暴自棄に赴くのであつて、之れもまた餘儀なきこと、せねばならぬ。

サテ自暴自棄、夫れがたとひ現實的のものでなく、然うした傾向にあるものとしても、其が農村生活に齎すところの影響は何うであらう、儉勤は地を拂つて虚しく、道義は形を潜めてしまふのである、然うした揚句が、農産の大減收となり、惹いて農村生活の大脅威が招來される

のだ、思へば彼等農民の立場もまた苦患的であらねばならぬ。

都會人士が、驕奢の弊風に耽溺するといふことは、由來定評となつて居るところであるが、現今に於ての農村に於ても、漸く奢侈の風が吹き出して來たのは、眞に慨歎に堪へぬものである、質素の本家、剛健の本元として許されたる農村の住民が、漸く時勢的に軟化されて行くのは、正しく農村衰微の一里塚を築くものである、然るに治民當局者として、直接に間接に其の職に當るものが、事の由つて來る所以のものを解せず、漫然として制章を以て治民の金科玉條であるとし、僅かに其の外表面を糊塗して、能事畢れりとなすに至つては、事の不祥之れより大なるはないのである。

如上は農村荒廢の第二の原由であるが、第一のものと相須つて、更に如實の破壊力を逞うするものである、故に苟も農村の頹勢を挽回し、更に其が振興を策しようとするものにあつては、先づ思ひを茲に致し、徐ろに其が情弊の因由たるべきものを芟除すべく施設せねばならぬ、然るに前にも言つた通りに、多くは其の革正の核心に觸る、ことを厭ひ、徒らに其の表面を飾ることにのみ腐心するところから、其の外観に於ては、最も進歩したかの如き農村も少なくない

のである、或は曰く文化的設備、或は曰く科學的改善、一にも二にも文化といふ萬能膏を貼り付けて、得々乎揚々然たるに至つては、寧ろ滑稽と言はなくてはならぬ、吾人は敢て文化を蔑如するものでもなく、科學を否定するものでもないが、斯かる假面的文化や、僞瞞的科學に對しては、一種の嫌惡と不快とを感ぜずには居られぬのである。

ところで吾人をして、切實眞摯に之れを言はしめたならば、所謂農村なるもの、改善は、あらゆる假面を脱せしめたところに、其が建設的基根を求めなければならぬのである、あらゆる假面とは何を言ふのであるか、則ち虚飾、模倣、雷同、輕佻などが之れであり、また生半可な負けじ根性なども之れに屬するのである、虚飾が一種の詐偽であることは、素より言を俟たぬところであるが、現代の農民は往々にして此の虚飾に汲々たるものがある、吾人の識れる某者が、嘗て農民の純朴に見えるのは、其の實は先天的に巧妙なる虚飾に外ならぬのであると言つたが、眞によく彼等の性狀を道破したものと言はなければならぬ、彼等の温情、彼等の謙讓、彼等の寛容、彼等の眞摯、夫れはみな彼等農民には、天與の資格とも見られるのである、併しながら彼等は、或る利害の前には、決して文字通りに純朴なものばかりではない、尤も中には、

眞に純朴なるものも無いではないが、夫れは極めて少數のものとして差支へはないのである、則ち何等かの機會に於ては、彼等は随分思ひ切つた不徳をも敢てするのである、デ彼等は、平生此の先天的虚飾によつて、巧みに自他の間に於ける關係を調節して行くが、其が内心に於ては、必ずや何等かの權謀と術數とを抱いて居るのである、試みに都會の中心に立つて、田舎から出て来た、所謂田夫野嬢を注視するならば、此の邊の消息はよく知解されるのである、則ち都會の人々は、彼等を以て田舎漢とし、多少輕侮を以て之れに對するのが常であるけれども、其の實都會の人々は、却つて彼等に愚弄されて居ることが尠くないのである、田舎の人は、表面に於てこそ、極めて慇懃であり、素樸であるが、其の内心に於ては、却つて反對に都會の人々を嘲笑して居るものである、此の現象は、一寸見たところでは、極めて不合理であり、矛盾のやうに見えるのであるが、所謂田舎人をして、斯うした心理を持たしめるに至つたのは、其所に大なる原因があるのだ。

今日農村の人々が、都會戀しの状態を呈して居るのは、決して眞底からの心情ではないのである、彼等が都會を慕ひ、相率ゐて居村を飛び出してしまふのは、生活の安定と快美の娛樂と

を得ようとする野望から來る事である、元來農村の人々は、其が精神の根柢に於ては、著しく都會の人々を憎惡する傾向を有して居る、夫れは何によつて然るかといふに、由來農村の人々は、往々都會の人々の爲めに、随分辛い目に逢はされて居る、都會に於ける通信販賣者であるとか、地方に旅する行旅商人であるとか言つたやうなものは、從來到所に田舎者を喰物にして憚らなかつた、彼の田舎廻りの行商者などが、脅喝や偽瞞や誦詐を以て、田舎者の生血を吸つて歩くことなどが、甚しく地方人の感觸を害して居るのである、ダカラ此等の徒に苛めつけられた田舎の人々は、都會の人々を以て、蛇蝎にも比して居るものである、斯うして苛めつけられ、瞞しつけられた農村の人々は、終に都會人は人の悪いものである、喰へぬ代物である、我々地方人の生血を吸ふものであると考へ、都會人を以て一種の恐ろしき人間であると斷定するに至つた結果、其が心の奥底に、懷疑的な用心と、ひねくれた心理とを包藏するに至つたので、之れが傳統的に第二の天性となつてしまつたに外ならない、經濟問題や階級問題などが、意外に早く農村の人々によつて共鳴されるといふのも、決して因由のないことではないのである。故に農村をして、眞の農村たらしむべく改めようとするには、此等の不自然を矯正して、其

が本然に復らしめなければならぬのである、言葉を換へて言へば、今日に於ける農村の一切を改鑄して、眞に意義ある農村——力あり氣あり張りのある農村——を現前せしめねばならぬのである、デ吾人は先づ其の第一手段として考へて居るのは、農村居住者たる農民をして、如何にかして、其の土に愛着せしむべき施設方法を講ずべきことである。

都會に生活する人々などは、農村を謳歌して理想郷など、稱へて居るが、其の土に住む農民の上からしては、現在の農村は決して然かく推賞に値したものであるとは思はれて居ない、晨に星を戴いて野に出で、夕に月を踏んで家に歸る彼等は、蚯蚓の如くに土を掘り、豚の如くに生活する、況んや斯くしても猶ほ收支に缺陷があり、文明の恩澤に不給がある、而も遠き僻遙の地に唵喞して、齷齪として社會の最下層に沈淪することを思ひ出で、は、彼等は何うしても農業其のものに慊焉たらざるを得ないのである。

夫れでありながら、彼等が忍んで農村の民として、營々刻苦して居るといふのは、彼等が只農業をなすより外には、何等の爲すべき事を知らぬからである、農業は實に嫌なものだ、けれども之れを爲さぬ曉には、忽ち願が乾上つてしまふ、嫌は嫌でも、何うしても之れに従事しな

ければならない、よし腕一本臍一本を資本にして、貨銀の多い都會へ飛び出すにしても、夫れでは先祖代々の墳墓を打ち捨て、しまはなければならぬ、之れが何よりの悲痛であらねばならぬ、斯う考へた彼等は、涙ながらに、ツイ踏み止まるのが常である。

が之れが農民の全體ではない、中に少しでも才能があるものや、些少ながらも餘裕のあるものは、前途の悲觀に氣を打たれて、少しでも足元の明るい中にと、何等の未練も残すことなしに、サツサと尻に帆を掛けて、一目散に都會へ飛び出してしまふのである、此の有様からして推斷すると、今や農民の全體が、擧つて農業其のものを厭つて居るものとせねばならぬ。

農は國の基なりなど、今更典型的言辭を持ち出すまでもなく、實際に於て農業は最大最重の職務であるのだ、我國の人口は七千有餘萬人と稱せられる、而して此の生民全部が、全く農産によつて其が生命を保持しつゝある以上、農業は我國に於ける、至上至高の業體であるのだ、然るに直接に此の重要な業務に従事するところの農民にして、其の本職たる農業生産を嫌惡するといふに至つては、事實沙汰の限りと言はなければならぬ、が事實は何所までも事實であり、眞相は如何にしても之れを蔽ひ遂けることは出来ない、此の如實の事實と眞相とが、愈

愈具體的に、而も共通的に發露さるゝ時期が到來したとしたならば、全國家と全社會は、果して如何なる態度を以て之れに對すべきであらうか。

一般農民が、然かく任意的に農業を厭ひ、其が天職を放棄し去るといふことは、其の原因がたとひ何であらうとも、之れ明かに一種の國民的脅威に外ならぬのである、そして此の天職放棄が、甲より乙に傳へ、乙より丙に移り、斯くして全般に移行することがあるとしたならば、正しく消極的同盟罷業の結果を齎すものである、工業の同盟罷工、其の他の同盟罷業などにあつても、國家なり社會なりが、可なりに痛切な傷手を負はせられることがある、併しながら、之れを農業に於ける同盟罷業の結果に比したならば、殆ど對比するに足らぬものであらう、あらゆる方面の同盟罷業とて、民衆の生活に影響を及ぼすべきは勿論であるが、其れは寧ろ介達の間接的であつて、直接的ではない、ところが農業に於ける罷業となると、直接的に重大な結果が與へられるのである。

斯くの如きことは、決して一片の空理でもなければ空論でもない、事實火の手は既にお藏に及んで居るではないか、此の時此の際、命の綱とも頼むべき農民の凋落的四散を目睹する國民は、先づ我が身の上の一大事として、其が慰留と救済に全力を盡すべきであらう、それからまた、農民が斯くして、流離的に都會入りをするといふことは、都會其のものに取つても、決してよいことではないのである、然なきだに都會に於ける労働者は、年々其の數を増して行く外に、日に月に進み行く科學の力によつて、在來の上にあつても、既に賃銀の低落を餘儀なくされて居るのである、然るに地方の農村から、農民がドシ／＼押し寄せて來るとなると、労働經濟に、至大な變化が生ぜずには居ないのである、科學上の發明、労働者の過剩、それにまた、農産的工業資料の減乏などいふことが綜合されて、都會の景氣が悪化することは争はれない、之れに加ふるに、貸家拂底、住宅難などのお景物まで添えられる。

此の様な狀勢であつて見れば、農民が思ひ餘つて飛び出しては見たものゝ、都會とても決して豫想したやうな樂土ではないことが分つて來る、田舎にあつた時分には、住居などはテンデ問題にならぬのであつたが、都會にあつては、之れが生活上の一大問題とさへされるのである、そして西に奔り北に行き、東に飛び南に馳せる中に、彼等は一ぱしの摺れつからしと化してしまふのである、モウ斯うなつては、彼等の一身の上に、何等の美點も認められなくなつて、

有りし日の農村の純民は、今や漂泊無頼の一遊民とまで墮落するのである、事心と違ひ、身物と背く、遣る瀬なき悲痛の悔恨は、再び彼れを驅つて故郷の土を踏ましむるのである、が惜むべし一旦都會の風に打たれた彼等は、最早眞摯に農業にいそしむことは出来ない、そして生半可な都會知識を受け込んで来たところから、兎角破壊的な言動に出で易く、或は新思想の提灯持ちとなり、或は争議の音頭取りとなり、抗争的論議の手先きとなつて、ますます農村の氣風を頽廢せしむるのである、斯くの如きは、所謂農村衰滅の累加的原因であつて、斯くして猶ほ滅びぬ農村なるものが、果して何れの地に見られるであらう。

農村の疲弊といふことは、數的にも之れを立證することが出来る、而して其が現象の先驅をなすものは、先づ自作農の減少であつて、之れと同時に見られるところのものは、自作兼小作農と單なる小作農との比較的增加であらねばならぬ、試みに農商務省農務局に於ける統計によつて、之れを表示すれば實に左の如き結果が見られるのである。

——三種農の増減表——

年次	自作農家
明治四十一年	一、七九九、六一七戸
同 四十二年	一、七九九、一四四
同 四十三年	一、七七六、八七三
同 四十四年	一、七六二、二九六
大正 元年	一、七六三、八四〇
同 二年	一、七四四、八〇一
同 三年	一、七三二、二四七
同 四年	一、七一八、九二三
同 五年	一、六九六、二二四
同 六年	一、六九五、八五四
自作農家減少	一〇四、七六三戸

思想中毒

年次

自作兼小作農家

明治四十一年	二、一一七、〇一三戸
同 四十二年	二、一一一、〇六七
同 四十三年	二、一三九、一一一
同 四十四年	二、一五五、七六三
大正 元年	二、一七六、三九一
同 二年	二、一一七、九五五
同 三年	二、二〇四、五〇八
同 四年	二、二二二、二三一
同 五年	二、二三六、五八〇
同 六年	二、二三七、八〇一

自作兼小作農増加

一二〇、七八五戸

年次

小作農家

明治四十一年	一、四九一、七三三戸
同 四十二年	一、四九七、九九二
同 四十三年	一、五〇〇、九五三
同 四十四年	一、五〇一、九三三
大正 元年	一、四九七、八二〇
同 二年	一、五二〇、九二二
同 三年	一、五二〇、四七六
同 四年	一、五二二、八一四
同 五年	一、五二四、二一九
同 六年	一、五三三、六二二

小作農家増加

二一、五九九戸

表示は明確なる事實の證明である、今上記の表について、三種農家の増減につき推考すると

思想中毒

きは、所謂農村の衰微といふことが、極めて筋立つて判知せらるゝであらう、而して此の表示以後に於ては、更に遞加されたる増減を見つゝあるもので、兎に角我國の農村は、年一年と其の萎靡の度を深めて行くことは事實である。

既に病むものは、薬を用ひなければならぬ、病みつゝあるものに向つて、何等の療法をも加へさせぬといふことは、無情といふよりは、寧ろ無智愚蒙といはなければならぬ、況んや其の病猶ほ膏盲に入らず、或る適當なる藥劑を以てせば、容易に且つ確實に恢復さるゝものであつたら、先づ何事を措いても、之れに療養の施設と方法とを與へなければならぬではないか、併しながら吾人は此の場合に於て、更に一層注意すべきところがなくてはならぬ、并は何であるか、言ふまでもなく、單なる對症的療法と、漫然たる彌縫的處置とを回避すべき事である。

對症的療法も、時としては必要であらう、また彌縫的處置も、時には益の無いこともないであらうが、此等の療法や處置は、たとひ一時の快を患者に與ふるにしても、動もすれば却つて根治的療法の支障を招來するものであるから、社會的國手を以て自ら任ずるものは、此邊に向つて、周到なる用意を懈つてはならない、凡そ何にてもあれ、苟くも社會的問題となつて現は

れて居るほどのものは、其が隠れたる奥底に於て、必ず蟠根錯節といったやうな、或る複雑的な、そしてまた廣汎性な、大なる根柢を有して居るものである、故に此の種の問題に逢着した場合には、よく冷靜の心を以て之れに對し、より深き觀察の上に、其が問題の起因するところを稽へ、彼此に亘つて其が真相を究むると同時に、其の關係的事實を明かにしなければならぬ、然るに事茲に出でず、漫然としてたゞ其の皮相にのみ捕捉せられ、眼睛透徹の上に、一點の明

を缺くときは、決して其の具象的真相を認得することはできぬのである。其は兎に角として、吾人は農村荒廢の上に、更にモ一つの原由を挙げねばならぬ、則ち現在の農村にあつては、近代人に適應した、社會的趣味を缺いて居るといふことである。

趣味といふことは、解し方によつては、頗る廣汎なものとなるのであるが、茲に言ふところの趣味は、決して然かく廣汎なもの指すものではない、則ち單に現代的農民としての現代的農村趣味であつて、都會に於けるものゝ如き、競争的、索求的、又は新機軸的な意味を有つものではない、隨つて逸早く流行を追ふやうな、所謂趣味としての趣味ではないのである。

ところで識者の中には、農村や田園には、趣味が澤山あるではないか、夫れなのに、趣味に

乏しいなどは、以ての外の大間違ひであると言つて、大々的に田園趣味論を高調して居るものもある、併しながら此の人々の言ふところの趣味といふのは、謂はゞ單なる自然趣味であるのだ、言葉を換へて言ふならば、人文的趣味ではなくて、自然的感得に基く趣味なのである、ダカラ其の趣味として算へらるゝところのものは、一として自然の外には出でぬのである、春は花咲き、夏は緑樹茂り、秋は紅葉し、冬は玉の雪降る、と言つたやうなもので、謂はゞ詩歌文章の趣味である、晝は耕し夜は安息する、自然を友として名利の外に超然たりなどいふことも、趣味として味はへば味はへぬことはないが、吾人が今實際的社會問題の圈内に引入れられつゝある農村としての趣味は、決して此の様な、自然的趣味を指すものではない。

則ち吾人が言はんと欲する農村的趣味は、少なくとも現代的に文化を配味せられたものでなくてはならない、一言にして之を言へば、取りも直さず社會的趣味であつて、此の趣味なしでは、たとひ何人であれ、到底農村に於ける現代的生活に堪へ得る筈はないのである。

各種の運動競技、夫れは今や國際的にまで進展されて、現代人の血を湧かす流行技となつて居ることは、何人と雖も異議を挟むものはあるまい、都會の子女の如きは、殆ど此の競技を以

て、自己の全生命として居るものすらあるのだ、ところで農村に於ける子女は何うであるか、未だ曾て斯る競技に關する言辭を聽くことがないのは、彼等として其の様な競技には心を惹かれぬのであらうか、言葉を換へて言へば、彼等には此等のものに就ての嗜好がなく、夫れがために何等語るところもないのであらうか、否々、事實決してそんなものではない、都會の子女が、運動競技に大なる憧憬を有つと同様に、農村の子女にも素より夫れはある、が遺憾な事には、農村の子女などにあつては、其が競技の趣味に親しむやうな時間を有つて居ない、よしまた其の時間を有つて居るにしても、其が競技をなすべき素養もなければ、また道具も設備も有しないのである、ダカラ偶さかに配達される新聞紙や雑誌などに掲載されてあるのを見て、僅かに其の枯腸を醫して居るといふ有様なのである。

此の様なことは、決して此の運動競技などに止まるものではない、科學や文學の發達による新知識の見聞的趣味であるとか、社會の進運による諸種の文化的事物の應用的趣味であるとか、または新機軸といふほどでなくとも、兎に角現代的な、そしてまた社會的な向上的娛樂であるとか言つたやうな趣味は、今日の現況にあつては、到底之れを農村の裡に求むることは出來な

いのである、實際に於て、或地方にあつては、都會の人が既に忘れ果てた彼の古式の幻燈を映じさせて、僅かに活動寫真に對する憧憬れの心を押へ付けて居るところもある、方今青年團や處女會などが地方に設置せられ、其が集會の時などに、よく娛樂的技藝が演ぜらるゝといふことであるが、其が謂ふところの技藝の種目なるものを見て、吾人は痛く農村に於ける文化的娛樂趣味の缺乏を憫まずには居られぬのである。

此の農村的趣味としての娛樂、強て言へば農民としての社會的娛樂の種目は、何れの地方にあつても、みな一樣一律の感がある、則ち盆踊りであるとか、草角力であるとか、競馬であるとか、少し進歩された所では活動寫真であるとか、田舎芝居とかであつて、之れは何れの地方にも共通されたものである、其の他としては、射撃、弓術、能樂、謠曲、音曲、歌謡、劍舞、圍碁、將棊、仁輪加、音樂、擊劍、柔術、諷吟、綱引、遠足、登山、水泳等が重なるものとされて居る、併しながら、是等のものは、所謂古老や少年子女の娛樂とされるもので、教養ある新人に向くものでないことは言ふまでもない、要するに農村にあつての娛樂といふやうなものは、全く此の在來式のもの、外にはないのであるから、彼等としては、實際物足らぬものには違ひ

ないのであらう、尤も此の外に、讀書の趣味といふものもないではないが、普遍的に圖書館を有しない地方にあつては、此の趣味に一指を染めることは不可能である、また書籍の價が、今日の如く高値である以上、之れを購讀するなど、いふ事は、經濟的に猶更不可能であるから、此點に於ても、彼等は文明の恩澤に洩れたものとせねばならぬ。

世間見ずで済まされた往昔であるなら、別に苦痛とも感じないのであらうが、苟も現代に生き、瞞ながらも文化の光輝に照らされた農民としては、何等の文化的社會的趣味なしに生活する事は、到底堪へ得られぬ所であらう、故に現在の農村をして、如實に意義ある存在を確立せしむるには、先づ何よりも第一に、現代的趣味の涵養を企圖しなければならぬのである。

趣味は人心の單調を化して、潤澤ある情緒とならしむる、此の潤澤なる情緒があつて、始めて人間は靈性な生命に生きることが出来るのである、靈性は活物であつて、決して死物ではない、活物であるが故に活動する、活動するが故に進歩する、進歩は向上の一路に足を投ずるもので、夫れ自身が先づ生々の大義を發揮すること、なるのだ、既に生々の大義に生きる以上、其所には抑へ難き希望も生ずるし、蔽ふことの出来ぬ元氣も醸されるのである、則ち此の場合

に於ける農民は、其が環境の總てに於て、躍如たる生色を認め、津々たる趣味を感得せずには居られぬやうになるであらう。

趣味のあるところには、必ず何等かの満足があらねばならぬ、たとひ其の満足が、具體的のものでないにしろ、また或る一小部に限られたものであるにしろ、既に若干の満足を得たとすれば、其所に最も力強い生活上の希望や期待が現前して、始めて人生的の落ち着き味が萌して來ることになる。

農民の精神に浮動を來たすものは、全く此の落ち着き味を有たぬからである、謂はゞ經濟上の不如意や、精神上の不満足が、身心の不安を招來し、其のために兎角浮腰とならざるを得ないのは、素より無理ならぬことであらねばならぬ、彼等が動もすれば農村を見捨てるといふのも、つまりは此の心理からで、此の浮腰が落ち着くとすれば、其所に當然愛土心も生じ、親農心も生れて來るに相違ないのである。

水は必ず低きに向つて流れねばならぬ、そして爆破は何時も壓力の薄きところに行はれるのである、之れと同様に、人間もまた其の易き生活に向つて突進する、都會の地には、あらゆる

目覺ましい文化が燦然として居る、新奇なる娛樂もあれば、文明設備も完整されて居るのである、生活の度も現代人に相應されたものがあり、交通の便も到底地方の企及を許さぬものがある、斯う考へて見ると、農村の人々は、何うしても其が心を喰はれずには居られない、世の中には然うした善美の所もあるのに、我々は何故此の田舎に躑躅せねばならぬであらうか、斯うした疑問が、遂に多くの農民を都會に集中する引綱となるのである、ダカラ永遠に、そして最も完全に、農民をして其の郷土に安居せしめようとするには、其所に積極的の大策を樹立せねばならぬのである。

ソコで其の大策は何であるかと言へば、則ち出來得る限り、都鄙の内容的差別を撤廢することである、言葉を換へて言ふならば、其の外形は兎に角として、其が實質たる内容に於ては、都會と農村とが、同一様態にあらねばならぬことである、ト言つても、都會と農村とは、地理的關係や、人文的の相違があるので、素より全然同一の程度とすることは出來ないに相違ない、が此等は實際上の酌量問題として、兎に角原則として、可及的に都鄙に於ける文化的社會的設備を平均ならしむべきものである。

さあれ都會と農村には、みな夫れく特色がある、此の特色は素より根柢的に分派されたものであるから、之れは決して彼此に混同すべきものではない、今共が一二の例を擧ぐれば、たとへば經濟の如きも、都會と農村では、其の形式を異にして居るのである、都會にあつての經濟の主眼は、消費であるが、農村にあつての經濟の主眼は、生産であるのだ、居住の如きは、都會にあつては、集中を原則とするが、農村などにあつては、散在を原則とせねばならぬ、斯うした夫れく特色は、何うしても混同すべきものではない、教育に於ても、個人の生活に於ても、都會には都會向きの教育や個人の生活があり、農村には農村向きの教育や個人の生活があるので、此の相互の特色を取り去つては、國家社會の組成的基礎を危ふうするものであることは言ふまでもないことである。

之れについて吾人が常に慨歎しつゝあることは、農村の人々が、往々にして都會の人々を模倣する事である、曾て薩州の大西郷は、薩南健兒の遊冶化を嘗つて、長袖寛帶學三都人一と喝破したのであるが、今や全國の地方農民は、滔々乎として、相競ふて都人士の容體風貌を學ぶべく腐心して居るやうである、勿論共が心事に至つては、如何にかして自己の地位を向上せしめ、

以て現代的農民としての一人格を得ようとするのに外ならぬものであるが、斯の如き事は、偶偶農民夫れ自身の崇高味を抛棄するものであつて、決して得策とは言ひ得ぬのである、況んや之れに由つて、農村の民たる特色を失墜し、惹いては共が産業の上にならぬ餘快を齎すものでなくてはならぬ、吾人は農民に向つて、斯の如き弊風を爰除せん事を希求して止まぬものである。奢侈といふことも、農村の全體を荼毒する大なる弊事であらねばならぬ、之れは何も單り農民にのみ限つたことではなく、社會の何れの方面にも禁忌さるべきものであるが、特に農民としては、極力此の文字から脱却しなければならぬのである、昔の農家は、所謂自給農といつて、共が自作の収益を以て、自給自足することを本領としたものであつた、彼等は自らに給するために、自ら耒耜を執つて農作にいそしんだものである、自給自足といふからには、他よりの補給を俟たぬことは言ふまでもないことで、収益が大であると、少であることに關することなく、必ず自作を以て、自給自足の生活を營爲したものである、如何なる場合にも、他からの補給を受け入れぬ代りに、彼等は實際的に大なる生産上の努力を費したものである、併しながら、元來が微弱な収益であり、天災のため意外な損耗に逢着するし、また時としては不可避的支出が

突發する事もあるので、何うしても多少の餘裕を存し置くべく餘儀なくされるのである、處で彼等として、其が多少の餘裕を捻出するには、支出を減する外には、何等の適策をも有せぬのである、則ち彼等は茲に儉素なるものを以て、其が處世上の最大要約としたのであつた。

素より農村の人としては、副業の外には、鏝一文の餘收もない、一升の米を炊くにも、三合の麥を加へて食量上の節約をやる、斯くして米三合と麥三合の價額の差が、兎に角支出減の形で彼等の餘裕に算せられるのである、併し开は言ふまでもなく、消極的の生活振りであらねばならぬ、今や科學の應用は、大規模の生産を可能ならしむる、現代の農村新人は出来るだけ、積極的に生活すべきであらう、則ち見すほらしからざる家に臥し、小ザツぱりした衣服を纏ひ、榮養になりさうな食物を攝り、道らしき往來を歩き、たまには町へ出て芝居も見るべく、キネマや音楽にも親しみ、新刊堆積の圖書館に出入して、少しは人間らしい生活を營むべきである、とは言へ、其の分に過ぎたるは、奢侈の惡風に墮し、勤儉の美德を害するものとして、吾人の取らざるところである。

奢侈はまた一面に於て、農民夫れ自身の心性を弛廢せしむるものである、美食を食ひ、美衣を着、美居に居り、美事を貪る、其の結果は必ずや放逸遊惰に流れずには居ない、既に放逸遊惰に身を處するに於ては、凡百の弊害が踵を接して起るのである、彼の地主と稱せらるゝ者が多くは徒手徒食に安んじて居るのは、少くとも此の弊風に馴致されたに外ならぬのである。

其の性質に於て、農業家は他の一般の資本家や企業家とは、餘程其の趣を異にして居るところのものである、故にたとひ相當の地主であつたにしろ、安逸に處し、徒食に安んじて居るといふことは出来ぬ筈のものである、前にも言つた通りに、農家本來の精神は、自給自足することにある、そして自給自足といふことは、自ら耕し、自ら收むることを以て本旨とするのであつて、苟も無意義に人手を藉るが如きは、決して農人の取るべき行爲ではない。

働かなければならぬ要約を有する農業家が、安逸徒食を事とするに至つては、其所にモウ大なる墮落がある、そして自ら働いてすら、収益上に多くを齎すことのない彼等の經濟は、第三者の無用なる雇傭によつて、更に一層大なる經濟的缺陷を生ずるの言ふまでもないことである、斯くして彼等は、強て資本家の様態を學び、而も其の長所を獲ることなしに、その最も大なる短所を得るものである、ダカラ經濟上の打撃は、日と共に長じ、其が累積した曉には、彼

等は所謂首も廻らぬ窮地に立つべく餘儀なくされるのである、そして一たび此の窮地に立つては、彼等は何うしても借金をしなければならぬこととなるのだ。

哲人であつてまた傑士であるところのフランクリンが、嘗て借金の一事を評して、人世の事相の中に、最も恐怖すべきものであると痛言したのであるが、實際人の世にあつて、此の借金ほど恐るべきものはないのである、或人が、金を借るものは、己が権利の全部を無言の裡に金主に與ふるものであると言つた通りに、一たび金銭を他借する以上、开が辨済を了するに至るまでは、其が金主に對して、全く自己としての権利を有たぬことになるのである。

融通のための、一時的借金であつて、开が容易に辨済し得るものならば兎に角、若し全くの不融通に因する借金で、其の辨済が意の如くに行はれない場合には、借用主たるものは、全く借金の奴隸に化してしまはなければならぬ、そして借金の通性として、利子に重ぬるに利子を以てし、損害に加ふるに損害を以てするので、物質上の缺損は、容赦もなく夫れに向つて肉薄して來るのである、此の場合にあつては、苟も好悪の徒でない限りは、如何に宏量大度なもので、決して安然として其が心の本然を保持することが出來ぬのである。

追求に對する痛苦、辨済に就ての懊惱、斯くして彼等は平靜なる胸裏に、止度もない荒波を立たせられる、一旦は借金によつて、當座の難儀は免れたやうなもの、今では其の借金によつて、更に幾層倍の苦痛に呻吟しなければならぬ、斯うなつては意地も張りも砂の如くに碎けて、働く勇氣も失せてしまつて、悶々として空しく其の日々を徒消してしまふのだ、イソイソとして耒耜を執るところに、價値ある生産的事業も出來るのであるが、鎖沈した意思では、仕事は總て消極的となり了るのが常である、併し人間は、窮極なしの苦痛に堪へ得らるゝものではない、そこで窮餘の對策として、又候他借の方法を執るのである、他借に重ぬるに他借、借金は何時しか借金を生んで、モウ其が本業による収益では、到底返済の途が付けられなくなるのである、が債鬼は文字通りに彼等を苛責して憚るところがない、加ふるに國家の制度は、最大の力を以て彼等に其が辨済を強要するのであるから、彼等は已むことを得ずに、積極的手段を講ずるに至るのである。

積極的手段とは何であるか、言ふまでもなく固定財産の估却である、或は動産を賣り、或は不動産を賣つて、最も不生産的な金銭に化せしむるのである、ところで此の財産の減少は、直

ちに収益の減少を意味するもので、従來の經濟的不如意は、茲に於て更に一層の不如意を加ふることは免がれぬところである、相手更つても主は代らず、同じやうなことを繰返して居る中に、財産はドシ／＼減乏して行き、業務の能率は彌が上に低下されて行く、そして終には四苦八苦の煩悶の中に、或は自暴の惰眠を貪り、或は自棄の酒盃に親しむので、斯くして彼等は、一分一秒と共に、殆ど加速度的に、再起すべからざる斷末魔を現出するのである。

如上の例は、決して尠ないものではない、否寧ろ近代にあつては、何れの農村に於ても、斯うした事實が、ザラに見得らるゝのであつて、所謂農村の疲弊なるものは、此の事實の直寫に外ならぬのである、思ふて茲に至れば、ベンジャミン、フランクリンならずとも、誰れか借金を懼れざらんやだ。

がまた一面に於て、仔細に之れを考察するときは、其の本來の収入が、如實に生活を支ふる不給程度にある點と、現代の生活状態が、餘りに急激的に引き上げられたる點とに於て、吾人は寧ろ彼等農人の借金に對して、多大の同情を寄するものである、世人は口を開けば、容易に農人の奢侈を難するのであるが、事實必ずしも奢侈とばかりには限つて居ないのである、とこ

ろで、吾人が更に一層の慨歎を禁じ得ぬところは、彼等農村の人々としての、親馬鹿子馬鹿たる事實的態度である。

方今に於ける農村の青年ほど、生半可な時代の上つ滑りをして居るものはなからう、都會の青年などになつては、猶更此の弊が深いのであるが、其は茲には別問題として、元來が剛健質實であるべき筈の農村青年が、此の魔の手に囚はれて居ることは、何うしても否むことは出来ないものである。

地方の青年團などでは、よく模範青年など、いふものを吹聴して居るやうである、勿論之れは至極結構なことで、到所隨所の青年が、願はくは斯うした模範青年のみであつて欲しいのである、が事實此のやうな可憐な頼母しい青年が、たとひ少數にても、我が農村に存在されて居るのであらうか、吾人は不幸にして、然りと斷言するほどの勇氣を有たぬものである。

農は一國の大本であるといふモットーの下に、比較的根強い生活を築き上げて來た我が農村に於て、其がモットーに反旗を翻へす青年が簇出するといふことは、農家農村夫れ自身のため、否寧ろ國家社會夫れ自身のために、眼を背くべき一大不祥の事なくてはならぬ、粒々辛

苦の下に、漸くにして一家の基礎をなした祖先を有つた農村の青年は、先づ第一に嫌ひなものとして麥飯を擧げるのである、そして第二に嫌ふところのものは、ゴツ／＼の木綿着物であるのだ、混りけのない米の飯を食つて、ベンヘラな滑らかな着物を着ることによつて、其が生活振りは正しくクライマックスを呈するのである、會ては神聖なものとして尊まれた汗も、彼等には汚ららしい、氣味の悪いものとして感じられる、會ては生々した働きの印として、心地よき感じを肩に與へた肥桶の天秤棒も、彼等には至極痛い忌まはしいものとして考へられるのである、洋服は時代服で、近代の青年には缺くことが出来ぬとあつて、無理算段しても之れを纏はずには承知しない、金色の時計、赤革の靴、象牙の箆つたステッキを弄りながら、意氣揚々として村翁野嬢を驚かすのが、彼等の希求であり、満足である。

文明の假光が、天然の月色を驅逐する如くに、人工の百合の香は、天然の百合の香を農村から驅逐する、クリームやポマードなどは、婦人の化粧料であるとのみ思はれて居たのが、今では片田舎の店頭に、群がり寄る青年顧客を待つといふに至つては、世態の激變に驚かざるを得ぬのである、が夫れ等はまだ善しとしても、彼等が生半可な物識り顔をして、傲然として唇を

聳かすに至つては、眞に鼻持ちがならぬ感じがするのである、狡猾なる都會の通信販賣業者から送つて来る安價な講義録によつて、變則的な普通學の斷片を鶉呑みにし、他人には一切不通の英語や漢語の片言を喋り立て、自惚れが昂じて生意氣となり、生意氣が昂じて長上への反抗となる、其の揚句は其が郷土を以て最も陋劣なる所となし、似而非的大志に唆かされて、父や母の慈愛的異議をも、たゞ一足の下に蹴散らし、多くの村人を尻目にかけて、意氣軒昂として都入りを敢行するのが常である。

往昔の偉人傑士ですら、蹉跎す青雲の志と歎じたのである、況んや生半可な農村青年として、何で然う易々と志を成すことが出来るものであらう、薄弱なる意思は、譯もなく都の魔の手によつて引摺り廻はされ、マンマと失敗の憂目を見せられるのである、其の結果は何うであらう、散々に荒し盡した國元からは、モウ然／＼金品を徵發することも出来ぬので、止むななく例の苦學生と化け込むのである、苦學といふと、如何にも立派らしくもあり、殊勝らしくもあるのだが、其の實は墮落生の身のすさびである。

安下宿屋にさへ見放された苦しさ凌ぎに、彼等は其日暮しの手間取り仕事をなすべく餘儀な

くされる、則ち下級な雇員から、帳場の番人、モウ一步下つては、牛乳配達か新聞配り、甚だしいのになると新聞の呼び賣りに、納豆の行商、少し氣の利いた奴でも、支那蕎麥の屋臺賣りか羅宇のすけ換へで、自業自得の悪戦苦闘、或は合宿、或は間借りに、スツカリと參つてしまひ、今は百方盡きての退却と極め込んで、のんこのしやアで故郷へ立ち戻つて見れば、驚く勿れ田や畑は既に他人のもので、曾ては地主様と威張つて居た親父は、今や見る影もない小作人と變り果て、居るのではないか。

父親も母親も、倅が成業して呉れさへすれば、家運は彌が上にも富み榮へるものとのみ信じ切つて、無け無しの家産さへも賣り飛ばして、言ふがまゝに貢いだのであつた、が破帽一箇に弊袴一着といふ、身外無一物の姿で舞ひ戻つて來たのを見ては、アツと呆れ果て、追に涙さへ出ぬのであつた、以前まだ村方に居た時分には、生意氣ながらも、少しは働いたものであつたが、都から歸つた今日では、其様なことは思ひも寄らない、勿論悔悟するといふ一念もなければ、世の中に出直さうといふ勇氣もなく、其癖以前に倍した小理窟を捏ね廻して、村の人々が爪弾きをするさへ感じないといふに至つては、實に沙汰の限りであると言はなければならぬ。

實際に就て見よ、此の種の人間は、今の世の我が農村には、量りきれぬほどウヨ／＼して居る、此の様な白痴者のために、我が農界の中堅たる中小地主が、如何に悲惨なる破滅を示して居るであらうか、春秋の筆法を以てすれば、農村を滅ぼすものは、开が農村の青年であるとも言へよう、ところで此の様なノラクラ人間となり果て、マンマと社會の害虫たる試験に及第するやうなものは、素より其の人間自身の缺陷的素質と、心掛けのよくないところに、其の因を有するものには相違ないのである、がまた一面から言ふと、其が父親たり母親たるものが、自分の子でありながら、其が果して金であるか、將たまた鉛であるかといふことの鑑別が出来ずに、所謂親馬鹿子馬鹿の本文通りに、無暗矢鱈にコマシヤクレた我が子に心酔し、鳶が生んだ鷹のやうに心得て、言ふがまゝに振舞はせるのである、けれども瓦は何所までも瓦で、決して玉となる氣支ひはない、則ち氣位ばかり高くても、元來がお先眞闇の一文不通で、終には愚劣の本性をさらけ出すのはまだしも、家を倒し親を泣かせ、農村破壊の急先鋒となつて、世の識者の眉を擡ましむるものである。

ト言つて、夫れが單に、彼れの一身一家にのみ限局さるゝものであるならば、吾人また何を

か言はんやだ、が其の愚劣が、四圍に及び八方に響き、或は社會經濟の上に大なる變調を惹起し、延いて國家の大本にまで惡果を與ふるに於ては、經世に心を有する者の到底黙過し能はざるところであらう、され依つて以つて吾人は、斯る一小徒輩の愚劣的行爲が、神聖なる農村に禍し、累を金甌無缺の國家に及ぼすことを慨歎すると同時に、殆ど自覺の可能性をも有せざる此等の徒輩に向つて、痛烈なる社會的制裁を加へんことを、敢て社會の全體に勸告するものである。

呪はれたる現代の我國の農村は、中々に數へ切れぬ、より多くの疲弊の原因を有つて居る、が此の原因の根基であるとか、其が發生の機會であるとか、現在に於ける状態であるとか、または將來に於ける對策であるとか言つたやうなことは、由來何等具體的に攻究されて居るところがない、元來此の様な農村自體に關する重大なる問題は、其が農村に定住する農人の先覺者によつて、最も如實に、最も適法に、そしてまた最も眞面目に、研究せられ解決せらるべきものである、這是實際的核心に直觸する上に於て、また彼の學究的空理空論を排去するに於て、極めて切要であり、有効である。

ところが我農村に於て、果して斯る重要な任務に堪へ得るところの先覺者とも稱すべきものがあるであらうか、之れは頗る懸念に堪へぬ次第である、今假りに農村に於て、此等の人物を物色するといふことになる、先づ第一指に屈せらるゝものは、所謂其が農村に土着するところの重立と稱せらるゝものであらねばならぬ、そこで此の重立なるものは、言ふまでもなく、相當の資産家であり、地位門閥家であつて、少なくとも其が村に聲望あるもので、何事かあつた場合には、常に處理的解決を與ふる役目に立つところのものである。

デ此の様な人物は、また一面に於て、村の地主様であることは言ふまでもない、之れは我國に於ける常例として、其の多くは、祖先よりの家格を傳へ、所謂舊家として今日に及んだものである、通常世の人が呼んで、村方のお地頭様、物識りのお旦那様、巾利きの大屋様となすところのものは、實に此等の人々である、そして村方に於て、彼等の先覺者であるといふ事は、彼等自身に於ても許し、一般に於ても許して居るものである、が之れ等の有力農民が、果して其が農村に於ける先覺者として、少なくとも農村問題に向つて、一舉手一投足の勞を執りつゝ、あるであらうか、之れ頗る疑ひなき能はざるところであらねばならぬ。

往昔にあつては、所謂村方の重立つた地主は、家産の上からしても、人格の上からしても、なか／＼にしつかりしたものであつた、勿論當時の世態にあつては、農村の風儀が一定の信條によつて維持されたので、後世に於けるが如き、遊惰の徒を醸生することが尠なかつたのであつたから、相當な家柄のものは、所謂舊家として、五代も十代も乃至は夫れ以上も續いたのであつた、けれども今日にあつては、モウ然うした梯はなか／＼に見出すことが困難となつたのである、賣りすると唐様でかく三代目といふのは、此等を嘲つた川柳子の名句であるが、最も新らしい今日にあつては、賣家札を英語で書きかねまじき有様で、而も夫れが三代までも持ち切れず、二代にして既に此の如しとは、呆れかへるの雨が、へる、眞に泣かざるを得ない。

此の様なものが重立である、有志家である、物識である、口利である、そして所謂之れが先覺であるべきものだ、彼等にして、農村問題が分るであらうか、況んやまた其が解決などいふことに對しての識見などがあるであらうか、烏なき里の蝙蝠といふ喩がある、彼等は實に此の蝙蝠的先覺者であらねばならぬ、ダカラ人物とても、なか／＼お目出たく出來上つて居て、煽てられ、ば乗氣になり、村會議員を振り出しにして、村長から縣會議員、引き続きでは目比谷

座の木偶人形の夢まで見て、ドウ／＼廻りの活動陣笠に、魂は飛んで有頂天、死んだ後の己が位牌には、我が家中興の祖と書かせる積りが恐ろしいではないか、が其は姑らく恕するとしても、此の村方の先覺者先生、お目は醒めても心は眠つて御座るか、村方の大事などには、一向の無關心で、農村が何うならうと、農民が何うならうと、其様なことには決してお構ひなした、見縊つて居た小作人が、足元から騒ぎ出して、百年目の去り狀を附き突くるに至つて、ハッとはかりのピツクリ敗亡、ハテ斯うした筈ではなかつたがは悪い落ちだ、此様な先生どもが充満して居るのだから、農村も實際みじめなものでなくてはならない、外に良知の師なく、内に善解の友なしといふ農村は、斯くて自滅の時を待つのである。

善知良能の士は、先づ國家社會を以て其が憂となすものである、身を思ひ家を念ふが如きは、眞の國士として取らざるところである、然るに方今に於ける、農村重立ちの人々は、先づ其が一身一家を以て念慮とするものであつて、國家とか社會とか言つたやうな問題は、之れを第二義にも第三義にも置くのである、中には全く此の様なことをば度外に付するものも多いので、農村自衛の上を取つて、實際有害無益の代物たるを免れぬものであるのだ。

吾人は好んで農村に於ける年長を罵るものではない、併しながら彼等が平生の行爲に見ては、何うしても口を噤んでは居られぬのである、而も此等の徒は、多くは地方の有志者たる肩書を有し、何黨代議士とか、何派評議員とか、何會領袖とか唱へらるゝもので、中央に乗り出して來ても、少しは人に知られた名前の持主であるのも尠くないのである、が夫れは單に夫れまでであつて、彼等は夫れ以外の何等をも有するものではない、彼等の朝夕に忘れ得ぬところは、一身の利害的關係である、また夫れが黨人である場合には、其が屬する一黨一派の利害問題にのみ没頭し、之れ等のためには、或は農民を賣り或は農村を售ることをも辭せぬものである、政略に對する奴隸的奉仕としては、自村の利益をも他に轉讓して吝むところがない、地方に於ける農業經濟が何う變調を呈しても、夫れが自己の懷ろに影響せぬ限りは、知らん顔の半兵衛を極め込むのが普通で、國家の大策も、農村の長計もあつたものではない、射利賣名之れ事とするのが彼等の本事であり、瀾縫姑息に之れ安んずるのが彼等の慣策であるとすれば、到底頼むべき人間でないと言はなければならぬ。

殊に地方農村から選出される代議士と來ては、其の我利的根性に呆れざるを得ぬものがある、身に何等の素養もなく、心に何等の定見を持せずして、生意氣千萬にも選良の仲間入りを企てるところに、既に彼等の沒常識が窺はれるではないか、父祖が粒々辛苦で築き上げた一家の礎を、見るが中に崩壊させるのは彼等の虚榮心である、曰く選舉費用何萬圓、之れは決して彼れ自身の腕で儲け出したものではない、此の家傳の妙藥ならぬ金錢を撒き散らして、贏ち得たる議員の肩書が、果して何れほどの利益があり功德があるであらう、若し之れありとすれば、其の利益は多大の借金であり、其の功德は田畑の估却であらねばならぬ。

村方にあつては、一ばしのお旦那様株でも、議場にあつては、一個の陣笠半兵衛に過ぎない、右へ向けオイツの采配に連れて、立つたり坐つたりする有様は、全く木偶人形と評すべきものである、夫れで居て、地方の選良を看板にして、社交上には、なか／＼の惡辣をやるのであつて、半兵衛だからとて、決して油斷がならないのである、斯うした手合が、村方の實權を握つて居るのであるから、迎も堪つたものではない、神聖なるべき農村は、何時もデモ紳やへボ政治家の陰謀策源地となつて、所謂人と物との生産地たる實は、斷じて擧がらぬことになるのである。

ダカラ眞實に農村問題を解決し、次で其が振興を圖らうとするには、先づ此等の獅子身中の虫からして退治して懸らなくては駄目だ、たとひ眞の爲政治家や、眞の識者學者達が、如何に聲を大にして、名論卓説を吐き、奇策名案を提示したからとて、内に此等のパチルスが瀰つて居るのでは、決して何等の効果もあるべきものではない。

一體今の農村は、全く盲目滅法界的に蠢動して居るものである、即ち其が精神的には、虚飾と不誠實と浮華との奴となり、經濟的には、全く收支の數字を無視した經營を事とし、社會的には、全然時代の進歩を無視した生活が営まれて居るのである、今代の人々は、皮相の世相に眩惑されて、動もすれば人類の向上と社會の進歩を云爲するのであるが、此の肯定は、全く一過信的幻想的錯誤的のものであることは、強ち識者を俟たずしても知り得らるゝところであらう、農村自身に於て既に然り、政府當局に於て既に然り、曲學阿世の識者學者にして既に然り、農村が瀕死の斷末魔にある、豈また偶然ならんやだ。

併しながら、農村は我國に於ける組成的中堅地である、苟も國家を以て念とするものにあつては、何うしても之れを此の儘に放棄し去ることは出来ない、農村の衰微は、取りも直さず國

家の衰微となるべきに想到したならば、何事を描いても、之れが救済と振興とを圖らなければならぬ、然るに之れを厄介視し、面倒扱ひにして、其が盤根錯節に觸るゝことを避くるが如きことあらば、實に國家に對しては不忠不義のものであり、生民に對しては不慈不愛のものであつて、此の如きの徒は、斷じて優良なる一般國民と伍せしむべきものではない。

デ吾人は此の場合に於て、農村問題なるもの、歸結に向つて急がねばならぬが、先づ順序として、歸結の要項を數へねばならぬ、即ち吾人は、此の要項として、先づ第一に自作農の創成を數へ、第二に家産保護を數へ、第三に農村に於ける人物轉換を數ふるものであるが、之れと同時に、其が附策として、農村に於ける文化施設と、現代的娛樂機關の設備を提唱するものである。

自作農の創成は、今や識者の輿論となつて居るものである、由來我國に於ける農村の困憊的事實に見るに、其の弊は最大農と最小農とによつて釀成されたものでなくてはならぬ、之れを統計に徴するに、我國にあつては、實際零碎なる小地區を耕耘するところの、所謂最小農なるものが、農家としての最大部分を占めて居るのである、大農は兎に角、中農であつてすら、現

時に於ける生活が、動もすれば大なる脅威を有つのであるのに、より以上に低下した零碎農となつては、到底其が生活の保障は得られぬのである。

併しながら、我國にあつては、素より大農は好ましからぬところであつて、先づ中農が適當であることは、之れまた各方面の事實から實證さるゝものである、即ち之れが理想としては、農民一戸あたりに、全耕作地の二町歩内外を與へ、斯くして所謂中農地主としての自作農たらしむるにある、そして必然的に大地主と自作兼小作農、及び小作農をして跡を絶たしめねばならぬ。

ところで此の自作農創成には、また相當の論議が提起されつゝあるのだ、即ち自作農としての土地が、如何なる形式や關係の下に、現在の小作人に配布移讓さるべきか之れである、此の事に就ては、吾人は既に前に一言したところであるが、兎に角此の要項を解くには、少なくとも二つの形式に出でなくてはならない、即ち地主と小作人との合意的移讓によるものと、土地を國有とするものが之れである。

土地の國有といふことは、農村問題の最後の解決であることは、吾人既に之れを前に述べた

通りであるから、之れは今姑く之れを措くことにする、デ一方地主と小作人との合意的移讓なることに就て考へて見ると、其所には、闕缺のない移讓が行はれ得べき事由がある、言葉を換へて言へば、現代の地主と小作人間には、地所の分讓受授に就て、充分なる可能性を有つて居るのである。

左なきだに現今の地主は、其が双肩の重荷に困頓しつゝある、小作人の側からは、小分な利益配分として八釜しく言はれるが、全體が少分の利益しかない農業に取つては、之れとても地主には輕からぬ収益の減殺であらねばならぬ、然るに家屋の修繕、社交的出費、教育費の漸騰など、一家の入費は嵩む一方なので、其の苦しさは蓋し一通りや二通りのものではない、兎に角農村に居て、代々其の土に生計を營んで來た情力があるところから、何うやら斯うやら取り繼いで行くものゝ、事情に於ては、全く切羽詰つたものであらねばならぬ、此の場合地主としては、舊夢既に破れて新夢未だ就らずと言つたもので、空しく天を仰いで悶々するのである。

眞剣なる人間の生活に對しては、事實は最後に於ける最大の力である、武士は喰はねど高揚子といつたのは昔の事、今では武士だからと言つて、食物なしに平左は極め込んで居られな

い、況して働くことを以て本領とする農民として、何うして悲觀せず居られよう、曾ては地主様たることを以て、祖先傳統の名譽的稱號と心得て居たのであるが、今日にあつては鏝三文の値すらせぬのである、此の様な空名を肩にしたところで、夫れが何にならう、イヤ何にもならないばかりでなく、却つて生活上の足手纏ひになるのである、斯う考へて來ては、彼等は最早土に對して、從來の如き大なる執着心は有たぬやうになつたのだ。

土地は其の性質として、仕舞込んで置くことは出来ぬものである、そして之れを利用することがないとしたら、最早土地としての價値はない、金錢は之れを利用せぬ時には、利殖が出来ないばかりであるが、土地は之れを廢棄して置いても、租税や公課は支出しなければならぬのである、之れを小作に預けても損が立つ、ト言つて引き取つたところで、家族の手ばかりでは始末が出来ない、又日傭人を雇ふとなると、小作にも増した損を見ねばならぬ、何方轉んでも利益のない以上、徒らに之れを所有することが不合理に考へられるのである、則ち此の場合として、彼等地主の執るべき途は、不用の土地を手放すといふ一點に出づるより外はない。

此の事は、決して吾人が一旦の推定によるものではない、試に眼を地方の農村に轉じたなら

ば、此の事實が頻々として眼底に映じ來るであらう、現に中國に於ける或地方の如き、無理やりに小作人を説いて、地所を所有せしめた地主もあつたとの事である。

夫れから之れも最近に於ける一つの事實であるが、彼等地主の中には、最も熱烈に、土地國有を絶叫して居るものもある、實際肥料は自分で買はなければならぬのであるし、夫れで居て勞銀は世間並に計算されるのだから、地主としての立つ瀬はないのである、斯うした苦しい體驗の下に、多年泣かされて居る地主は、數に於て決して尠ないものではない、此の事に就て、愛知縣鳴海町の地主達が語るところを聞くに、現時農村救済の方策としては、或は土地購入資金低利供給といふのがあり、或は農業倉庫や、開墾助成法や、産業組合などがあつて、其他にも種々な方法が講ぜられて居るのであるが、我々の見るところでは、之れ皆一種の姑息法であつて、實際的に何等の効力有りとも思へぬのである、デ此の上は、眞に絶體絶命の根本手段としての、唯一な良策がタツタ一つあるばかりだ、則ち夫れは土地の國有であるといふのである、所謂學者の純理論の外に、農村の地主としての彼等から、土地國有が説かれるといふのは、一種の皮肉であるとは言へ、また確かに斯うした農業界の上に於ける、組織的大轉機を示した

ものであらねばならぬ。

地主にして、此の様な情勢に立つものとすれば、其が土地を手離すことに於ては、素より大した異議を唱ふるものでなからうと思ふ、夫れは多くの地主の中には、損得なしに只々土地に眷々たるものもあるかは知らぬが、夫れとても大勢の趨くところに逆行することは出来ぬ筈である、夫れから現在の小作人としても、尠なくとも今日耕耘するところの地積か乃至は其が一倍半を所有すること、なつて、獨立の自作農たる地位を得るとしたならば、精神的にも、物質的にも、所謂農民としての向上が實現され、收納さるべき全收益に對して、衷心的努力的の働きが營まるべきは、蓋し疑ひを容れぬところであらう。

併しながら自作農の形式的創成のみを以て、農村の能事了れりとするは愚の骨頂であらねばならぬ、創成は建設で、効果は守成的進展の裡に求めなければならぬ、たとひ自作農なるものが、如何に立派なる形式の上に出來上つたにしても、其の實質的内容と、有爲的働作とが、眞に之れに副ひ得たものでなくては、毫も稱賛に値すべきものではない、則ち此の見地からして、吾人は其が内容と働作とに向つて、理論的と方法的との、二つの問題を吟味せねばならぬ。

自作農の創成は、十全なる農業界を創設すべき、必然的階段と稱すべきものである、そこで此の自作農をして、眞個に其が使命を果さしめんとするには、何うしても之れに向つて、一定の保護政策を執らなくてはならぬのである、其の政策とは何であるか、則ち土地政策と稱せらるゝところのものである、元來土地問題の解決には、何うしても國家の力を藉らなければならぬ、何故であるかと言へば、土地其のものは、明らかに國家の所屬たる性質を有し、其が所有者なるものは、法律によつて之れが占有を保障するものであるから、此の處分と占有に對するものに就ては、國家の力を以て、之れが保障をなすべきものなることは、當然と言はねばならぬ。

ソコデ謂ふところの土地政策とは、如何なるものであるか、そしてまた其が如何なる意味を有つものであるか、之れには其の様式によつて、多少の異點もないではないが、要するところは、土地を資本家的地主の獨占から解放して、其が所有分配をば、可及的平均にして、多數の農家に、經濟的基礎を與ふる目的を以て、土地問題を解決しようとするところの政策である、ダカラ一面に於ては、當然自作農保護政策の一つと認めらるべき性質のものである。

ところで此の土地政策なるものが、現在の我國に於て、最も重要な必須時期にあることは言ふまでもないところであるが、之れが實行を企圖する上には、更に二三の重要な準備的施設をなすべきは勿論である。

此の準備的施設の中に於ても、最も必要なところのものは、地價の不自然的騰起の控制である、英吉利のハルベン氏が、此の事に就て、土地に附せられたる感情的價格を剝奪して、其が價格をして、經濟的水平線に歸着せしむるといふことは、土地問題を解決する上に於て、極めて重要必須のものでなくてはならぬと言明したのは、極めて適切な所解とすべきであらう。デ茲に言ふ經濟的水平線なるものには、見方によつての多少の相違はあるであらうが、吾人の見解するところは、土地の收益價格を標準として決定された、最下限度を以て其が畫線とするものである。

地價をして、經濟的水平線に歸着せしむるには、素より一定の方法によらなければならぬ、則ち第一には作料の制限を法律によつて定むること、第二には自ら耕作せざる土地、則ち所謂資本的土地を所有する資本家的地主に對して、开が獲得せる社會的地位と名譽に對する課税を

負荷せしむること、第三には特殊法として、資本的に所有する、地所——則ち自ら耕作せざる土地——には、累進的又は重複的に、相當の重味ある租税を賦課する事である、斯る方法は、一見したところでは、極めて策略的であり、同時にまた甚だ苛酷のやうでもあるが、必要ならざる土地の併呑を防ぎ、農民をして、土地均霑の實を得せしむる上には、餘儀なき政策的手段とせねばならぬ。

土地の眞價値を勘考的に決定するといふことは、永遠の基礎の上に、最も必要なことである、若し此の考定を誤り、其が大本を逸するとしたならば、斯る價格上の紛争が、時々踵を接して起るべきは必然であつて、時としては、土地政策の根本義も、之れがために動搖さるゝことがないとも限らぬから、徹底的に大なる注意を以て、之れが桶を作り置くべきものである。

地價策定に就て、ルーランドは、土地の眞なる價値は、自然のまゝの土地を、最も粗放的に經營することによつて生じたる、其が原始的利益と、そして其が上に施されたる改良の費用とを加算したものであつて成り立つものである、と述べたのであつたが、眞地價を考定する上には、極めて適切なる言明とせねばならぬ、デまた此の價格評定法に、賃料主義といふのがあ

る、之れはロード・ベルックスが唱道したものであるが、此の主義による評定根義は、前記のルーランドの説にほぼ一致するものである、則ち賃料主義にあつては、土地はたゞ賃料の元本たるに過ぎないから、土地其のもの、価格は、賃料則ち土地の収益の多少によつてのみ評定されるべきものであるといふのである。

斯くの如く、土地價格の評定には、尙ほ數種の方法があるが、要するところは、ハルペン氏の所謂感情的價格を去ることに一致するもので、此等の方法によつて定められたる地價であつてこそ、根柢ある評定價と謂ふべきものである、ところで其の價格が一定の方法の上に決定されたとして、サテ次で起るべき問題は、何人に其の地所を交付すべきかといふことである、もう少し詳しく言へば、自作農の創成は、農村の革命を意味するものではない、ダカラ今に於て、一頓に全部の小作農をして、自作農に轉換せしむるものではない、限りある土地を以て、比較的大多數の小作農に割與するのであるから、何うしても優者先與の方針に出でなければならぬのは、事實の上に於て、餘儀なきこととせねばならぬのである。

則ち此の意味に於て、吾人は先づ第一に保護農民なるものを認めなければならない、保護農

民といふのは、一定の農民に、一定の便宜的保護を與ふるものをいふのであるが、此の保護農民たり得るには、其所に一定の資格がなくてはならない、則ち此の資格のある農民を限定して、夫れに自作耕地を分與し、所謂自作農たらしむるものである。

デ此の優良農民たるべき資格と條件とは何んなものであるか、之れにもまた一定の様式がなくてはならない、則ち農民の資格審査問題なるものが生じて來るのである、そこで之れを一般的にしては、先づ農民としての實質的價値が考査されるのである、實質的價値といふのは何であらうか、之れは取りも直さず、其が實際的農民として、果して根本的に働き得る可能性を有するや否やといふことを考量することである、世の中の言に、腰掛け的とか、暫定的とか、一時的とかいふのがある、此等は何れの業務に向つても、當然善しとせぬところのものであるが、殊更農業者としては、最も忌むべきことであらねばならぬ、元來農事其のものは、其の性質に於て、永久的であり、恒在的であり、不動的であらねばならぬのである、永久的である故に、遠き將來に對する農事的設備も出來るし、恒在的不動的である故に、全精力と全經濟とを傾注することも出來るのである、ダカラ苟も優良農人として、保護農民たるに適するものは、其が

全生涯を通じて其の地に貢献する底のものでなくてはならない。

次にまた耕地其のものに對して、切實なる見解を有することが必要である、從來何人であつても、兎角土地其のものをば、資本視する傾向があるのだ、故に農民などにあつても、動もすれば之れを資本的に扱ひ、容易に融通使途に供するのであつて、之れが殆ど在來農の通弊と言はるゝところのものである、之れは前にも言つた通りに、直達的に農民の困弊を招き、介達的に農村の衰微を來たす原由をなすものであるから、此の混同的謬想は、如何にしても農民の胸奥から排除すべきものである、ダカラ所謂農村に於ける、優良農民の資格としては、必ずや土地を資本視せぬものであらねばならぬ。

土地殊に耕地其のものをば、單なる土地とのみ解するものに向つては、素より何等の言ふべきものを有たぬのであるが、少なくとも土地其のもの、眞義に觸れようとするものにあつては、土地其のもの、有つ正確の意義を解知しなくてはならない筈である、此の正確なる意義を領せぬところから、人は往々にして其が取扱方を誤り、農民にあつては、所謂土に叛くといふ結果をさへ招來するものである、デ耕地が既に資本視すべからざるものとしたならば、如何な

る定義を以て之れに對すべきであらうか、此の問題は、極めて切實なものではあるが、其が解答は、至極簡單に言明され得るのである、則ち耕地は耕地として、何所までも勞働の自由と、經濟の獨立とを保つところの、生活の基礎として取扱はるべきものであるといふのが之れだ、此の明快なる定義が頭の中にあるとしたら、土地を以て資本扱ひにすることなどは、到底出來得べき筈ではない。

夫れからモウ一つ、優良なる農民は、其が耕地に對して、より以上の愛着的熱誠を有すべきことである、夫れは何故であるかといふに、土地に對して愛着心を有つものは、農人としての天職に、不可動的固定性を附與するものであるからだ、そしてまた一面に於ては、其の土に愛着する熱誠があるだけに、其が土地に對して、更に大なる忠實を有つものである、此の忠實、則ち土に對する忠實こそ、農人としての資格に於ける、最大最要のものでなくてはならない。

夫れから、保護農民たるべきものには、農業に經驗あるものといふ條件が必要とされるのである、則ち一個の農人として、農村に於ける農民生活の體驗者でなくてはならぬといふことである、之れは言ふまでもなく、眞農保存の意味であつて、農村の基礎をして鞏固ならしむるに

は、切要缺くべからざるものとせねばならぬ、然なきだに方今に於ける農村の衰微が、全く此の眞農の減乏に因する以上、其が存置的保護は、必須的政策であらねばならぬ、我國に於ける現代の農村は、確かに眞農其のもの、減乏を示すと同時に、一方に於て、似而非農の瀰漫しつつあることは、争ふべからざる事實であらねばならぬ、ところで此の似而非農なるものは、其が實質に於て、固定農民たる資格を有せぬことは言ふまでもなく、却つて農村に於ける一種の廢頽性パチルスとして、其が存在を拒すべきものでなくてはならぬ。

何れの事業たるを問はず、大なる克己的忍耐を有することは、言を俟たぬところであるが、農業に於ては、更に其が大なる必要條件たることを思量しなければならぬ、言ふまでもなく農業其のものは、其の性質に於て、元來が乾燥無味であることは免れない、そして一年四季を通じての作業が、他の何れの業務に比しても、より大なる努力的勞苦を有つものであるから、餘程の克己的忍耐力に富んだものでなくては、農民としての永久的農村生活は營み得ぬものである、彼の永年都會に往み馴れた人などが、何か感ずるところでもあつて、氣まぐれに農村の人となり、物珍らしげに耒耜を執るものもあるが、夫れが物の三年と續いたことがないのは、

明かに這間の消息を語るものでなくてはならぬ、農業は面白いものであるとか、趣味があるものであるとか言ふやうなことは、眞に農業の痛苦的であり、煩勞的であるといふことを知解せぬからで、農村に於ては、斷じて斯る一季半季的出來星農人を歓迎せぬのである。

勞苦を知つて之れを厭はず、無味に居て而も之れを嫌はぬといふところに、眞實なる農民の資格はあるのだ、よく農事の性質を解し、農民の立場を領し、斯くして農村の生産的地位と、農業の社會的使命を知ることによつて、彼等は土に對する最上の忠實者として、其が永遠恒存の農人格が得らるべきものである。

夫れからモウ一步を進めて、農民としての内的資格にも考慮を拂はなければならぬ、則ち其が性格、境遇、能力、之れ等のものに向かつて、詮考を要すべきものである、如何に農事を知解し、農技に通曉し、農業に愛好心を有つて居たからとて、其の人の内的資格に缺陷があつては、決して理想的農民と稱することは出來ない、言葉を換へて言ふならば、農民としての性格は、其が向上進歩に大なる關係を有するものであるし、其が境遇は農村に於て安心立命的境地に活動し得るものなることを要する、そして其が能力は、農民として全般に亘りて、最

も均齊的に、そしてまた實用的に發達されたものでなければならぬ、智力といひ、體力といひ、完全に發達されるといふことは、農民にあつても必須の條件である、農業に於ける文化的施設といふことも、其は直接に運用の任に當る農民の智力に俟つべきものたるは言ふまでもない、夫れから農業が純勞働的であることは言ふまでもないことで、此の勞働に堪へ得る體力を有すべきは何等説明を要せぬところであらう、兎に角農村に於ける農民としては、如上の素質を有すべきもので、殊に保護農民としての待遇を受くべきものは、此の種の有資格者でなくてはならぬのである。

農村の改造が、今日に於ける最大急務であることは言ふまでもない、然なきだに困憊の極に達して居る農村は、現下に於ける諸風潮の影響を受けて、殆ど瀕死の状態にあるものとせねばならぬ、故に今日に於て、其が對策に宜しきを得ぬやうなことがあつては、農村は遂に再起すべからざるまでに萎頓してしまはなければならぬ、勿論世の識者にあつても、夙に茲に見るところがあつて、可なり聲を大にして、其が挽回と振興とを叫ぶものも多いやうである、併しながら、百の聲明は、一の實行に及ぶものではない、徒らに聲を大にして叫ぶものも、其の胸

底には何等の成案があるか、よし其が成案ありとするも、夫れにして、果して其が要求さる、ところのものに適應するものであらうか、吾人は現在の總てに見て、此等に對する疑ひと不安とを禁じ得ぬものである。

農村をして、將來に大なる生命を附與すべきものは、實に其が根本的改造の實現であらねばならぬ、之れを今日に於て見るが如きものにあつては、所謂姑息繙縫の對策であつて、素より最後の斷案と稱すべきものではないのである、果して然らば、所謂其の根本的一策なるものは何か、吾人は些かも躊躇することなしに、其は農業の合理化であると答ふるものである。

農業の合理化といふのは、農業夫れ自體に於ての、文化的化成であつて、之れが前提とされるものは、農業の合理的經營である、そこで此の合理的經營を完行するには、現代的知能を以て、其が行動の基礎とせねばならぬ、則ち第一には科學的知識を必要とし、第二には經濟的知識が必要とされる、併しながら、農業其のものにあつては、其が經營的範圍が、比較的に廣汎性なものであるから、如上の二知識の外に、更にモウ一つ、綜合的企業能力なるものが必要とされるのである、則ち其が基礎的たる科學や經濟の施設運營につきて、適切なる策應的能力を

有し、此の能力によつて、農業なる企業の手腕を有すべきことである、如上の如きものを以て、農民の最優なるものとし、之れを保護農民とすることには、何人とても異議はない筈である、則ち此の保護農民に對して、政府は一定の保護政策を與へるのだ、保護政策として採るところのものは、素より多種多様であり、國と所によつて其の方法を異にするので、必ずしも一定するものではないが、彼の政府をして、米の專賣を營爲せしむるが如きことは姑らく措くとするも、其の大體に於ては、之れに向つて、便宜的の援助と、法制的保障とを與へ、一方夫れに對する義務として、農民としての或る條規を設定するのを常として居るのである。

便宜上の援助といふのは、推定されたる保護農民が、一定の土地を購入するが如き場合に、又は其が農業上の施設や改良などを行ふやうな場合に、之れに對して、資金供給上の各種の便宜を與へるのである、例せば信用資金の提供、低利資金の貸與等の、農業銀行などの便宜的融通が之れで、斯くして保護農民としての恩典に均霑せしむるものである、夫れから法制的保障といふのは、所謂保護農民に對する家産保護法であつて、之れが實際に當つて、極めて徹底的に有効なものである、則ち保護農民の所有に係る地所(耕地)に就ては法律を以て其が所有を確

保すると同時に、如何なる債權も之れに一指を觸るゝを許さぬものである、隨つて其の地所に對しては、其が所有者といへども、自由處分をなす能はざることを規定するもので、平たく之れを言へば、賣買も入質抵當もなす事を禁ずるもので、一面から言へば、否應なしに其が所有を的確ならしむるものである、此の成法たるや、頗る干涉的ではあるが、土地を以て往々資本視せんとする農村にあつては、決して謂れないものではない、抑々此の農家に於ける家産保護の政策は、我國の往昔に於ても實現されたものであつて、舊幕時代に、家屋敷田畑の永代賣買を禁制條目としたる如きは、全く今日に於ける家産保護政策の先驅たるものである。

ところで農村に於て、モ一つ重要な問題がある、夫れは何であるかといふに、農力均衡といふことである、農力均衡といふのは、土地と人間、換言すれば働くべき地量と、働き得る農民との、釣合的關係を稱するものである、方今農村に就て語るものは、往々にして此の農村人口問題に説入するのであるが、其の説くところのものは、先づ積極と消極の二つに分るゝのが常である、其の積極説を執るものは、農村に於ける人口の過剰を云爲するもので、消極説のものは、之れに反して其が人口の缺乏を云爲するものである、併しながら茲に斷つて置かなければ

ならぬことは、此の場合にいふ農村の人口といふことは、必ずしも農村現在の人口の實數をいふものでなく、つまり農村としての、所要農民數を指すものである。

そこで或者は農村には人口過剰せりといひ、或者は之れが缺乏せりといふ、双方の言ふところに相違があるのは、畢竟其の見方が異なるからであつて、斯る問題は、實際的な統計としても、之れを明確にすることは甚だ困難なものである、故に今一言にして双方の理否を判別することは出来ぬが、吾人が公平なる高所に立つて見るところでは、現下に於ける我が農村の人員は、其が容積に於ては過剰的であるが、其が質量に於ては缺乏的であるとせねばならぬ。

斯の如き吾人の所言は、甚だ奇矯であるかの如く感じられるであらうが、事實は何うしても此の外には出でぬのである、試みに足を農村に投じて、其が住民の上に一瞥を與ふるならば、此等のものは釋然として氷解するであらう、彼の地方青年子女が、陸續として都會地に趨るもの、多きに見ても、また曾ては相當の地位にありし農民が、家を壊ち産を抛ちて、遑々乎として桑梓の地を見捨て、去ることに見ても、農村に於ける樞要人員に缺陷を來すべきことが想像されねばならぬ、彼の消極論者が、農村人口の缺乏を説くものは、職として此の理由に基くも

のである、が之れは其の盾の一面を見て、他の一面を見ざるものであつて、決して正當なる觀察とは言ひ得ぬのである、何となれば、成程農村の子女や固定農が、頻々として都門や市街地に趨ることは事實であるが、夫れと同時に、一たび故郷を見捨てたものが、更に靡然として農村に歸復し來る者も尠くないし、かつ嬰兒の出産率はまた鼠算的に増加の一方である、則ち加減的數の上に於ては、何等損益するところがないと言はねばならぬ、が仔細に之れを考察すると、出入によつての數的損益はないにしても、再入者にあつては、其が農民としての能力には、夥しい減亡が見られるのである、彼等の多くが、都會や市街地の空氣に軟化され、精神的にも、肉體的にも、眞農としての實力を損耗しつゝ、已むことなしに歸村するのが例であつて、此の結果として、離村者の能率と、入村者の能率とは、多大の距離が生じられるのであるから、結局量に於ては勝るところがあるとしても、質に於ては劣るものでなくてはならない、之れ則ち吾人が、容積に於ては過剰的であり、質量に於ては缺乏的であるとする所以である。

此の事實に鑑みて、吾人は更に農村に於ける、人物轉換の必要を高唱するものである、言葉

たるべき地に移住せしむることが必要であると信ずるものである、之れは適材適所の意味で、何も農村にのみ限つたことではないが、限定されたる地量に於て、如實の勞作を營爲すべき農民社會にあつては、更に最も必要な施策とせねばならぬ、言ふまでもなく今日の農村に須要なるものは、眞に農民として働き得るところの男女であつて、逸樂安居して文明を衒ふが如き長袖者流やネクタイ式を要するものではない、斯くの如きものは、農村に於ける不適農として、消費地區に身を移すべきものであらねばならぬ、如何に共生が社會的生物の原義であるとしても、また人生が共存を以て其が根本の眞理とするとしても、異端者と混在してまでも、其を無意味に扶養するの愚に堪へぬものである。

不適農が農村に定住するといふことは、明かに生産の原則を破壊するものでなくてはならない、そして斯く生産と消費とを粉亂らしむる結果は、農村に於ける根柢的經濟を紊亂せしめ、惹いては一地方一國家の全般的經濟をも擾亂せしむるもので、適不適の問題は、茲に至つて、或る罪惡の問題に移入せねばならぬこと、なるのだ、之れは單に第二者第三者の考ふるに委すべきものでなく、當該者自身に於て、より多き考慮を費すべきものであらう。

吾人の唱ふる人物轉換は、如上の意見に立脚されたものであるが、之れと密接した關係に於て、吾人は更に適者(都會に於て土工人夫車力の如き過激的な筋肉勞働に服し居る者)の歸農といふ一事を絶叫せねばならぬ、之れは世の識者が既に喧しく唱道して居る所であつて、別に新しい所説といふのではないが、由來其の呼號するところのものは、所謂呼號のみに始終することを思ふては、吾人は更に新らしき聲を以て叫ばずには居られぬのである。

農村に於ける勞力の缺乏も重大事ではあるが、智力の缺乏も更に重大な問題であらねばならぬ、然るに方今の時勢にあつては、智力ある徒が、申し合はせたかの如くに、農村を見捨て、頼みぬといふ傾向があるのは、實に農村夫れ自體のため、否寧ろ國家百年の大策のために、痛歎大息に堪へざるものがある、一體農業其のものにあつては、一見したところ、別に智識階級の手を要せぬやうであるが、事實は決して其の様なものではない、殊に舊來の如き馴致的農業であつたらざらず、苟も現代的文化式農業としては、智的農民を要することは、更に一層切要なものがあるのだ。

古代式疏水法を固守したり、父祖傳來的播種法にのみ拘泥して居るやうな輩には、文化式科

學的農業法などが分る筈のものではない、モウ一層極言するならば、今の農業界は、最早李兵衛や田吾作の舞臺ではないのであつて、眞個文化的農人の舞臺に廻轉したのである、土地の能率を積ふることなしに、盲目滅法に父祖傳來の處方を恪守するの愚は、到底學ぶべきものではない、則ち我が振興さるべき文化的農村は、原則として新文明の智識を享有した農民を以て組織されたものであらねばならぬ。

此の要約によつて考察するときに、吾人は其の農村以外に逸出されて居るところの、其の農村出身の智識階級に向つて、須らく其が農村に歸來すべく懲誦するものである、我國の政治が、中央集權であるにしても、地方に於ける自治は、立派に地方の治民に貢献しつゝ、あるではないか、都會や市街地が、如何に智識階級に對して便宜的であるにせよ、之れによつて智識階級の總てが、擧つて農村を見捨てるといふことは、所謂智識階級の叛者であらねばならぬ、國土は素より國家に屬するものであるが、其が利害の負擔は當然國民全體の上にあらねばならぬ、故に苟も國民たるものは、其が國家に對する義務として、各々其の所屬地方の安寧と進歩に貢献すべきは、理の當然なるのみならず、斯くの如きは治政の要諦として、最も簡捷的であり、最

も實際的であると言へよう。

知識階級が知識階級としての社會的待遇を受くる所以のものは、あらゆる事物の上に、究竟的理解を有する故である、學者には學者としての道德がある、則ち知識階級には、知識階級としての道德があらねばならぬ、果して彼等に斯うした道德がある以上、彼等は其が道德の指示するところに従つて、其がベストを盡すといふことが、其が地位に於ける、最大の社會的義務であらう、然るに世の多くの新人は、田舎を以て自己の非理想境となし、都會や市街地に於て活動する事を以て、其が價值ある生活として誇らうとするのは、處世的に近視眼であると言はなければならぬのである、都會や市街地には、都會や市街地としての新人があると同様に、農村にはまた農村としての新人がなくてはならない、片輪的な人物配給は、決して國家なり社會なりの祥事ではないのだ。

都會を以て文化の巷であると考察することは、頗る時代後れのものでなければならぬ、文化は何も單り都會にのみ限らるべきものではない、津々浦々は言ふまでもなく、炭竈の烟棚引く深林の奥にも、文化の風が吹くべきである、況んや國家組織の中堅たる農村に於て、文化の施

設が喫緊であるべきは、識者を俟たずして知るべきであらう、之れを要するに、今の時は、少なくとも新知識を有したものは、何事を措いても、其が自村に立歸り、そして其が享有する能力の範囲内に於て、自村のために盡瘁すべきものである、勿論斯る場合に於ては、彼等は農村に於ける善良なる指導者として、其が受けたる教育の全部を披瀝し、以て指導者たる責務を果たすべきものである、而も此の事たる極めて實踐的であり、躬行的でなくてはならぬのであるから、事に之れに當るものは、多大なる決心を有しなくてはならない、機械力の應用であるとか、土地の生産増加であるとか、自他收納の均衡的分配であるとか、農業趣味の開発であるとか、農村補習教育の普及であるとか、農村娯樂の創設的指導であるとか言ふやうなことは、此等新人たる知識農の手に俟つ外はないのである、吾人は再び叫ぶ、歸れ新人、躊躇することなく汝の農村へ！と。

第十九章 生活問題より觀たる思想中毒

方今に於ける社會相は、其の歸一するところに於て、必ずや經濟的根義に逢着すべきものである、あらゆる世上の事相は、全く此の經濟的根義の下に出發されるので、苟且にも經濟根義を外にしては、決して世相の一をだも理解することは出来ないのである、デ問題は頗る多種多様に岐れて居るのであるが、之れを詮じ詰めて見ると、權力と金力との存否問題に歸着するものである。

一切平等が、人世の根義であるにしたところで、差別的に（ト言つては、其所に語弊があるかも知れないが）展開されて居る世の中にあつては、所謂金力と權力とが、萬人均等といふ譯に行かないのは、また是非なきこと、せねばならぬ、先づ之れを權力の上から見たら何うであらう、世人は口を開けば、容易に權力の平等たるべきを言ふ、併しながら吾人を以て之れを見ると、世の中には、果して平等なる權力なるものが存在する、ものであらうか、既に權力といふ、其所に最早不均齊が意味さるゝのである、權利なるものが平分されて、各人皆一樣に同じ權利を得るものとしたならば、權力なる熟字は最早必要がないことになるではないか、そして残るところのものは、平等の權利のみであつて、夫れに就ての過不及的力量なる觀念は明かに

滅し去るのである。

明治の初年に當つて、所謂同權なる語が唱へ出さるゝや、社會の全般は、可なり猛烈に之れに附加したものであつた、夫れがたとひルツソオの所説の受賣であつたにしろ、因襲的な在來思想に向つて、大なる鐵鎚を加へたことも事實であつた、夫れまでは平等なる語は、單に佛説の一隻句としてのみ聞きなされたのであつたが、其が所謂一切平等は、眞なる實社會の一標語と化し、滔々乎として民心に大なる刺衝と自覺とを與へたことは、實に莫大なものであつた。

官民も同權である、男女も同權である、富者も貧者も同權であるといふ叫びは、其の時代にあつては、後年に於けるデモクラシーの叫びよりも強盛なもので、同權を口にせぬものは、新時代の人間でないと思惟されたのである、勿論同權は眞理である、併しながら權利の何たるかをさへ知ることなしに、單に一種の流行的に、附和雷同するといふことは、考へなければならぬことである。

吾人は如何なる場合に於ても、事相に對する正視を怠らぬものである、言ふまでもなく既に事相といふ以上、其が見地の異なるところに於て、其が相に多少の同異があるのは免れぬとこ

ろであらねばならぬ、故に苟も其が真相を捉へようとするには、正しき視線を以て之れに對せねばならぬのである、デ此の見地からして、現代に於ける權力の配布的關係を見るに、其が著しき偏倚性を有して居ることは、蓋し争ふべからざる事實であるのだ、ト言つて吾人は、正當なる權力の存在的意義を否定するものではない、否寧ろ正當なる權力は、人間社會の謂れなき動搖を押定するものとして、其が必要をさへ高唱するものである、ところで今日の實際に於て、斯る正當なる權力なるものが、果して如法に存在し、そして何等の闕缺なしに、理法的に運営されて居るであらうか、吾人は之れに對して、一の疑點を抱懷せずには居られぬのである。

官權は統治の様式的威力である、法律と命令との活動的素力は、取りも直さず官權なるものとして、其が生命を保つのだ、が官權は其の性質に於て、明かに法律と命令の範圍内にのみ行はるべきもので、一たび此の埒域を脱するならば、其は最早正當なる權力ではなくて、一定の權限を越えたる、一種の脅威的暴力に化するのである、デ暴力と權力とは、恰も水仙と葱との如く、形ちに於ては酷似されて居るとしても、其の實質に於ては甚しく相違したものであらねばならぬ、ところで水仙と葱とを混同視することを以て、愚人の事とするに躊躇せぬ世の中で

ありながら、権力と暴力とは、動もすれば混同されて憚るところがないのは、一の矛盾的世相と稱すべきものであらう。

支那あたりの昔しにあつては、往々袞龍の袖に隠るゝといふやうな事實があつたとか傳へられる、そこで我國などでは、官権の後ろに隠れるといふやうな事實は無いであらうか、モシ有體に之れを言つたならば、此の様な事實が、決して尠なくないとせねばなるまい、彼の思想上の壓迫といひ、言論の壓迫といひ、藝術の壓迫といひ、其が形ちは各別であつても、権力の越埒的であることは否むことが出来ないであらう、勿論危険思想に屬するものや、過激性を有する言論や、風紀を害すべき藝術などに對し、國家當局の立場として、之れに一定の控制的權力を加ふることは、素より非難すべきものではないが、危険ならざるべき思想や、必ずしも過激性でない言論や、風紀上云爲すべきものでない藝術に對して、容赦もなく官権的威力を加へるといふことは、決して聖代の祥事とは言へぬのである、最も夫れには、官憲としての敏感性も手傳ふのであらうし、極端なる事勿れ主義に捉はれたところもあるであらうが、要するところは、一種の官権濫用で、之れを取てして憚らぬといふのは、畢竟前に言つた通り、官権の後ろ

に隠るゝものでなくてはならぬ。

爲政者たり當局者たるものが、神經過敏であるといふことは、一面に於て、其が職責に忠實なることを意味されぬでもない、併しながら職責は一の職責で、其を適行するといふことは美事に相違ないが、其が一の職責を完行せんがために、一般の自由を阻碍し、世運の進展に支障や頓挫を來たさしむるが如きことは、斷じて看過すべからざるところである、然なきだに法制の運営は、動もすれば其の正鵠を失したがるものであるのに、更に其を濫用強使するに至つては、其が弊害こそ、眞に測り知るべからざるものがある、故に眞に權力をして治民的に有効ならしむるには、よく其が権限のあるところを理解せねばならぬ、そして權力の施用程度に留意し、些かにても越埒的ならざるべく控制しなくてはならない、法よく人を活かし、またよく人を殺すといふのは、這般の消息を道破したものに外ならないのだ。

貴族には一つの特権がある、之れは其の當初に於て、時勢が受授すべくしたのであるから、今日の場合に至つて、今さら急激に之れが云爲を試みても詮方ないが、彼等貴族としても、往々にして此の特権を濫用したがるのである、彼の貴族院に於ける貴族一派の言動が、如何に特

權的臭味を有して居るかを思ふたならば、彼等もまた一種の權力冒用者であることが知解されるであらう。

次に金力にあつては、其が冒用濫使より來るところの弊害は、眞に單なる權力の冒用よりも大なるものがある、元來何れの國にあつても、其が歴史の重要なページは、常に此の金力による暗影であるのは、實に其の軌を一にしたかの觀があるのは、單り吾人としてのみの感想ではなからう、金力の存在するところには、例として權力が存在する、政治的に重要な出來事があるとした場合に、何時も經濟的關係が其の經緯をなすといふことも、全く此の事由に外ならないのである。

昔の俚諺に、金力は瓦を玉にするといふのがある、之れは頗る極端なる言ひ廻しではあるが、實際に於てよく其が特色を言明したものでなくてはならない、金錢萬能を罵るところの學者達や識者等が、其が裏面に於て、よく金錢の奴隸たり、崇拜者たることに想到するならば、如何に金力が社會的に偉大であるか、分るであらう、ダカラ金力を擁するところのものは、野に居て而も王者であり、朝に立つて而も覇者であり、低きに居て而も卓出し、凡に居て而も最優者

である、滔々たる世の阿流が、相率ゐて拜金宗に投ずるのも、洵に故あるかなと言ひたくなる。

夫れかあらぬか、金力の有無は、直ちに社會の一角に一線を畫し、之れあるものと、之れなきものとは、遂に其が類同を分つに至つたのである、金力を有するものは、所謂富者として雄視的地位に居り、之れを有せざるものは、所謂貧者として雌伏的地位に立たせらるゝのであつた、茲に至つて、貧富は正しく各自の一方に類聚的生活を樹立することゝなつたので、此の場合には、猶ほ對峙的には存在せられずに、單なる地位的相違者として、社會から其の差別的待遇を受くるのみであつた。

が人間の集團が、社會として進展するゝに至つて、此の二者間の地位は、いよ／＼隔絶するに至り、終には其所に大なる溝渠をさへ現前するに至つたのである、斯うなつては、富めるものと、貧しきものとは、次第々々に色彩が判明されて來て、此の兩者間には、宛も何等かの先天的差異相があるやうにも見られて來た、そして漸次に築かれて來た社會の組織的形態の上に、明かに貧者と富者の分野が區別されるゝに至つて、終に彼等は社會的に對峙することゝなつたのである。

對峙は對立で、双者の存在が然かく明確にさるゝに及んで、兩者の運命的差別は、一步を進めて、茲に階級的差別なるものを現前するに至つたのである。

單なる富者と、單なる貧者が、一轉して有産階級と呼ばれ、無産階級と唱へらるゝに至つて、茲に双者は、社會的地位の兩横綱となつたのである、雄視と雌伏との兩極的關係は漸次に増減せらるべき或る運命を有つに至つた、曾ては雌伏の地に甘んじて居たものも、今や其が態度を改むべく自覺した時に、双者に於ける隱然たる拮抗が、一の重大なる階級争闘として現前されて來たのは、素より其の所でなくてはならない。

有爲轉變といふ言葉は、東洋的佛説のみに限らるべきではない、社會の進展し行く光景を眺めたならば、這般の事實は如實に吾人の眼裏に映じ來るであらう、吾人は今さら茲に、所謂唯物史觀の論議を持ち出すものではないが、社會の經濟的推移による情況が、時代から時代へと其の世相を變易して行く氣運に驚歎せざるを得ぬものである。

君主と人民との對立が、一轉して經濟的に、資本と勞働の對峙となつたことは、既に前に於て述べたところであるが、此の資本と勞働との對峙は、取りも直さず富者と貧者との對立であ

つて、今の世に於ける凡百の社會的問題は、悉く此の一點から醸成され出發するものである、デ此の貧富關係に於ての富者の地位は、古來の成因からして、何うしても積極的に動かされずには居ないのである、則ち彼等は、官憲が官權を使用する如くに、富者として其が金權を使用するに汲々たるものである、勿論金錢其のものには、當然金錢としての特力を有して居るのであるから、之れによつて其が何等かの特力を享有しようといふことは、素より何等の差支へもないことである、が夫れとても一步を踏み誤まつて、其が金力を濫用冒使する事になつては、疑ひもなく正當なる金力を化して、横暴なる金力とならしむるもので、其れによつて生ぜらるる弊害は、權力の冒用濫使にも勝さるところがあることを忘れてはならない。

實社會のあらゆる事相が、詮じ詰めれば經濟の一點に歸着するとしたならば、社會的金力の絶對であることも否拒する譯には行かない、たとひ金力を以て第二義に置くといふ、所謂精神生活者にあつても、理論を外にした實際の問題に逢着しては、時として後へに躍若たらざるを得ざることあらう、金錢は素より萬能ではない、併しながら其がまた萬能であることも實際であらねばならぬ、此の矛盾的事實と理論とを解くには、何うしても社會を社會としての實際

に見るより外に方法はないのである。

社會を社會としての實際に見るといふことは、社會を理論的に見るといふことをば、實際的な觀察に結びつけようとするものである、何事によらず、理論と實際とが、往々にして異なる反面を見せることがあるが、社會其のもの、觀察にあつては、殊に斯うした場合が尠なくない、ダカラ理論的精神的の方面にあつては、金力其のものを否定することは、極めて易々たるものであるが、之れを實際的物質的の方面からすれば、一概に金力其のものを否定するといふことは、不可能事であらねばならぬ、之れは經濟を以て根本義とする社會生活であることを意識するならば、當然さもあるべきことが知解されねばならぬであらう。

其は兎に角として、貧富の對立が、階級争闘史の第一頁を占むるものとせば、其が問題の眞義は、單に富と貧との問題にのみ止まるべきものでなく、あらゆる問題の關聯された、綜合的根柢問題として存すべきものである、デ此の中に於て、現代的に事相の中心となり、問題の核心となるところのものは、所謂ブルジョア階級と、プロレタリア階級の對立的交渉として取扱はるゝところのものが之れである。

現在我國では、ブルジョアを譯して有産階級とし、プロレタリアを譯して無産階級として居る、此の譯語の當否は姑く別問題として、現下に於て有産と無産との對立が、主要なる社會現象をなしてゐる事には、別に異議はないであらう、で、ブルジョア階級と呼ばれるところの、富人則ち有産階級のもは、現代生活者として、果して如何なる心術と行動の上に生きつゝ、あるものであらうか、吾人は最後の批判を下す前に、先づ彼等の上に一顧を費さねばならぬ。

實際現代の富人ほど、自己に對しての奉仕者はないであらう、其が擁するところの富は、徹頭徹尾自己のためにするのみであつて、毫末も人を利し世を益する底のものではないのである、言葉を換へて之れを言へば、彼等の富はやがて彼等の富であつて、決して社會の富でもなければ、また國家の富でもないのである、元來富其のもの、性質は、如何なる場合にあつても、社會全般の富を意味すべきであるが、現代に於けるブルジョアの富は、單に其れ自身のための富としか見られぬのである、則ち富者は其の富を以て、己れを飾ることを專念とし、社會や國家の富など、いふことには、一向無關心である、貨幣内庫に朽ちて、孩童一人を拯ふ能はずといふのは、眞に此等富人の心術を言明したものである。

富を積むものは、芥を積むものに似たりとは、實に千古の格言と謂ふべきものである。彼等の本来の面目が、如何に清廉であり潔白であるにしても、其は財貨の増殖と反比して低下するのである、たとひ百千を積み、萬億を重ねても、彼等は決して満足するものではない、無産時代に慈善家を以て目されたものが、有産時代に入ると齊しく、早く既に無慈漢と化してしまふことは、吾人が朝夕且暮に見聞するところである。

ブルジョアの横暴といふことは、可なりに強く世人の腦底に印象されて居るのである、勿論彼等に於ては、其の擁するところの富の力を恃んで、何事にもあれ、自己の欲するがまゝ、に行動せんとしつゝあることは、毫も疑ひなきところである、此の如き主我的意思は、あらゆる生物の根本意思であつて、何も單り人間界に於ける、ブルジョア階級にのみ限つたものではない、けれども金錢なる特定の物質の力を用ひて、其れと對立する一階級を征して行かうと企圖することは、ブルジョア特有のものでなくてはならない、即ち彼等は自己を便宜の地位に置くためには、如何なる方策をも採つて憚らない、たとひ其の行ふところのものが、不道德であるにしろ、夫れによつて些少の利益でも得らるゝならば、彼等は平然として之れを行ふて耻づるところが

ないのである。

道義であるとか、廉耻であるとか、正道であるとか、節義であるとか言つたやうなものは、ブルジョアに對して何等の威力をも有たぬものである、ブルジョアの見るところのものは、黄金の田と、物質の野との外には何もないのだ、人間の正義とか、人道とかいふものでは、空いた腹は膨れないと考へて居る、金錢萬能、物質至上主義で、何所までも行動さるべきブルジョアに、精神的の或物を求むるといふことは、宛ら木に椽つて魚を求むるの愚にも似たものであらう。

無手のプロレタリアに對比して、富といふ強力なる武器を有して居るブルジョアは、其が欲望を遂ぐるためには、極めて都合のよい地歩に立ちつゝあるものとせねばならぬ、既に武器を有し、優勝の地に立つ、彼等の野心は、決して起らずには居ない、其が財囊の中から、謂はゆる珍品の一個を投じさへすれば、彼等は其の欲する何物かを得るのである、二個また三個、四個また五個、斯くして彼等は、次第々々に其が環境を蠶食し征服する、此の時に當つて、先づ其が呪ひ的となるものは、彼の憐れむべきプロレタリアであらねばならぬ。

プロレタリアと雖も、決して無慾の動物ではない、況んや雲と霞だけでは、到底生活して行くことの出来ぬ現身の人間である以上、より多くの希求心は有つて居るべき筈である、が希求は無償を以て得らるべきものでなく、之れを得んためには、必ずや何等かの施設方法を執らなければならぬ、ところが悲しいことには、プロレタリアには、此の方法に出づることが出来ない、心外無一物では、殆ど手も足も出ず、問題にならぬのである。

其所へ行くと、所謂ブルジョアなるものは、思ふ通りに何んなりと出来る、原材が入用であれば之れを仕入れもする、資本が必要であれば之れを投じもする、そしてまた勞作が必要とされる場合には、一呼して之れが供給に應じられるのである、プロレタリアは自身で多くの子供を生むといはれるが、ブルジョアは其の財囊から夥しい子供が生れるのである、ところで前者の子供は、米を喰ふ虫と譬へられるのであるが、後者の子供は、之れと反對に、米でも麥でも、ドシ／＼仕入れて来るのであるから、其が便宜と不便宜は、到底お話しになつたものではない。之れも世の中の譬へに、貧すりや鈍するといふのがある、人間が物質的に貧乏をすれば、精神状態までが鈍らされてしまふといふのである、實際人間が、手も足も出ぬといふ窮地に立つ

たときには、如何なる明敏活達なもので、愚人然鈍物然となるもので、誠に是非もない次第である、之れに反してブルジョアなどは、其の富が累積され、ばされるほど、益々望蜀の念が熾烈になつて来る、一を得ては二を求め、二を得ては三を希ふ、斯くして彼等は希望の焰に身と心を焼け爛かすのであつて、之れもまた欲求の奴として、是非もなき次第であらねばならぬ。

併しながら、吾人は一面に於て、冷靜に事物を考察しなくてはならぬ、所謂ブルジョア階級であるからと言つて、何も片手落ちに、直ちに其を害物視すべき理由はないのである、貧富は經濟的世相であつて、總てが分量的に運営されて居る社會にあつては、斯る二階級の對立といふことも、また避くべからざるものでなくてはならない、世を擧げて悉くプロレタリアであり、將たまたブルジョアであることは、理法の上に有り得べからざることである、で所謂ブルジョアであるにしても、其の保持するところの富が、經濟的に或る一定の限度を超えない限りは、決して其を以て害悪であるとは言ひ得ない、勿論一定の限度内にあるものとしても、其が富を致した原由が、非違であり理不盡であり、非道であり不理であるとしたならば、決して正當の

富として取扱ふことは出来ないのである、然るに其の富が、果して其の獲得者の正當なる勞力的努力によつて得られたものか、または没することの出來ぬ社會的、國家的功勞によつて得られたものであるやうな場合にあつては、嘗に其が害惡でないばかりでなく、寧ろ尊貴すべきものとして、賞讃するもまた可なりである、之れを社會事相といふ一つの渾然體から觀るならば、プロレタリアにあつても、ブルジョアにあつても、其が常規的、正常的である以上、何れも害惡視すべき理由は存在せぬのである。

紛争は分量の上に生ずる葛藤を意味するものである、甲乙なき割賦や、上下なき分前にあつては、決して紛争などが起るべきものではない、量の多少と厚薄、そして之れを受くるもの、強制的偏倚に由つて、一方の不平と不満足は、終に紛争的チャンピオンとして起つに至るのである、斯る場合に、其の對手者が、何等の異議をも挟むことなく、無條件に其が提案を是認し、其が案件の實行に躊躇するところがないとしたならば、事件は夫れだけで解決し、紛争も同時に終熄することは言ふまでもないことである。

併しながら世の中の事は、決して斯く易々と解決さるべきものではない、一方に要求の火の

手が揚れば、一方に拒絶の水管が運ばれずには居ない、サア斯うなつては一大事、單なる利害の衝突は、一轉して感情の衝突と化し、利害と感情とが、入り亂れて、大袈裟な紛争を現前するものが常である、デ茲に言ふところの感情とは、明かに階級的感情を指すもので、最初には單純なる利害的紛争と見られたものも、仔細に詮じ來れば、取りも直さず一個の階級争闘に外ならぬのである。

成功するもの、背面には、必ず若干の犠牲者が伴はれる、此の原則は、社會の如何なる方面にも適用さるべきもので、實際上一の例外をも有たぬものである、そこで所謂現代のブルジョアなるものと、プロレタリアなるものを眺めるに、此の原則的情勢は、極めて判明に其が關係を示して居るのである、二三の極めて少數なるものを除いた、一般的多數のブルジョア階級者は、何れの時と、何れの所とを問はず、例としてプロレタリアを犠牲に供して居ることは、決して吾人の誣言ではないのである、古來の格言に、弱肉強食といふのがあるが、此の言葉などは、全くブルジョアとプロレタリアの關係に恰當したものである。

政治を根據とした政權が、時として絶大な威力を示すことは、前にも述べた通りであるが、

金力を根據とするところの金權なるものも、また大なる威力を有するものである、加之ならず金權にあつては、政權などが、到底企及することの出来ない、一種の魅力をさへ有して居るのであるから、其が對他的威力の強大であることは、蓋し言語に絶したものであるのだ、彼の金錢は魔物であるといふ俚諺の通りに、金力の一たび動くところには、萬物寂として聲を潜むるの概があることを思ふと、吾人は心竊かに、懼然たるを禁じ得ぬものである。

人生的に、また社會的に、怖るべき威力ある武器を有つところのブルジョアは、其を唯一の恃みとして、社會のあらゆる方面を蹂躪して居るのである、殊に彼等の階級に於ける代表者とも目すべき、所謂富豪なるものに至つては、其が非違、陋劣、頑迷、不徳なること、實に言語道斷と言はねばならぬ、元來富豪なるものは、經濟的には何等の價値があるべきものではない、が社會の一階級として、其が在立を認められて居る以上、其所に一つの社會的意義を有しなればならぬのである、徒らに弗函の持主であり、金庫の番人であり、貨幣の臣僕であることのみが、決して彼等の能事ではない筈である。

ところが之れを我國の所謂富豪なるものに觀るに、殆んど其の全體が、さながら符節を合したやうに、揃ひも揃つて、不徳頑鈍であるのには驚かざるを得ない、勿論世界の何れの國にあつても、富豪なるものに、推稱の値を有して居るものはないが、殊に我國の現代的富豪にあつては、其の弊事が一層甚だしいのである。

生民としては、あらゆる理想を併有したかの如くに見ゆる富豪が、日常怨嗟と嘲笑の眼を以て送迎されて居るといふのは、果して何等の原由を存するものであらうか、此の疑問を解くがためには、遺憾ながら吾人は、より多くの解答資料を有して居るものである、吾人は世の所謂ブルジョアなるものに對して、何等の恩怨をも有するものでなく、隨つて其を品階する上に、毫末の依估的偏頗を用ふるものではない、が事實は何所までも事實であつて、たとひ吾人にして之れを語らぬにしたところで、一般に周知さるゝことであるとしたら、また是非なきこと、せねばなるまい、則ち吾人は言説の順序として、茲に一應彼等の缺陷を剔抉すべき必要を餘儀なくさるゝものである。

現代に於ての富豪は、其の質に於ては、確かに低級の地位に置かるべきものである、然るに彼等が、傲然尊居して、一廉の紳士の體面を保持して居るのは、之れもまた金力其のもの、餘

光に外ならぬのである、彼等にして若しも金力より分離し、其が裸面を平露せしめたならば、彼等は決して社會の上流者として安居さるべき筈のものではないのである、西洋あたりの俚諺に、愚者も金を持っては賢者と見えるといふのがあるが、成程實際に於て、金持ちと稱せらるゝものが、一寸見にサモ伶俐らしく見えるのは妙と言はねばならぬ、親の光りは七光り、金の光りは千光りで、金さへあれば馬鹿も利巧で通り、愚者も賢者として通つて行く世の中こそ、極めて異なるものとせねばなるまい。

そは兎に角として、富豪の徒は好んで權謀術策を事とするものである、此の點に於ては、彼等はプロレタリアなどに比して、より以上の知能を有して居るやうであるが、事實に於ては必ずしも然うとは言へぬのである、元來富豪とまで呼ばれるものは、素より其が生活には何等の不自由が無いものばかりである、否不自由でないばかりでなく、實に有り餘つて遣り場に困じ果て、居るといふ有様である、ダカラ彼等には、生活上の顧慮は少しも要しないので、其が頭腦の中には、或ることを考ふべき、全幅の餘裕を有つて居るものである、故に彼等は、此の全部的餘裕を以て、生活以外のあらゆる欲求に策應すべく考慮するのであるから、其の考案劃策

するところが、多くの場合に、プロレタリアをして後へに睦若たらしめ、傍觀者をして、アツと言はしむる底のものを表出するのである。

そこへ行くと、プロレタリアは、決して富豪の夫れには敵すべくもないのである、彼等には居常生活なる一大問題が提示されて居る、そして此の問題は、實際に於て、彼等プロレタリアの全頭腦中に於ける、全部の分量であるか、若しくはより以上に、更に其の全部にも超過したものでなくてはならない、ダカラ彼等にあつては、實生活以外のものとしては、一厘一毫も其を考慮すべき餘裕を有せぬものである、プロレタリアの罪惡が、ブルジョアの夫れに比して、極めて當面的のものゝみであり、そして比較的罪のないものであり、また淺薄的のものであるといふことは、全く此の關係によるものである。

支那の孔夫子は、小人閑居して不善をなすと言つて居る、爲すことなしに、ブラ／＼して居る遊食の徒に、住々善からぬことが企圖されるといふのである、之れは實際の事であつて、よく人間の短所を言明したものとせねばならぬ、ところが今のプロレタリアの如く、行住坐臥は言ふまでもなく、寢て居る間の夢にさへ、生活の問題に惱まされて居るといふ境涯にあつては、

悪いことなどを考へて居る餘地がない、イヤ音に悪いことばかりでなく、たとひ善いことであるにしても、到底之れは考へられぬのである、だからプロレタリアにしては、よし悪いことであるにしても、直接又は間接に、必ず生活を對象としたものであるのを例とする（勿論多くの中に、二三の例外はあるにしても）然るに富豪其のものにあつては、實生活の上には、何等の企畫を有せぬ代りに、夫れ以外の或るものに向つて、全幅的考慮と策略を運らすのであるから、其の考慮が緻密であり、其の策略が巧妙であることは言ふまでもない、そして夫れに加ふるに、金錢物質の自由があるところから、彼等の遣口はいつも徹底的であると同時に、極めて深刻的であり惡辣的である。

故に我國に於ける富豪の多數は、其が平生に於て、一般の非難と攻撃とを受くべき行爲を敢てして憚るところがないと言つても、決して過言ではないのである、則ち彼等は、先づ官憲と結託することを以て、其が作術の第一階梯とする、そして其の事が成ると同時に、一躍して所謂御用商人となるのが常例である、御用商人といふのは、政府の干與する、諸官廳公署の直轄に屬する、供給的納入の用務を辨ずるものであつて、其が規模と數量の大なる點に於て、民間の

供給納入に比し、最も多大なる利潤を得べきものである、併しながら單に之れだけでは、敢て彼等を以て非違者呼ば、りをする譯には行かない、何故であるかといへば、諸官廳公署としても、其が職務を執行するためには、各種の物品をも要するし、勞役をも要するのであるから、其を一定の當業者に受負はするといふことも、素より必要の事であり、また當然のこと、しななければならぬ、そして斯る場合に、所謂受負人なるものが、打算的に其が供給納入に應ずることも、自由契約の本義として、何等非難すべきものがないからである。

併しながら之れは素より表面の事で、其が實際に至つては、其所に實もあり蓋もあるのである、諸官廳公署と、納入受負者の間柄が、如實に理法的であり、公明的であり、自由契約的であるならば、何等云爲すべき辭柄は起り得ない、が事實は決して然かく如法的のものではなく、之れを通例として、官廳と公署と、そして受負人の間柄には、必ずや若干の情實關係が生ずるのである、殊に所謂御用商人との間に於ては、不言不語の冥約の裡に、より一層大なる情實が纏絡さる、のである、此の事は、單に吾人一己の所言ではなく、既に業に一般の周知するところであり、また何人と雖も、日常の新紙上にて、絶へず斯る事實を知り得るところであらう。

如上是明らかに、世の富豪者が、故意に官憲と結託して、不正不義の暴利を貪るものであつて、富の悪用も茲に至つて極まれりといふべきものである、彼の我國に於ける富豪の横綱として目される、三井であり三菱であつても、決して此の御多分には洩れないのである、今日巨億を以て數へらる、彼等の富が、政府當路者と結託したる結果であることは、十指の指さす事實であらねばならぬ、猶ほ此の他にしても、或は大倉といひ、或は高田といひ、或は鈴木といふやうな手合にあつても、みな之れ金箔附きの御用商人として、おのがじ、暴利の均霑に浴しつあるものでなくてはならぬ。

之れを順理の數的に算るも、また國家財政の實際に徴して見ても、國民が政府に納入せる租税の大部分は、取りも直さず官人の手から、受負者としての富豪の手に渡されてしまふのである、斯くして富豪の富は、年一年と増加して行くのである、之れは所謂御用商人としての事柄であるが、其他に於ける無銘商人としての富豪等も、其が營業部員として、好んで官吏の古手を聘用する、そして夫れ等の徒に向つて、異例の高給を與へ、異數の優遇を與ふるのであるが、役にも立たぬ彼等を、然かく重用する所以のものは、其所に深長なる意味があらねばならぬ、

則ち夫れは外でもない、彼等の身に有するところの、官海の夤縁を利用して、以て官憲に連絡を付けようとすのである、此の一事について考へて見ても、彼等富人が、如何に其の富を暴用すべく腐心しつゝあるかが窺はれるではないか。

之れを要するに、我國の富豪としては、其が富を作れる歴史の上に、何等かの秘密を有せぬものはないと言つて宜しいのである、事實彼等として、公明なる施策や、正當なる手段で、其の富を作つたものは、一人もないと言つても誣言ではないのである、銀行泣かせや、セメント喰ひや、鑛毒パチルスや、船幽霊どもは其の一例だ、此の點からして言ふと、彼等の富其のもの、悉く之れ罪惡の結晶であると言つても、彼等は些の辯解をも持たぬであらう。

富豪の心事が、正に斯の如きものであるとしたならば、其が精神に於て理性を缺き、正義や人道に無關心であるといふことも、素より其のところではなくてはならぬのである、之れを事實に見るも、彼等には奉公の精神が乏しい、そして何等公共の事に盡すところもないのである、が己がための私利を營む點に於ては、實に目から鼻へ抜ける底のものであつて、造次顛沛にも之れを忘るゝことがない、則ち彼等は常に營々として、脱税のことをのみ考へて居る、そして

或者は、一種の財團法人をさへ設立して、其を以て脱税の機關として居るものさへある、また中には、自分一家の事業に對して、特に名義ばかりの株式會社として、一種の脱税を行つて居るものもある、夫れからまた或る富豪は、相続税を脱税する方法を案出したといつて、密かに鼻蝨かすものもあり、更に其の甚だしきものに至つては、最も直接的な行動に出で、稅務官吏を買収したなどの事實もあると言はれて居るものもある、此のやうな心的作用と、行動とを持つ彼等であるから、眞に社會公共のために、其の私財を投ずる意氣のあるものがないのは、素より當然の事と言はなければならぬ、彼の公共のために異常の力を盡したカーネギーや、己れ一個の力を以て、よく一つの大學を起したロックフェラーの如きものが、我國に見當らないのは是非なきこと、しても、より以上の惡德のみを事とする富豪の多きに至つては、眞に洪敷に堪へぬ次第である。

我國に於ける今日の現状は、何れの方面にも行き詰まつた世相を呈して居るのである、然るに富豪貴族等は、依然として高枕安臥の逸樂を貪つて居るのである、多くの世人が、家屋の拂底に困頓して居るのを見ても、彼等は宏大なる山林的邸地を開放しようとはしない、否啻に夫れ

ばかりではなく、倍々其の別莊を宏大にすべく心を悩まして居るのである、都市の道路の一線だに、彼等の手によつて改善されたことは聞かぬが、彼等が自邸の庭園を美しくするために、數萬數十萬の大金を擲つたといふ事は、往々にして吾人の耳朶を打つ所である、また世間の無産者が、生活難の爲に妻帯さへ出來ぬのに、彼等は多數の蓄妾を敢てして憚らない、哲人フランクリンは、富者としての取るべき道は、正直と勤勉であると言つたさうだが、我國の富豪に、果して此の常道に合したものがあつたらうか、吾人をして之れを言はしむれば、甚だ遺憾千萬の事ではあるが、我國の富豪は、事實不正直であり、そしてまた怠惰である、之れは正しくフランクリンの所言を逆にしたもので、富者道德の揚らぬのも、素より故あるかなであらう。

カーネギーは、富者たるべき希望を有つ青年に向つて、飲酒と投機とを嚴戒したといふことである、して見ると彼地にあつては、富豪は少なくとも此の信條の下に立つものと言つて宜しからう、ところで我國に於ては何うであらう、所謂富豪と稱せらるゝもので、酒を飲まぬものは、先づ無いと言つても差支へはあるまい、投機としても其の通りで、我國の富豪は、好んで投機に出るのである、則ち不正直であり、怠惰であり、酒好きであり、投機好きであるの

が、我國の富豪の常態であるとするれば、我國の富豪は、富者としての、あらゆる悪徳を兼備したものだと言はなければならないのは、眞に心細い限りではないか。

政商が官憲など、臭事を談合するには、常に彼の待合などに於てするのを例として居るのである、則ち酒を飲みながら、徐ろに何事かを謀り合ふといふのが、彼等の常套手段であつて、斯る間に、政府の機密を探り出し、之れを投機に利用するといふのが、彼等富豪の最も得意とするところのものである、試みに頭を回らしたならば、多くの良民が、孜々營々として、其の業に務めつゝある間に、彼等富豪は、酒を飲み、遊蕩を盡しつゝ、或は脱税を行ひ、或は罪惡を策して居るのである、吾人が前に、富豪は國民の怨嗟に送迎されて居るものであると言つたのは、斯うした非理非道の行爲が演じられつゝあることに起因するものである。

が世の中に於て、富豪や貴族ほど厚顔であり、傲慢であるものはない、一般の國民が、如何に怨嗟の眼を以て送迎しようと、また如何に非難攻撃的の的としようと、其様なことには一向介意する所がない、そして常に傲岸なる態度を以て世人に對し、紛々たる貧き下人よく何事かを爲さんやと言つた調子で、白眼で他を睨み廻す所は、眞に三斗の嘔吐を催はす種であるのだ、

ところで世の中には、随分如何がはしい學者や識者達があつて、此等の徒は、互ひに牒し合はせでもしたかのやうに、鼻尖を揃へて、富豪の前に稽首再拜するのである、そして一文半錢の御利益にありつくべく、阿諛追従の限りを竭し、御無理御もつとも百曼陀羅を並べて、無性矢鱈に煽り立てるので、富豪はズツと悦に入り、乃公ならではない、途方もなくお高くなつてしまふのである、斯うなつては、富豪や貴族は正しく低能者か我利々々亡者となり果せて、モウ手も足も付けられぬものになつてしまふのだが、御本人としては、一向お氣が付かれぬのであるから、天下は泰平であると言はねばなるまい。

併しながら、今の世の中は、富豪をして、然かく安閑蕩逸の中に、其が生涯を送らしむべきほどにまで寛大なものではない、徒らに怨嗟を以て彼等を送迎する一般の眼が、一たび其が視線の方向を轉じた時には、彼等富豪の逸樂の夢は、警鐘一打の響きと共に、愕然として破れねばならぬのである、殷鑑遠からず、之れを舊ロシアに見よ、彼等は沈黙の中に横たはるところの或る運命を想像した時に、胸中一道の冷感を覺えずに居られるであらうか、寄語す現代の富豪達よ、御身等が傲然として他に對する態度と、恬然として不正の利潤を希ふ心事と、平然と